史跡

福山城 XI

平成５年度　発掘調査概要報告

松前町史編集室
~~8.1.25~~
12.4.1
265

1994・3

北海道松前町教育委員会

例　　言

1．本書は、平成５年度に松前町が実施した史跡福山城環境整備事業に伴う遺構確認調査の概要を報告するものである。

2．本調査は、平成５年６月から平成６年３月までの間、次の体制で実施した。

調査主体者：松前町教育委員会　教育長　柳田由孝

調査担当者：　　文化財課長　久保　泰

調　査　員：　　調査係長　前田正憲

調査事務局：松前町教育委員会文化財課

調査作業員：赤松順子、石井トメ、川村節子、河田敬子、小西美佐子、斉藤秋子、斎藤雅子、佐藤伸子、佐藤美恵子、佐々木紀子、惣蔵則子、滝沢節子、中江節子、林　文子、福井栄子、宝福洋子、松川笑美、三浦文子、目谷とむ子、目谷みよ子、渡辺留理子、和田映子、藤田　仁

3．本書の編集、執筆、写真撮影は前田があたった。

4．遺構実測図の整理・トレースは赤松があたった。

5．遺物実測図の作成・トレースは川村、河田、斎藤、松川、三浦、和田があたった。

6．調査期間中、次の諸機関各位から御指導御助言をいただいた。（敬称略、順不同）

文化庁記念物課：加藤允彦・服部英雄、北海道教育庁文化課：木村尚俊、昭和女子大学：平井　聖、神戸産業大学：近藤公夫、東京大学：渡辺達三、札幌学院大学：桑原真人、元国立資料館：浅井潤子、山形大学：仲野　浩、北海道開拓記念館、佐賀県教育委員会文化財課、佐賀県立九州陶磁文化館、有田町教育委員会、愛知県陶磁資料館、瀬戸市歴史民俗資料館、（財）瀬戸市埋蔵文化財センター

7．調査に関する諸記録、資料は松前町教育委員会が保管する。

目　　次

序　　文 …… i
例　　言 …… iii
目　　次 …… Ⅳ
挿図目次 …… Ⅳ
図版目次 …… v
表 目 次 …… v
凡　　例 …… v
Ⅰ．はじめに
　1．調査の経緯 …… 1
　2．調査の目的と成果 …… 1
　3．調査の方法 …… 3
Ⅱ．調査結果
　1．出土遺構
　　1）外堀関係
　　ⅰ土層堆積状況 …… 5
　　ⅱ外堀の規模と構造 …… 9
　　2）三本松土居周辺
　　ⅰ近代遺構 …… 11
　　○野面積石垣 …… 11
　　○溝 …… 11
　　○石段・石垣 …… 12
　　○柱穴列 …… 14
　　○桝 …… 15
　　○その他の遺構 …… 15
　　近世遺構 …… 17
　　○三本松土居 …… 19
　　○土居石垣根掘 …… 19
　　○外堀二の丸側土居 …… 20
　　○井戸 …… 21
　　○時期不明遺構Ａ・Ｂ …… 21
　　3）天神坂門 …… 21
　　4）遺構小括 …… 23
　2．出土遺物
　　○陶磁器 …… 27
　　○金属製品 …… 44
　　○木製品 …… 44
　　○石製品 …… 44
Ⅲ．まとめ …… 48

挿図目次

第１図　史跡位置図 …… Ⅵ
第２図　調査区位置図 …… 2
第３図　調査遺構全体図 …… 4
第４図　外堀・土居セクション図及び土居トレンチ平面図 …… 6
第５図　外堀平面図・セクション図・エレベーション図 …… 7
第６図　三本松土居周辺近代遺構平面図・セクション図・コンター図(1) … 10
第７図　三本松土居周辺近代遺構平面図・セクション図・コンター図(2) … 12
第８図　三本松土居周辺近代遺構(排水施設）平面図・セクション図(3) … 14
第９図　三本松土居セクション図 …… 16
第10図　三本松土居及び周辺近世遺構平面図･セクション図･エレベーション図 …… 18
第11図　ＳＦ・ＳＧライントレンチ平面図・セクション図 …… 20
第12図　天神坂門平面図・セクション図・

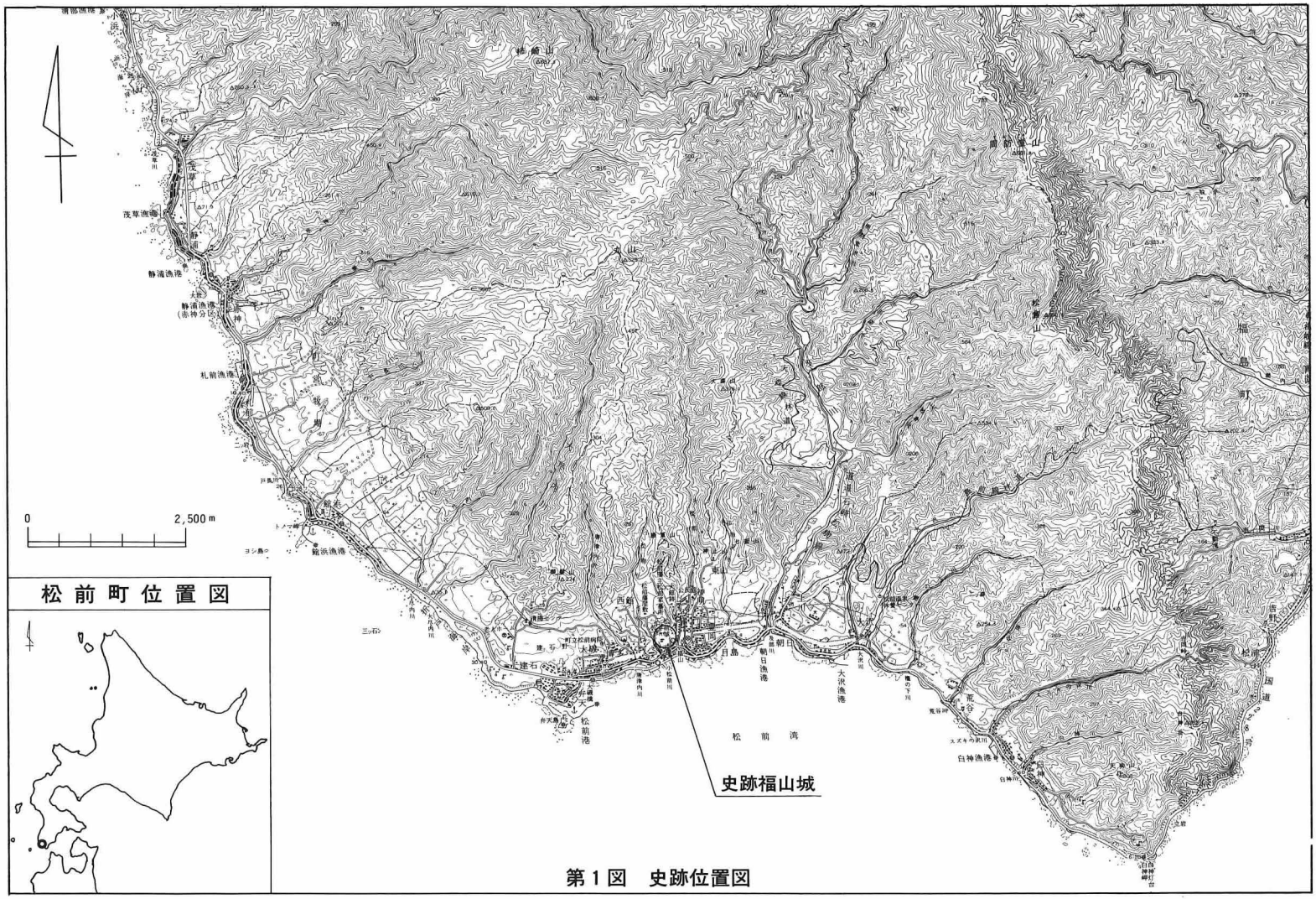
エレベーション図 …… 22
第13図　手塩皿・蓋・その他(1～15)…… 26
第14図　碗蓋(16～21) …… 28
第15図　碗蓋・碗(22～35) …… 29
第16図　碗・盃(36～55) …… 30
第17図　皿・その他(56～67)　…… 31
第18図　皿(68～74) …… 32
第19図　大皿(75) …… 33
第20図　大皿(76)　…… 34
第21図　瓶・その他(77～87)　…… 35
第22図　急須・陶器類(88～101)　…… 36
第23図　陶器類(102～115) …… 37
第24図　甕・徳利(116～121) …… 38
第25図　擂鉢(122～126) …… 39
第26図　瓦(1～５)　…… 40
第27図　金属製品(1～29)　…… 41
第28図　木製品(1～２)　…… 42
第29図　石製品(1～８)　…… 43
第30図　絵図(1) …… 48
第31図　絵図(2) …… 49
第32図　絵図(3) …… 50
第33図　絵図(4) …… 51
第34図　絵図部分拡大(1) …… 52
第35図　絵図部分拡大(2) …… 53

図版目次

図版１　外堀調査状況(1) …… 57
図版２　外堀調査状況(2) …… 58
図版３　外堀完掘状況 …… 59
図版４　外堀セクション …… 60
図版５　石垣細部 …… 61
図版６　外堀北側トレンチ …… 62
図版７　三本松土居調査状況 …… 63
図版８　三本松土居セクション …… 64
図版９　三本松土居周辺近代遺構(1) …… 65
図版10　三本松土居周辺近代遺構(2) …… 66
図版11　三本松土居細部及び橋 …… 67
図版12　三本松土居周辺完掘状況 …… 68
図版13　外堀より搦手へ延びる石垣…… 69
図版14　土手及び土塀 …… 70
図版15　福山城以前及び不明遺構 …… 71
図版16　天神坂門調査状況 …… 72
図版17　天神坂門門柱細部 …… 73
図版18　天神坂門石垣細部 …… 74
図版19　手塩皿・蓋・その他(1～21)　… 75
図版20　蓋・碗類(22～40)　…… 76
図版21　杯・皿・その他(41～67) …… 77
図版22　皿・大皿(68～76)　…… 78
図版23　瓶・急須・その他(77～93) …… 79
図版24　陶磁類(94～112)　…… 80
図版25　鉢・甕・その他(113～121) …… 81
図版26　擂鉢・瓦類(122～126・１～5)‥ 82
図版27　金属製品(1～28)　…… 83
図版28　木製品(1～2)石製品(1～8)　… 84

表目次

表　1　出土遺物集計表 …… 3
表　2　出土遺物観察表 …… 44


0
2,500 m
松前町位置図
史跡福山城
松前湾
茂草漁港
静浦漁港
札前漁港
白神漁港
朝日漁港
大沢漁港
松前港
建石
目島
唐野
松前
国道
福島町

第１図　史跡位置図

Ⅰ　は　じ　め　に

1．調査の経緯（第１．２図）

史跡福山城の遺構確認調査は、昭和55年度から開始し今回で11回目を数える。これまでの調査により種々の遺構の位置・構造が以下のように明らかになってきた。

年　度	調査地点	確　認　遺　構	調査面積
昭和55年度	試掘12箇所	内堀・外堀	146㎡
昭和58年度	本丸	内堀・空壕	270㎡
昭和59年度	本丸	内堀・空壕	850㎡
昭和60年度	本丸	本丸表御殿	188㎡
昭和61年度	本丸	搦手門・御多門	170㎡
昭和62年度	本丸	本丸表御殿・排水溝	880㎡
昭和63年度	本丸	本丸表御殿・西塀石垣・排水溝	1,500㎡
平成元年度	本丸	本丸表御殿・西塀石垣・西土手・西門跡 御導場跡・地下蔵様遺構・空壕跡・外堀	1,800㎡
平成２年度	本丸	南西隅櫓・杭列・井戸・外堀	300㎡
平成３年度	三の丸東部	石垣・外堀・馬坂周辺石垣	200㎡
平成４年度	三の丸東部	外堀・馬坂門・橋・御鉄砲置所・御番所・ 七番御台場・土居・東部石垣・杭列・側溝・水路跡溝跡	1,980㎡
平成５年度	二の丸・三の丸東部：外堀・三本松土居・天神坂門		1,148㎡

以上のように各年度の調査を終え、これまでに本丸及び本丸周辺の主要遺構を調査し、さらに三の丸東部及び外堀の一部を調査し終えた。

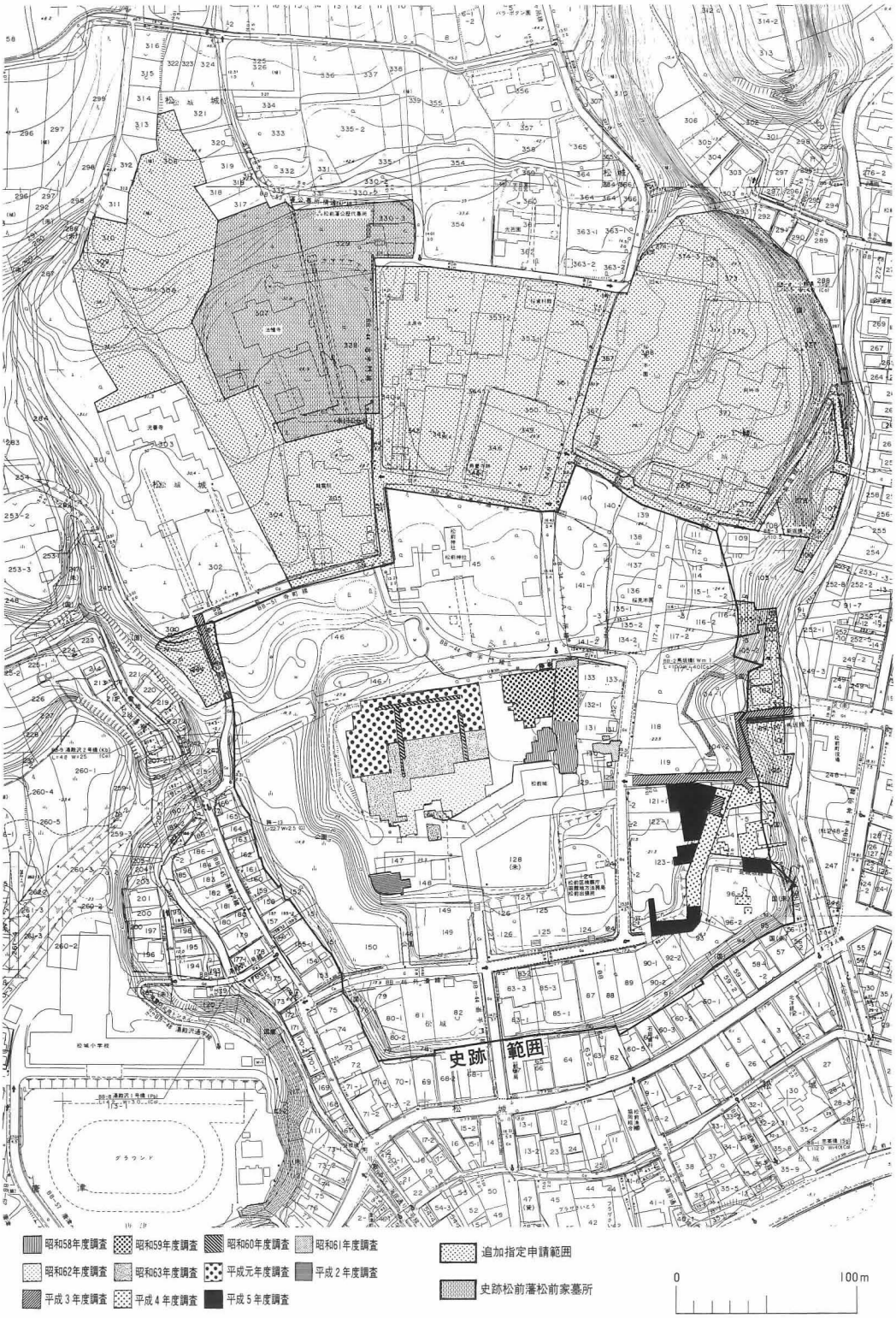
さて、史跡福山城の保存管理計画は、昭和50年に策定された「史跡福山城保存管理計画書」で示され、この基本構想に基づいて実施してきた。この計画書では、昭和51年度より20箇年とし、公有の建造物・工作物の撤去、民有の土地・建造物・工作物の買収・撤去、城跡遺構の調査、修復および環境整備を行うために、第一次計画として昭和51年度～昭和60年度までの10箇年で本丸・二の丸を主体に整備を進め、第二次計画として昭和61年度～昭和70年度（平成７年度）までの10箇年で三の丸を主体に整備を進めるものであった。

買上げ事業と建造物保存修理事業が一段落し、これからの本格的整備に向けて、平成２年度に史跡整備検討委員会を組織した。現在は５名の先生方に建築・造園・文献など様々な角度から史跡整備について御指導を頂戴している。平成４年度の調査が上記のとおり行われた。そして平成４年度の検討委員会では、外堀と天神坂、三本松地区周辺の整備について御指導をいただき、文化庁・道教育委員会と協議のうえ、今年度の遺構確認調査はこの地域を中心に行うことになった。

また、今年度史跡北側の向背地にある、福山城と盛衰をともにした寺町について、指定地拡大（追加指定）申請を行った。

2．調査の目的と成果（第３図）

今年度の調査は、三本松土居を中心とした二の丸と、三の丸東部地区を整備復元するための基礎的データを得るための遺構確認調査である。そのなかには、橋の位置の確認・外堀二の丸側石垣天端の把握・外堀内側土居石垣・天神坂門の確認などの目的があった。調査地域は二の丸南東部から外堀にかけて調査対象としたが、三本松土居周辺の遺構が予想以上に深度があり、文化庁の指導により、1)外堀の継続、2)三本松土居及び周辺、3)天神坂門の調査にとどまった。


史跡範囲
昭和58年度調査
昭和59年度調査
昭和60年度調査
昭和61年度調査
昭和62年度調査
昭和63年度調査
平成元年度調査
平成2年度調査
平成3年度調査
平成4年度調査
平成5年度調査
追加指定申請範囲
史跡松前藩松前家墓所
0
100m

第2図　調査区位置図

今年度の調査の結果、馬坂を登り橋をわたって馬坂門をくぐり、外堀の橋をわたり三本松土居を登り搦手門に至る道筋の遺構が明らかになることで、昨年度の調査で明らかになった三の丸東部の七番台場跡、御番屋、御鉄砲置場等の遺構と合わせ、この周辺の遺構全体を明らかにすることができた。また、絵図との関係では、発掘調査で三本松土居周辺の遺構、特に外堀にかかる橋の位置と三本松土居南側の土居石垣の位置と方向が確認されたことと、天神坂門の位置と規模が確認されたこと、さらに外堀の南東隅が確認されたことにより、絵図と照合することが出来、絵図に書かれた寸法が外堀の規模など部分的に概ね一致していることが確認できた。このことにより、今後の調査および整備の上で、絵図との対比は遺構の規模について重要となる。

来年度の調査については、二の丸南東隅の太鼓櫓を始め、太鼓番屋、御土蔵、番手居小屋、搦手門（巽門）及び搦手門周辺土居が調査の対象となろう。

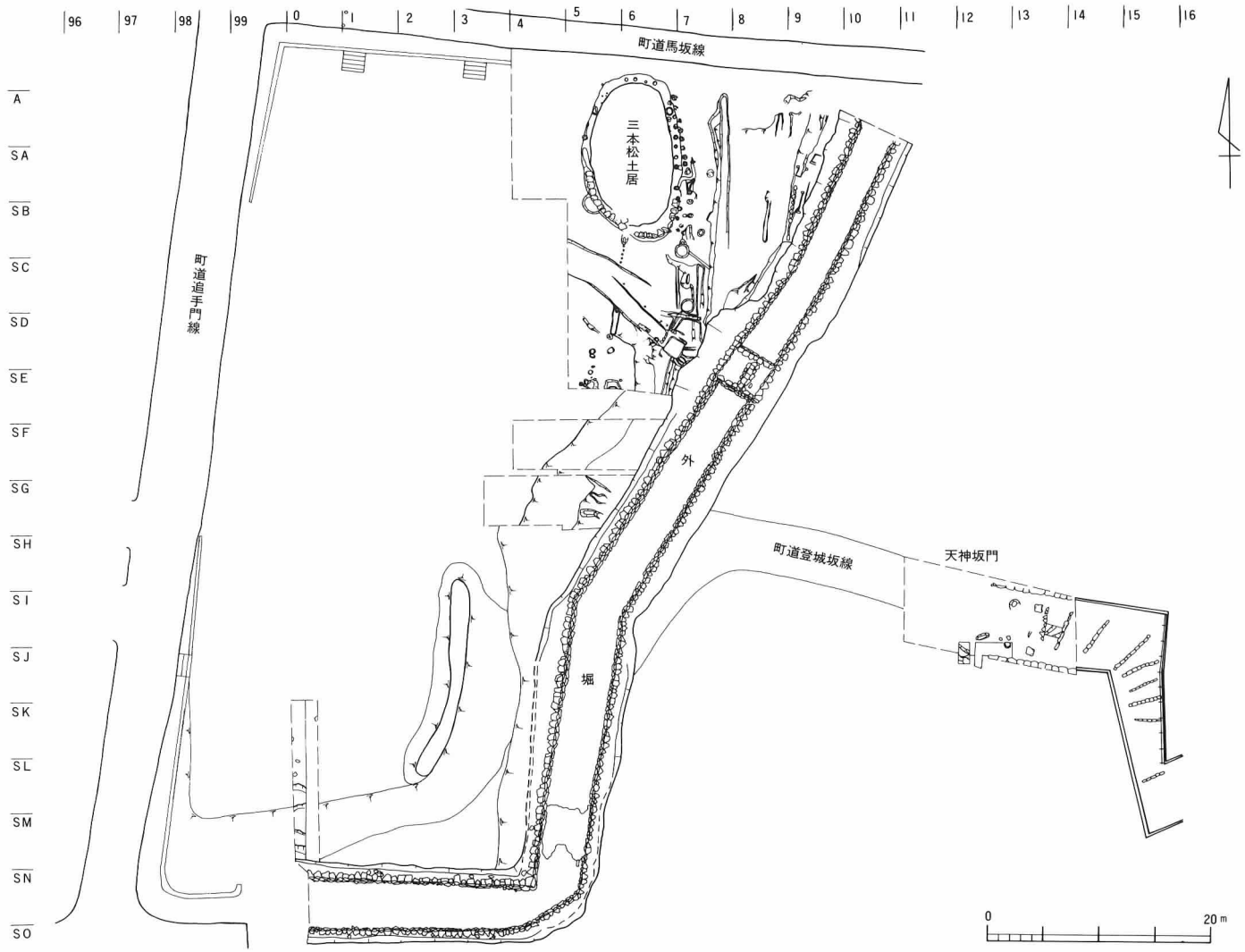
3．調査の方法

本年度の発掘調査区は、昨年度の発掘調査区に隣接しており、従前の調査区の呼称を継承して使用し、整合性を図っている。出土した遺物は、各層位ごとに取り上げ、遺構については、平面図・断面図・立面図等を必要に応じて作成した。

本年度の発掘調査は６月から本格的な調査にかかった。調査に先立ち、調査地に残されている樹木の移植を行い、まず外堀の調査から開始した。バックホーにより、明治期に埋め込まれた土砂の除去を行い、底部に堆積しているヘドロ層を人力で除去し、この排出にベルトコンベアー３台を用いた。また、排土運搬には２ｔトラックを使用した。ベルトコンベアーの電源を確保するため仮設配電盤を設置した。７月に入り三本松土居の周辺部の調査を開始した。ベルトコンベアーと２ｔトラックは継続して調査終了まで使用した。三本松土居の周辺部は最近まで住宅が建っており、そのコンクリート基礎などの建築廃材が土中に包含されており、発掘を煩わした。そして、９月には天神坂門の調査に入り、簡易舗装をバックホーを用いて剝がし、調査を行った。以上のように６月から始まった調査は10月上旬に終了し、３月まで整理作業を行った。

陶磁器類		17,408点			
磁器 4,204点	碗類	2 114点	陶器 3,050点	碗類	104点
	皿類	1,467点		皿類	178点
	鉢類	219点		鉢類	64点
	徳利類	220点		徳利類	10点
	その他	184点		甕類	970点
表採および石垣裏込め砂利混入陶磁器		10,154点		壺類	196点
				擂類	466点
				その他	1,062点
瓦		1,914点	石製品 17点	硯	6点
ガラス		129点		砥石	5点
木製品		40点		石盤	5点
鉄製品		396点		石筆	1点
明治以前銅銭		31点	土器		93点
			石器		8点
遺構出土遺物 9,882点　その他出土遺物 10,154点　総出土点数 20,036点					

表　1　出土遺物集計表


96
97
98
99
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
A
SA
SB
SC
SD
SE
SF
SG
SH
SI
SJ
SK
SL
SM
SN
SO
町道馬坂線
三本松土居
町道追手門線
外
堀
町道登城坂線
天神坂門
0
20m

第3図　調査遺構全体図

II 調 査 結 果

1．出 土 遺 構

1) 外堀関係

i 土層堆積状況

（K．W．：城取り壊し明治７～８年　石垣石抜き取り　外堀埋立　グリーンタフ砕片）

・０ライン土層堆積状況（第４図、図版４、６）

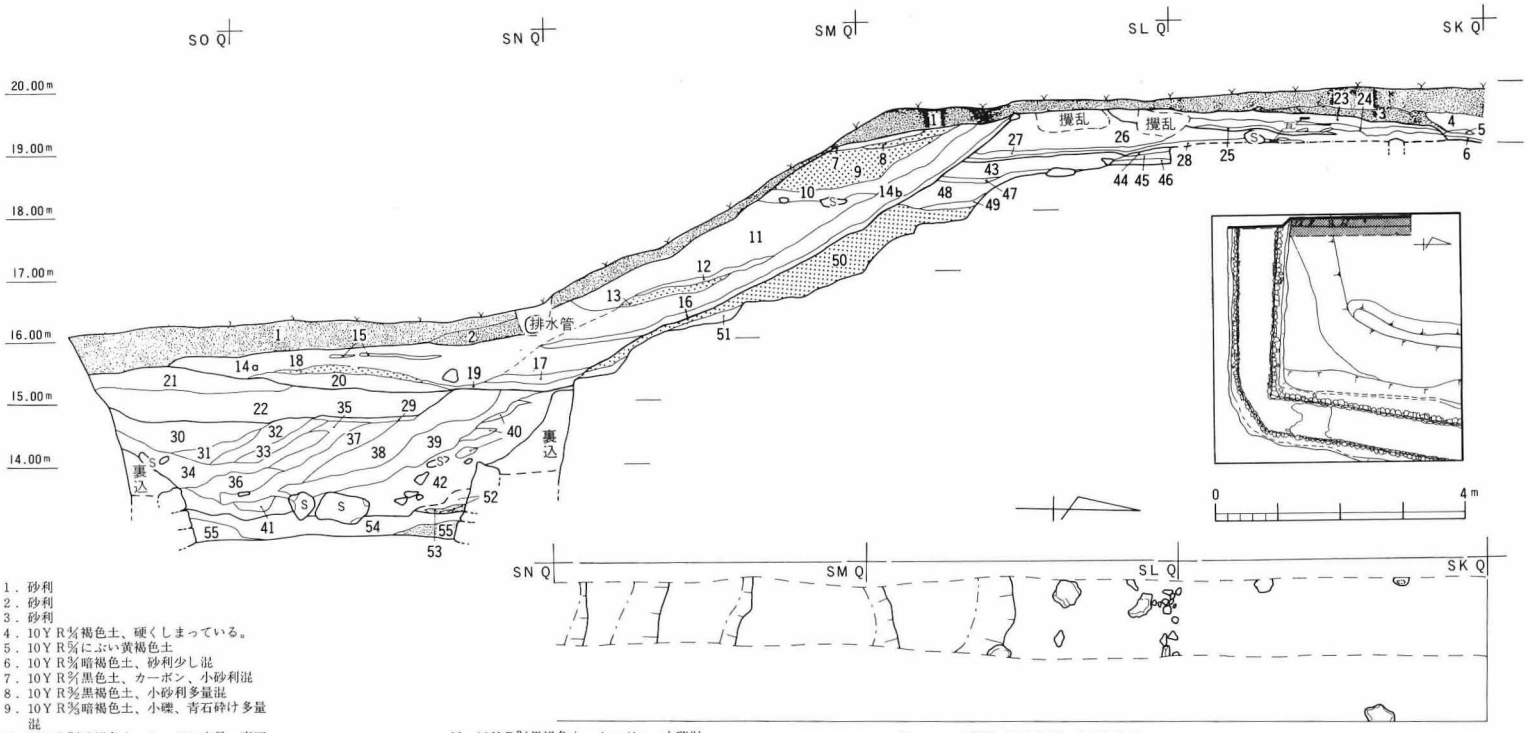
０ラインに２m幅のトレンチを掘り、二の丸側から外堀にかけての土層堆積状況を観察した。その結果各土層の時期は、概ね次のように考えられる。

１～６：昭和
７～20：大正～昭和にかけて２～３時期
21～22：明治～大正の１時期
23～42：明治７～８年の１時期（26～28は明治以前の可能性がある。）
43～55：明治以前

土層26～28)については、次年度の調査で明確にしたい。25)のグリーンタフの砕片は明治7～8年の城取り壊し時に、二の丸周辺の石垣石を何らかの理由で再加工したものと思われ、これより上位に、この様にグリーンタフ砕片のみ堆積した土層は無い。なお、築城時の石垣石を流用したと思われる近代の石垣は、近世のものよりはるかに小型である。また、築城時に排出されたグリーンタフの砕片は、44.50)などが挙げられ、特に50)は川砂利と共に二の丸法面を形成し、外堀が埋立られるときには、42)として堀内に最初に流れ込むことになる。三の丸側から流れ込む埋土にはグリーンタフ砕片が含まれない。これは、築城時に砕片をすべて片付けたか、砕片上に土を被せ、外堀を埋立る時にこの土を削らなかった、などが考えられる。平成４年度外堀調査時のSPa－a′ライン(史跡福山城X：PP.14）のセクションでは、大正10年の埋蔵金捜し時の排土（岩盤砕片)が、堀埋立後の凹地に堆積していた。大正10年以前には、外堀部は部分的に凹地になっていたことが考えられる。ただし、今回の土層堆積状況では、29)が非常に堅く、下位の土層をフラットに削平しており、おそらく道路として使用していたものと思われる。また、30)の上面がフラットなのは、明治７～８年に堀を埋立た以降の削平によるもので、30）とともに、29の一部も削られた可能性がある。

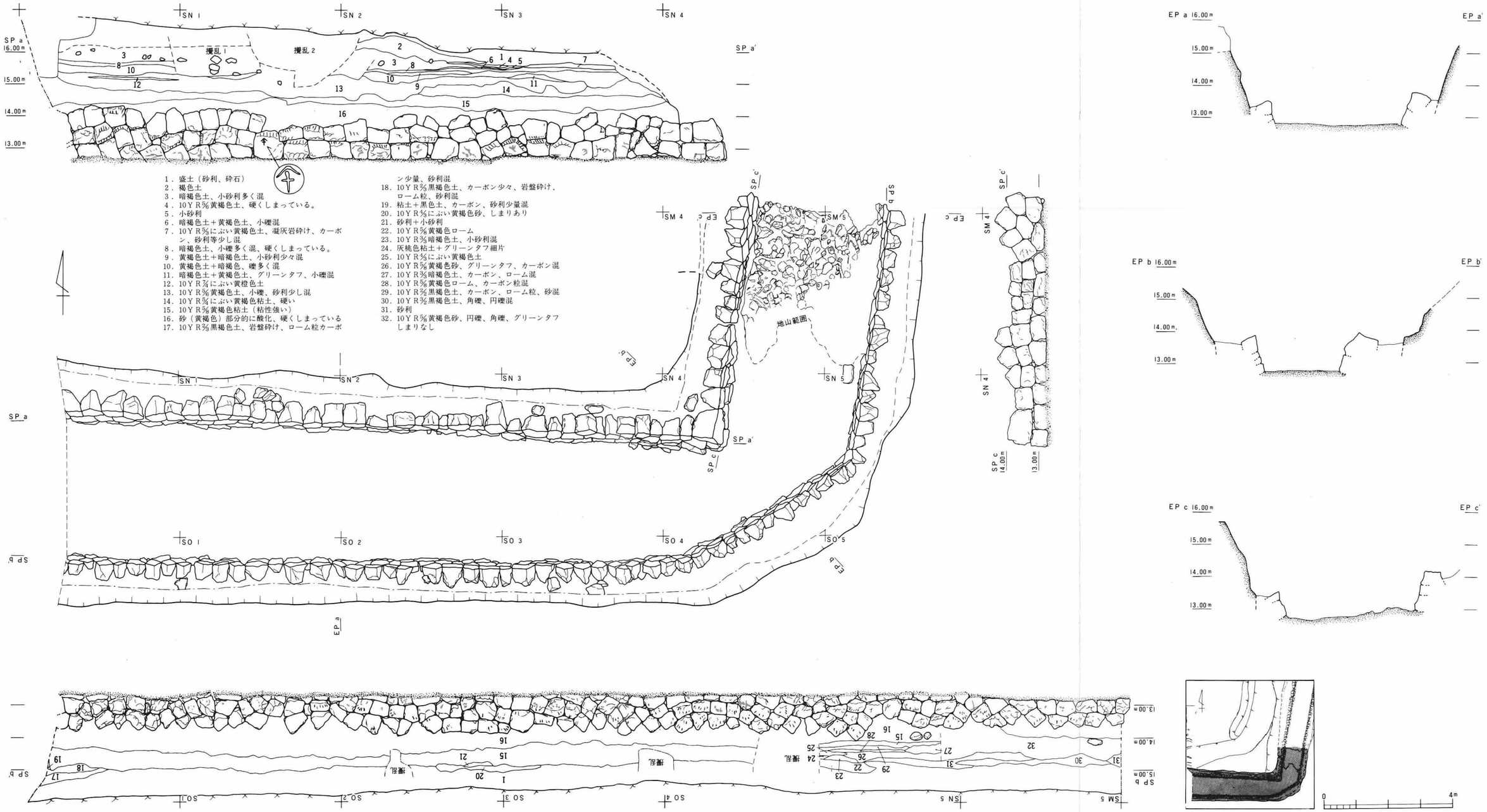
・外堀掘方土層堆積状況（第５図、図版１～３）

外堀内の埋立土を排除し、掘方から石垣石上面に三角堆積している石垣裏ごめの栗石を取り除いた状態で、掘方に見られる土層の堆積状況を観察した。各土層の時期は、概ね次のように考え



1．砂利
2．砂利
3．砂利
4．10YR⅔褐色土、硬くしまっている。
5．10YR⅔にぶい黄褐色土
6．10YR⅔暗褐色土、砂利少し混
7．10YR⅔黒色土、カーボン、小砂利混
8．10YR⅔黒褐色土、小砂利多量混
9．10YR⅔暗褐色土、小礫、青石砕け多量混
10．10YR⅔暗褐色土、カーボン少量、青石砕け混
11．10YR⅔にぶい黄褐色土、風化礫、川砂利混
12．10YR⅔褐色土
13．10YR⅔黒褐色土、礫、川砂利多量、カーボン混
14a．10YR1/2黒色土、小石、ローム少々混、硬い
14b．10YR⅔暗褐色土、瓦、小礫、礫、カーボン混
15．カーボン
16．10YR⅔灰黄褐色土、カーボン、青石砕け混
17．10YR⅔灰黄褐色土、安山岩混
18．砂利、硬い
19．10YR⅔黒褐色土・カーボン少量混
20．岩盤の砕け、礫、カーボン少量
21．10YR⅔黒褐色土、岩盤砕け、ローム粒・カーボン少量、砂利混
22．10YR⅔黒褐色土、カーボン、小礫混
23．10YR⅔黄褐色土、暗褐色土、礫、青石
22．10YR⅔黒褐色土、カーボン、小礫混
23．10YR⅔黄褐色土、暗褐色土、礫、青石混
24．10YR⅝黄褐色土＋⅝褐色土、グリーンタフブロック混
25．グリーンタフの細い砕け
26．10YR⅔暗褐色土、カーボン、ローム少量混
27．10YR⅔黒褐色土、⅝褐色土混
28．カーボン層、⅔黒褐色土混
29．ローム、硬い
30．粘土＋黒色土＋カーボン、砂利少量混
31．ローム少量混
32．カーボン少々、瓦、礫混
33．粘土、カーボン、黒色土少量混
34．カーボン少々、小礫、ローム混
35．ローム
36．粘土、黒色土混
37．黒色土＋粘土＋ローム粒　下位はグライ化
38．粘土、ローム、カーボン少量、砂利少量混
39．ローム多量、粘土少量、小礫少量混
40．黒色土
41．粘土、下位はグライ化
42．粘土、グリーンタフ砕け、川砂利混、下位位はグライ化
43．10YR⅔黒褐色土、ローム少量、カーボン粒少量混
44．灰桃色粘土＋グリーンタフ細片
45．10YR⅔暗褐色土、ローム少量混
46．10YR⅔暗褐色土、小砂利、カーボン少量混
47．10YR⅔にぶい黄褐色土
48．10YR⅔黒褐色土、カーボン混
49．10YR⅔灰黄褐色土、粘土、カーボン混
50．10YR⅔黒褐色土、川砂利、グリーンタフ砕け多量、カーボン混
51．10YR⅔黒褐色土＋黄褐色土、カーボン混
52．10YR1/2黒色土
53．瓦、礫
54．10YR1/2黒色土
55．砂

第4図　外堀・土居セクション図及び土居トレンチ平面図



第５図　外堀平面図・セクション図・エレベーション図

られる。

1～8，17～18：明治7～8年以降

9～11，19～32：明治7～8年以前

12～16：自然堆積

三の丸側掘方に見られる土層のうち、30～32)は、埋立土である可能性もあり、掘り足らなかったのかも知れない。しかし、23～29)は他と比べ様相が異なる。また、この部位のみ堀の幅が極端に狭い。このことは、時間差は不明であるが、この部位を外堀構築時に掘削する以前に、何らかの深い遺構があり、そこに堆積した土砂を掘り込んで石垣を積み栗石を入れたものと思われる。

ii外堀の規模と構造（第5図、図版5）

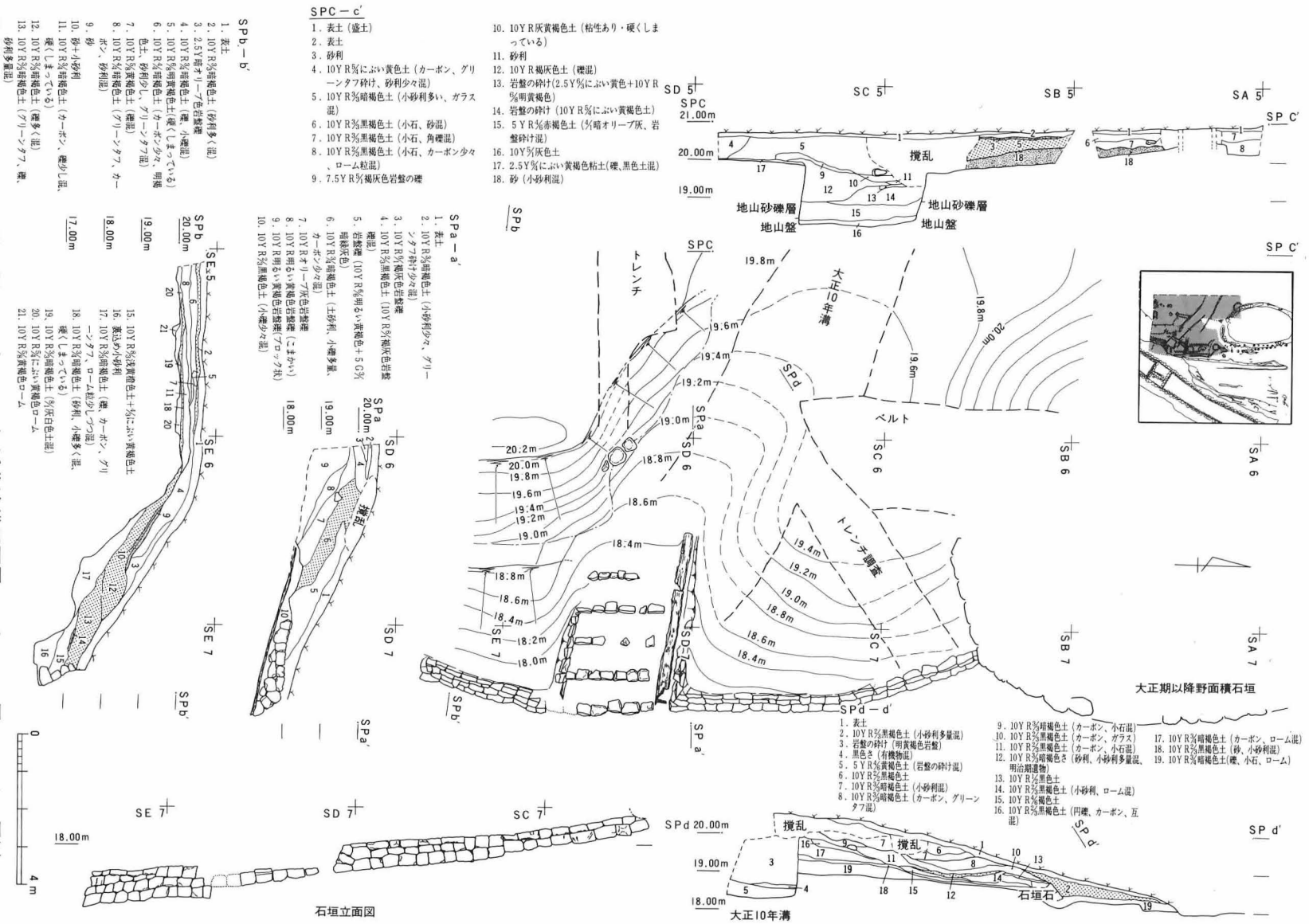
（K．W．：異なる堀幅　地山に直置き　布積み　落とし積み　刻印　グリーンタフ）

外堀の掘方の幅は、その掘方上面で約6.92m(EPa－a,)である。また、石垣最下面での幅は、1ラインで4.12m、2ラインで3.98m、3ラインで3.8m、4ラインで3.2mと次第に幅が狭くなりEPb－b，間では2.08mと極端に狭い。また、SNラインでは3.64m、SMラインでは3.68mと今回調査した範囲では、南北に延びる外堀の幅はほぼ平行しているようだ。

外堀全体として云えることは、二の丸南側の東西に延びる外堀の、西から東にかけて4.12mから3.2mへとせまくなり、北に曲がる部位は2.08mと極端に狭い。また、南北に延びる外堀部では、SNラインで3.64m、平成4年度調査したこの延長部(史跡福山城X：付図　外堀全体図)EPe－e'間で3.83mとやや広くなり、中仕切部南側のEPc－c'で3mと狭くなり、中仕切部北側から外堀終端部にかけては、EPa－a'間の2.91mまで狭くなり、部位によって大きく異なることが判る。

外堀底面は、SNラインより北側では岩盤を、また、これより南側では硬い砂質土の地山を削り出している。また、外堀底面のレベルは、中仕切部南側から今年度調査した範囲までについては、標高12.6～12.8mの間にある。

初段の石垣石は、岩盤の地山部ではその底面の接する地山岩盤を5～10cmほど掘り下げ直置きしているが、硬質の砂質土の地山部では、根堀がやや深く砂利を地山との間に噛ませている。石垣石の積み方が部位によって異なる。特に三の丸側の石垣については、一定の距離を置いて布積みと落とし積みを交互に行い、規則性があるようにも見える。石垣石の大きさも異なり、おしなべて二の丸側の石垣石の方が大きく、三の丸側が小さい。また、二の丸側の初段の大きな石垣石に刻印が「今」と刻まれたもの（図版5－3）があった。さらに、二の丸側において顕著であるが、初段の石垣石は面が平担ではなく、二段目に接する面上部のみをはつり、二段目と面をそろえている。石垣石はすべてグリーンタフ(緑色凝灰岩)が用いられ、産出地は福山城東北部将軍山東支峰下(『松前町史』通説編第一巻下　1988　PP．1080)とされている。なお、史跡整備事業での石



第6図　三本松土居周辺近代遺構平面図・セクション図・コンター図(1)

垣修理においても、同産地のものを使用している。

調査した堀内には、自然浸透による涌水があり、晴天が続く渇水時でも、抜き取られなかった石垣石の高い部位が水面から出る程度の、標高14.4m程度の水位を保っていた。また、極端な降雨があれば、中仕切部をオーバーフローする標高14.7m程度の水位がある。したがって石垣石がすべて抜き取られなかった理由として、これらが水面下にあったためと考えられる。

2) 三本松土居周辺

i 近代遺構（第6，7図・図版9，10）

（K．W．：野面積石垣　大正10年　溝　石段　石垣　柱穴列　枡　岩盤砕片）

通称「三本松」土居周辺から発見された主な遺構は以下のとおりである。

野面積石垣：第6図のうち最も新しい時期のもので、大正10年以降に三本松土居の東半に沿って構築されたものである。

溝　：野面石垣の乗る土層よりも古い土層を切って、この大正10年の埋蔵金捜し時の溝が掘られる。

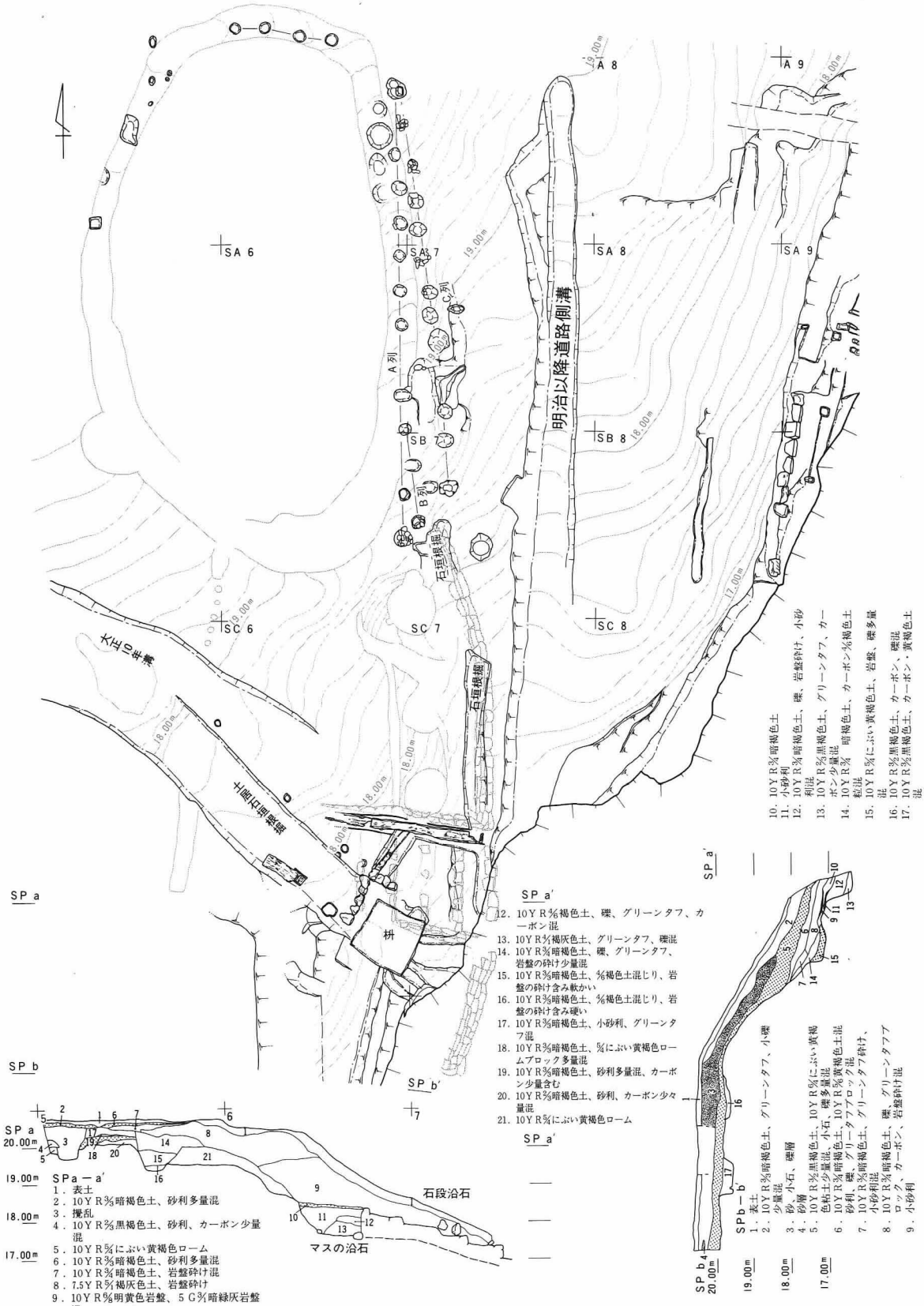
石段・石垣：石段と両脇の石垣そして側溝は、大正10年の排出土である岩盤砕片によって埋められるとともに石段最上段より上位は大正10年の溝によって切られる。なお、石段両脇の石垣の延長である南北に長い石垣は、大正10年に石段などが埋まった後にも地表に露出していたことが、石垣の外側に三角堆積した埋土の遺物から考えられる。

柱　穴　列：三本松土居東側と北側の石垣根掘部などに並ぶ柱穴列は、石段から延びる石垣の延長上にある石垣と同時期か新しいものと、それ以前の三本松土居の石垣が抜き取られた直後のものとがある。

枡　：石段下位に発見されたもので、明治7・8年に抜き取られた土居石垣根掘部の堆積土を掘り込んで構築されている。存続期間は極めて短いものと思われる。

○野面積石垣

三本松土居の東側に、3段積まれた野面積の石垣である。これは、安政元年の築城時のものではなく、大正10年以降に積まれたものである。築城時の三本松土居石垣石とそれに続く根掘跡が土居の周囲を巡っており、その根掘から1～2m外側に野面積石垣が積まれている。調査開始時に野面積石垣の2段目中位以上が露出（図版8－2）していた。栗石等の裏込めは行っていない。また、この野面積石垣は、後述する石段に伴う石垣に乗って（図版10－1）おり、さらに大正10年の埋蔵金捜しの掘り上げ土より上位の土層面に乗っている。



第７図　三本松土居周辺近代遺構平面図・セクション図・コンター図(2)

○ 溝　（図版９－３，10－１）

大正10年に松前勝広子爵が行った埋蔵金捜しの竪坑に伴う箱掘の溝で、野面積石垣より古く、石段・石垣より新しい。この遺構のプランは第６・７図に示しており、外堀から北西方向に延びる土居石垣根掘りを切って構築されている。規模は、下場の幅が3.2～3.4mで、標高18.4m程からほぼ水平に掘られ、上場の幅は第９図№1セクション図で示すように、５mに達するところもある。この溝の埋土は溝の西側に想定される竪坑の掘り上げ土（岩盤砕片）である。第６図SPc－c'は、溝西端のセクションで、この土層17.18)が明治７.８年の城取り壊し時に 埋められた砂利層である。土層９～16)が大正10年の掘り上げ土である岩盤砕片で、土層11)は土層18)の流れ込みと思われる。また、土層1～7)は大正10年以降の堆積で、土層8）の時期は不明である。大正10年に溝が埋め戻されて以降この跡が凹地となっていたようであり、更に凹地に堆積する土層10）は非常に硬くしまっていることから、石段が埋められて以降しばらくは道路として利用されていた可能性がある。

石段に被る竪坑の掘り上げ土（岩盤砕片）の堆積状況（図版9－1～2)は、第６図SPa－a' 間のセクション図に詳しく、土層3～9)がすべて掘り上げ土で、10)以下が大正10年以前である。

第９図№1セクション図では、土層3～12)までが掘り上げ土で、土層11)の面で一時期安定しており、土層3～10)はほとんど同時に埋められたものと思われる。また、土層21～25)は明治７～８年以降、大正10年以前の堆積である。

○石段・石垣（図版10－1～2)

大正10年埋蔵金探し時以前までの地形と、大正10年に上部を削り取られた石段と両側の石垣及びこの石垣に続く南北に延びる石垣を第６図に示した。確認された石段は５段で、これより上位は大正10年の溝によって削られている。石段の縁石は、標高約17m～18.4mまでの1.4mを5段としている。初段の縁石の比高差は0.36mで、2段目以降の比高差が0.2mほどに安定していることから、当時の地表面が初段の縁石の置かれた地山面よりも上位にあったことが考えられる。第６図SPb－b'）間セクション図中土層19)がこれにあたり層厚は約0.16m程あるので、各段約0.2mであったと思われる。

各石段のステップの奥行きは0.8～1m(3尺)程あり、幅は約2.2m(7尺余)で、初段のみ2.4m(8尺)となり、石段を挟む石垣間は、約2.8m(9尺余)である。また、正面右側に木製トイがあり、幅約0.32m(1尺余)で現存最長部は3.08m(10尺余)であり、総延長4.64mに渡り検出された。

石段両側の石垣は、北面が延長約2.4mあり最大３段、南面が約2.3mあり１段のみ斜面の縁石として置かれる。

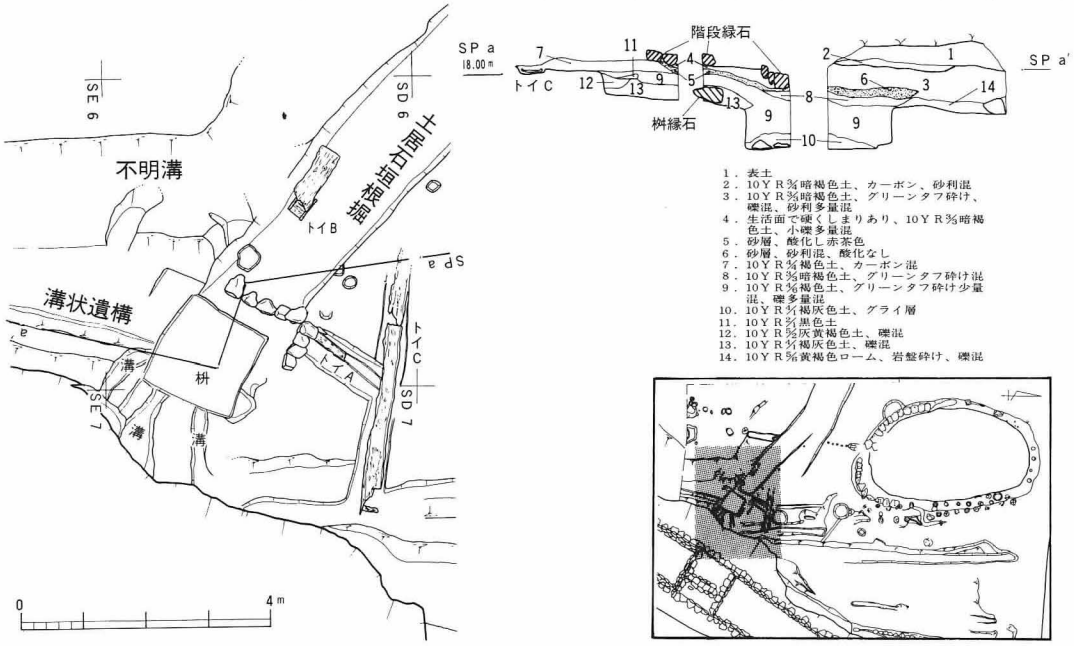
南北に延びる石垣は、石段を挟んで北側は最大３段積み、延長約８mあり、三本松土居を囲む野面積石垣の下位にもぐる。南側の石垣は最大４段積み延長3.4mが残存していた。石垣石は、概ね縦が0.2～0.3mで横が0.3～0.5m程のサイコロ状をし、女性でも一人で持てる重量であった。裏込め砂利はなく、主に砂利混じりの上方からの流れ込みの土が石垣石の裏面を充たす。

残っていた石段から上位は、大正10年の溝によって削られているが、周囲の状況からこの通路は緩く右にカーブし、三本松土居の裏手（北側）に登るようである。また、石段を登り５段目の左側に幅約0.6ｍのステップがあり、犬走り風の脇道と思われる。第６図ＳＰｂ－ｂ’)間で、土層9)の上面のフラットな部位がこれにあたる。土層3.4)は大正10年の排出土で、土層9～16)は南北に延びる石垣にかかる埋土であるので、石段・石垣そしてこの脇道は、大正10年までは使用されていたことになる。

○柱穴列

三本松土居東側および北側に、柱穴列が直線的に並ぶ状況を第７図に示した。三本松土居の東側、７ラインに沿った柱穴列は、主として長く２列認められ、方向が若干異なる。この長い２本の柱穴列のうち、西側の列(Ａ)はほぼ南北方向に並んでいるが、東側の列(Ｃ)はその向きが西偏している。柱穴の径はまちまちであるが、地山面からの深度はいずれも0.2ｍ前後でそろっており、底面は平坦である。ＳＢ－７ポイントにある柱穴が、第９図№３セクション図中、土層23）の流れ込む柱穴で、やや三本松土居側に傾いて掘られている。柱穴間は、0.9ｍ前後でそろっているところが多い。この、三本松土居の東面の柱穴列のうち、Ａ，Ｃ列の中間に、柱穴列Ａから南東方向に３本派生する柱穴列Ｂがある。この柱穴列Ｂは、石段から北側に延びる石垣石の延長上にある。

これらの柱穴列は、おそらく三本松土居の石垣石抜き取り後の土留めのための擁壁の跡であろうと思われる。Ａ列は抜き取り直後に構築し、そしてＢ列を追加しＣ列で全面を改修し、さらに野面積み石垣に置き替る。Ａ列の擁壁内側の堆積土は第９図№３セクション図で土層21～24）であり、土層23)は安政元年完成時の土居石垣の栗石である。Ｃ列では土層19.20)が加わり、野面



第８図　三本松土居周辺近代遺構(排水施設)平面図・セクション図(3)

積石垣では11～15)が堆積する。

それぞれの年代と、他の遺構との関係は、A列が作られたのは三本松土居石垣の抜き取られた直後で、仮に城全体の石垣石の抜き取りが一斉に開始終了したとすれば明治7.8年中である。石段部分と石段から南北に延びる石垣との時間差は判らないが、少なくとも後述する三本松土居を囲む外堀より派生する土居石垣の抜き取り後に、その土居根掘りを掘り込んで構築される枡形遺構が石段の下位にあることから、石段部分と石段から南北に延びる石垣は明治7.8年以降である。B列はこの南北に延びる石垣の延長上にあり、さらに石垣の下位に柱穴が無いことから、B列の構築時には石垣があった可能性が高い。C列の構築の際には南北に延びる石垣の北端部は土砂を被っていたのかも知れない。そして野面積石垣を構築するのは大正10年以降と思われる。

○ 枡

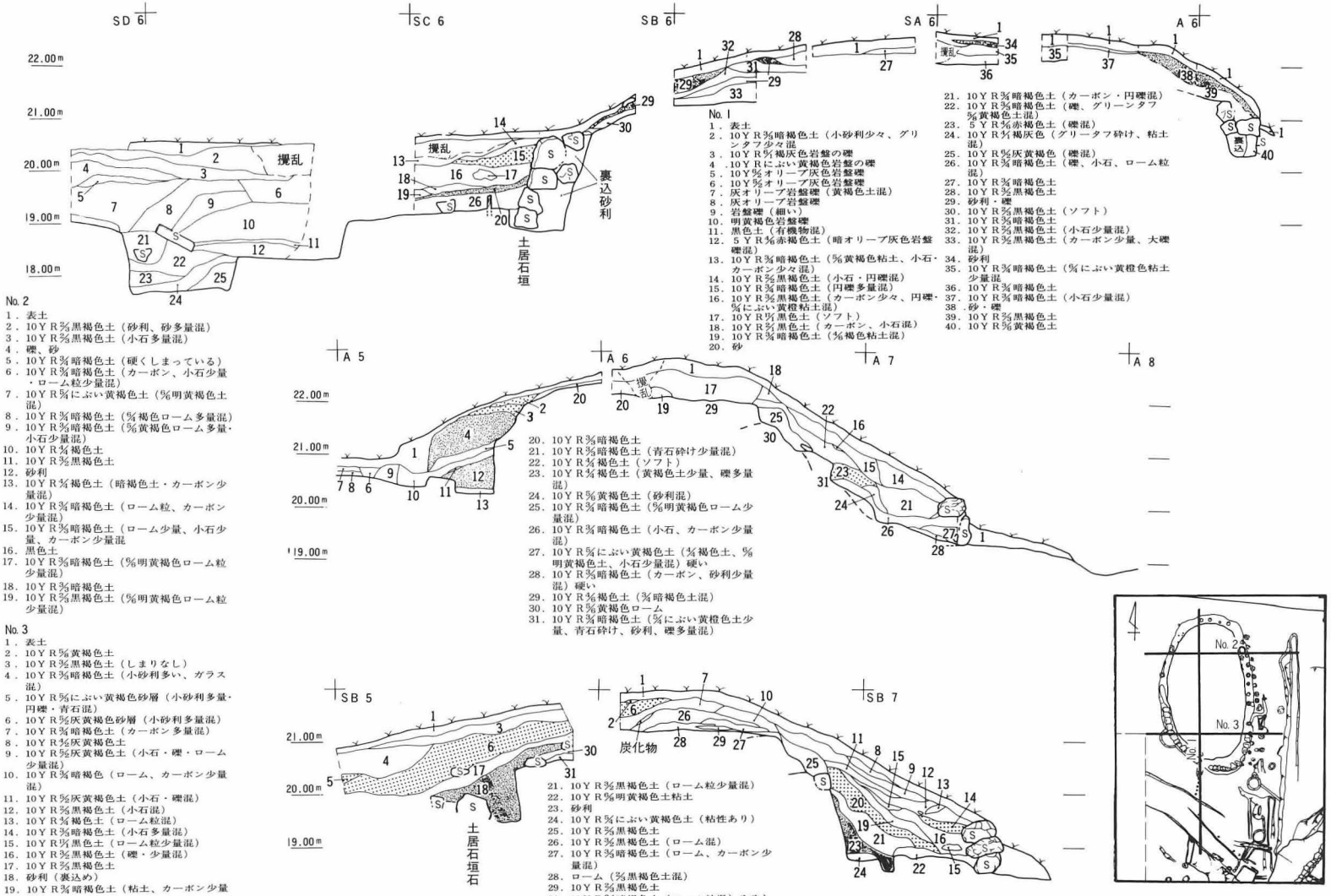
第8図にプランとセクションを示した。セクションでは大正10年以前に構築されたと思われる石段が土層4)に乗っており、土層3)も同質である。土層5)と土層6)との差は酸化の有る無しでほぼ同一土層と思われる。さらに、土層7)は木製トイの上面に流れ込んでいるので、土層8)より上位が石段を作る際に盛り土された可能性が高い。この遺構は、地山岩盤を掘り込んで構築されているが、その規模は各面のセンター間で約1.5m(5尺)四方である。

近代遺構とした理由は、外堀から搦手方向に延びる石垣根掘りの溝に栗石である砂利層が無く、枡形遺構の周囲に縁石が組まれ、その延長が地山を削って構築していることと、埋土が縁石より上位の土層で、これが流れ込んでいること。さらに、この遺構の向きと石垣根掘りの向きがずれていることである。

第7図SPb－b')セクション図の土層11)は、裏込め砂利(栗石)ではない。外堀の裏込め砂利であれば、土砂をほとんど含まない礫層として残っている。これは土と小砂利の混ざったもので、第8図SPa－a')土層4)に対比される。さらにこの土層は階段より続く石垣裏に堆積する第6図SPb－b')土層14.16)と同質である。そして、第7図SPb－b')セクション図の土層12.13)は、第8図SPa－a')土層7.9)にそれぞれ対比される。

この遺構を掘り込んだ地山は、1年も地表に露出させると表面にクラックが入り細粒化し崩れてしまうが、遺構の壁面および上場の角などはそのような痕跡がなく非常にフレッシュであった。また、この遺構の南側にある第6図SPb－b')土層17)の堆積する溝状遺構は、風化した跡が第8図SPa－a')土層14)に若干認められ枡遺構より先に作られた可能性が高い。

以上の順を追うと次のようになる。外堀から搦手方向に延びる石垣根掘り内に、これまでの調査例のような栗石が存在していないので、三本松土居石垣根掘りに栗石がほとんど残っていないのと同様に、明治7.8年の石垣石抜き取り時に栗石も取り除かれたものと思われる。つぎに枡南側の溝状遺構が掘られる。ほとんど同時に縁石を伴う枡形遺構を構築する。その時には根掘り内に第8図SPa－a')土層13)がいくらか堆積していたのかも知れない。そして1年に満たない短い期間に第8図SPa－a'土層9)が縁石を越え枡内に堆積する。その後石段・石垣を不陸整成により



No. 1

1．表土
2．10ＹＲ3/3暗褐色土（小砂利少々、グリンタフ少々混
3．10ＹＲ5/1褐灰色岩盤の礫
4．10ＹＲにぶい黄褐色岩盤の礫
5．10Ｙ5/2オリーブ灰色岩盤礫
6．10Ｙ5/2オリーブ灰色岩盤礫
7．灰オリーブ岩盤礫（黄褐色土混）
8．灰オリーブ岩盤礫
9．岩盤礫（細い）
10．明黄褐色岩盤礫
11．黒色土（有機物混）
12．5ＹＲ4/6赤褐色土（暗オリーブ灰色岩盤礫混）
13．10ＹＲ3/3暗褐色土（5/6黄褐色粘土、小石・カーボン少々混）
14．10ＹＲ5/2黒褐色土（小石・円礫混）
15．10ＹＲ3/3暗褐色土（円礫多量混）
16．10ＹＲ5/2黒褐色土（カーボン少々、円礫・5/6にぶい黄橙粘土混）
17．10ＹＲ1/1黒色土（ソフト）
18．10ＹＲ1/1黒色土（カーボン、小石混）
19．10ＹＲ3/3暗褐色土（5/6褐色粘土混）
20．砂
21．10ＹＲ3/3暗褐色土（カーボン・円礫混）
22．10ＹＲ3/3暗褐色土（礫、グリーンタフ5/6黄褐色土混）
23．5ＹＲ5/6赤褐色土（礫混）
24．10ＹＲ4/1褐灰色（グリータフ砕け、粘土混）
25．10ＹＲ5/6灰黄褐色（礫混）
26．10ＹＲ3/3暗褐色土（礫、小石、ローム粒混）
27．10ＹＲ3/3暗褐色土
28．10ＹＲ5/2黒褐色土
29．砂利・礫
30．10ＹＲ5/2黒褐色土（ソフト）
31．10ＹＲ3/3暗褐色土
32．10ＹＲ5/2黒褐色土（小石少量混）
33．10ＹＲ5/2黒褐色土（カーボン少量、大礫混）
34．砂利
35．10ＹＲ3/3暗褐色土（5/6にぶい黄橙色粘土少量混
36．10ＹＲ3/3暗褐色土
37．10ＹＲ3/3暗褐色土（小石少量混）
38．砂・礫
39．10ＹＲ5/2黒褐色土
40．10ＹＲ5/6黄褐色土

No. 2

1．表土
2．10ＹＲ5/2黒褐色土（砂利、砂多量混）
3．10ＹＲ5/2黒褐色土（小石多量混）
4．礫、砂
5．10ＹＲ3/3暗褐色土（硬くしまっている）
6．10ＹＲ3/3暗褐色土（カーボン、小石少量・ローム粒少量混）
7．10ＹＲ5/4にぶい黄褐色土（5/6明黄褐色土混）
8．10ＹＲ3/3暗褐色土（5/6褐色ローム多量混）
9．10ＹＲ3/3暗褐色土（5/6黄褐色ローム多量・小石少量混）
10．10ＹＲ3/4褐色土
11．10ＹＲ5/2黒褐色土
12．砂利
13．10ＹＲ3/4褐色土（暗褐色土・カーボン少量混）
14．10ＹＲ3/3暗褐色土（ローム粒、カーボン少量混）
15．10ＹＲ3/3暗褐色土（ローム少量、小石少量、カーボン少量混
16．黒色土
17．10ＹＲ3/3暗褐色土（5/6明黄褐色ローム粒少量混）
18．10ＹＲ3/3暗褐色土
19．10ＹＲ5/2黒褐色土（5/6明黄褐色ローム粒少量混）

No. 3

1．表土
2．10ＹＲ5/6黄褐色土
3．10ＹＲ5/2黒褐色土（しまりなし）
4．10ＹＲ3/3暗褐色土（小砂利多い、ガラス混）
5．10ＹＲ5/6にぶい黄褐色砂層（小砂利多量・円礫・青石混）
6．10ＹＲ5/6灰黄褐色砂層（小砂利多量混）
7．10ＹＲ3/3暗褐色土（カーボン多量混）
8．10ＹＲ5/6灰黄褐色土
9．10ＹＲ5/6灰黄褐色土（小石・礫・ローム少量混）
10．10ＹＲ3/3暗褐色（ローム、カーボン少量混）
11．10ＹＲ5/6灰黄褐色土（小石・礫混）
12．10ＹＲ5/2黒褐色土（小石混）
13．10ＹＲ3/4褐色土（ローム粒混）
14．10ＹＲ3/3暗褐色土（小石多量混）
15．10ＹＲ1/1黒色土（ローム粒少量混）
16．10ＹＲ5/2黒褐色土（礫・少量混）
17．10ＹＲ5/2黒褐色土
18．砂利（裏込め）
19．10ＹＲ3/3暗褐色土（粘土、カーボン少量混）
20．10ＹＲ3/4褐色土（礫多量混）
20．10ＹＲ3/3暗褐色土
21．10ＹＲ3/3暗褐色土（青石砕け少量混）
22．10ＹＲ3/4褐色土（ソフト）
23．10ＹＲ3/4褐色土（黄褐色土少量、礫多量混）
24．10ＹＲ5/6黄褐色土（砂利混）
25．10ＹＲ3/3暗褐色土（5/6明黄褐色ローム少量混）
26．10ＹＲ3/3暗褐色土（小石、カーボン少量混）
27．10ＹＲ5/6にぶい黄褐色土（3/4褐色土、5/6明黄褐色土、小石少量混）硬い
28．10ＹＲ3/3暗褐色土（カーボン、砂利少量混）硬い
29．10ＹＲ3/4褐色土（3/4暗褐色土混）
30．10ＹＲ5/6黄褐色ローム
31．10ＹＲ3/3暗褐色土（5/6にぶい黄橙色土少量、青石砕け、砂利、礫多量混）
21．10ＹＲ5/2黒褐色土（ローム粒少量混）
22．10ＹＲ5/6明黄褐色土粘土
23．砂利
24．10ＹＲ5/6にぶい黄褐色土（粘性あり）
25．10ＹＲ5/2黒褐色土
26．10ＹＲ5/2黒褐色土（ローム混）
27．10ＹＲ3/3暗褐色土（ローム、カーボン少量混）
28．ローム（5/6黒褐色土混）
29．10ＹＲ5/2黒褐色土
30．10ＹＲ3/3暗褐色土（ローム粒混）ややしまりあり
31．10ＹＲ5/6黄褐色ローム、しまりあり

第９図　三本松土居セクション図

構築する。

外堀から搦手方向に延びる石垣根掘り内に、第８図ＳＰａ－ａ’)土層13）で充たされた箱型トイ(Ｂ)が出土した。また、桝の縁石下位にトイＡが出土し、これはトイＣの下位をくぐって第10図不明遺構Ａに達していた。また、枡形遺構の東側にある３本の細い溝は風化が認められるので、枡が埋まり石段石垣が造成されるまでの間地表に露出していたものと思われる。

○その他の遺構

三本松土居東側の斜面は、近代の道路・側溝・石垣等の遺構が集中しており、大正10年の掘り上げ土が乗る以前の地表面と、嘉永年間に造成された地山面との比高差が30cmに満たない。この斜面と土居の裏面にまたがるように杭列と柵列が一直線に並んだ遺構が発見された。

・杭列柵列（第９．10図）

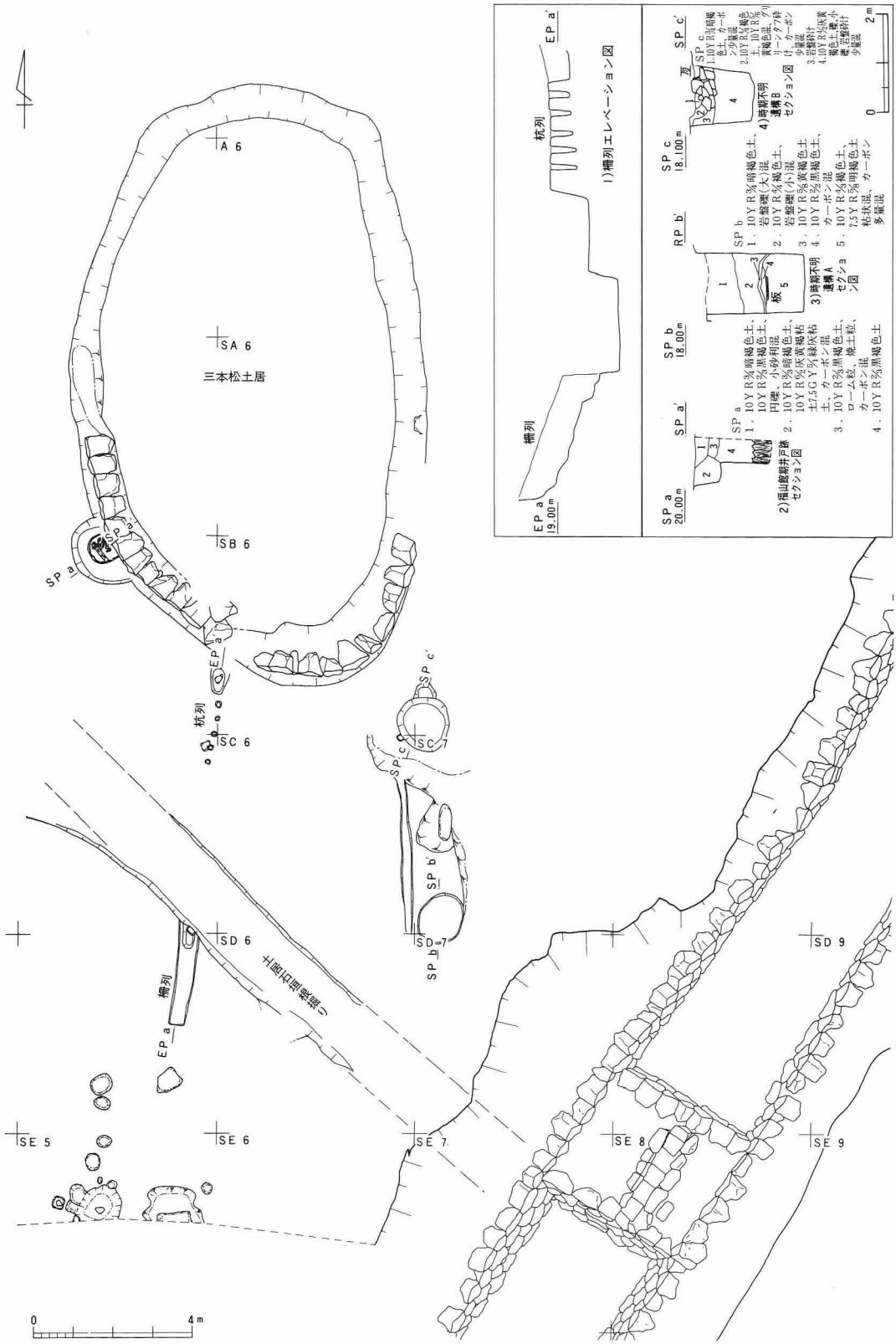
ＳＢ－６～ＳＤ－６にかけての６ラインの西側に沿って杭列・柵列がある。杭列については、大正10年以前の第９図№１セクション土層26)が、裏込め砂利(栗石)を覆っており、さらに残存していた杭を覆っていた。そして、絵図にはこの位置に杭列が描かれてなく、築城時に削り出した地山より杭が突出していたので、この杭列は明治7.8年以降大正10年以前と考えられる。この上層の土層20)は砂層で第９図№３)のセクション土層6)(図版10－1)および№2)土層4)に認められる砂層と同質で、その下層に第９図№１セクション土層26)と同質の土層があり、裏込め栗石を覆っている。また、柵列については、明治7.8年に外堀から搦手方向に延びる石垣・土居が崩され上面が削られた後に構築された可能性が考えられ、上面に大正10年に堆積した第９図№１セクション土層3～12)を被る。柵列の覆土は大正10年の堀上げ土と異なることから大正10年以前であることは確実である。そして、この柵列の延長に杭列があり、更にその延長の三本松土居石垣石が一列のみ４段残っている。この石垣石は最上段の石垣石だけ向きが偏しているが、裏込め栗石の保存状況から積み替えては無く、抜き取られずにそのまま残ったものである。

以上をまとめると、杭列は三本松土居取り壊し以前に構築された。その後三本松土居石垣抜き取り時から第９図№１セクション土層26)が堆積するまでは存在するが、それ以降存在したかは不明である。柵列は、外堀から搦手方向に延びる石垣・土居が崩された後構築された。杭列と柵列が直線的に並んでいるので、ある期間同時に存在した可能性が高い。また、三本松土居の取り壊し時期は明治７～８年以降の可能性がある。

ii　近世遺構（第９～11図）

三　本　松　土　居：土居を巡る石垣根掘りと、一部抜き取られなかった石垣を検出した。石垣と根掘りとの間の裏込め栗石は、外堀などと同様に砂利を用いている。土居は盛り土をしてマウンドを形成するのではなく、土居周辺を削平した結果、土居部のみ自然堆積層が残り、頂部のみ若干盛り土を行っている。

土居石垣根掘り：外堀より搦手方向に延びる土居石垣根掘りが延長約７ｍにわたり発見され



第10図　三本松土居及び周辺近世遺構平面図・セクション図・エレベーション図

た。西側は大正10年の溝によって、東側は明治初期の桝状遺構により破壊されている。根掘り内部に栗石は残っておらず、再堆積したと思われる小砂利混じりの粘土が堆積していた。

外堀二の丸側土居：近代の撹乱で土居盛り土の上部が削平されていた。

井　　戸　　：三本松土居石垣下位にあり、嘉永年間築城以前の井戸である。内部は桶状に板を巡らす。

時期不明遺構A.B：A.Bとも径が1.5mでほぼ揃っており、円筒形に掘られる。Aは明治期の石垣を取り除き地山まで掘り進めプランを確認した。Aは、明治期の枡形遺構の縁石下位のトイ(A)遺構がAに注ぐような配置をしている。Bは地山の凹みの中央にプランを確認した。上位にはグリーンタフのおおきめの破片が集中して発見された。これらのことから少なくとも明治初期あるいは嘉永以前が考えられる。

○三本松土居（K.W.自然地形の削り出し、南北50尺、東西30尺、土居石垣高5尺）

三本松土居は、B～SBラインまでと5～7ラインまでの12グリッドにまたがって位置している。プランが楕円形を呈するこの遺構は長軸がほぼ南北を向く。この土居の内部の土層堆積状況は、岩盤である地山が若干西から東に低く傾斜するがその上位の黄色粘土と褐色土はほぼ水平に堆積し、自然堆積した地形を削り出してこの土居の大部分を形成していると言える。第9図No.1,2,3のセクション図は、ともにマウンド中央部の土層説明のない部位が自然堆積である。嘉永年間築城時に盛られた土層で残存しているのは、第9図No.1セクションでは、土層33,35,36,39,40)である。No.2では土層17～20,22～26)が築城時盛り土で、土層29,30)は自然堆積土層で、土層31)は裏込め栗石の一部である。No.3では土層25～29)が築城時盛り土で、土層30,31)は自然堆積土層である。石垣裏込め栗石はNo.1では土層40)、No.2では土層12)、No.3では土層18,23)である。

三本松土居を残して削平した結果の土居根掘り際の地形は、北西から南東に向かって低くなる傾斜を有し、それぞれの根掘り際の比高差は約1.4m程あるが、北・西面は近代の撹乱によって削平されている。土居石垣の根掘底部付近の幅は、上位が削平され極端に幅の狭いところを除けば、おおむね0.9m(3尺)前後で、削りだされた地山面からの掘り込みの深さは0.36m(1尺余)である。

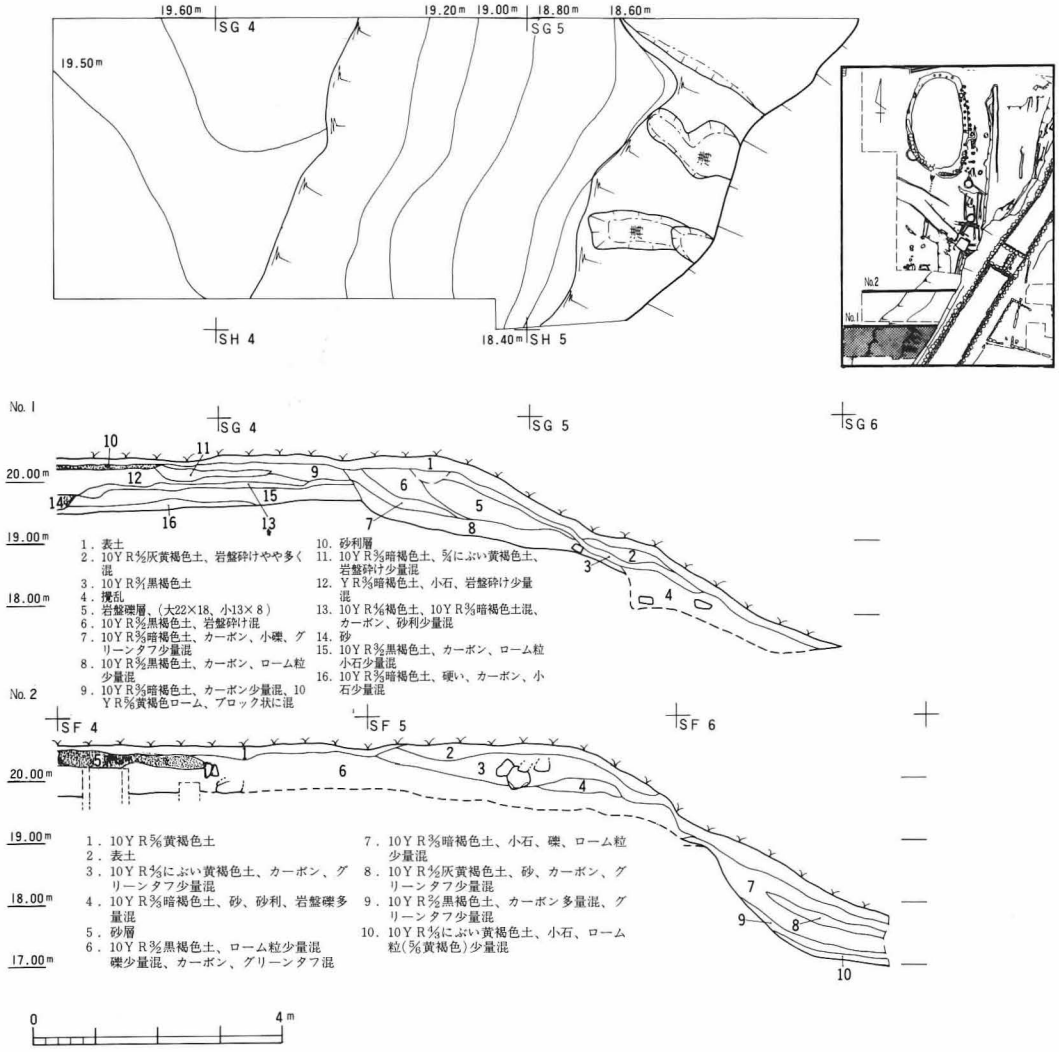
土居石垣の残存していた部位は土居南半に集中しており、土居周囲の地形からすると標高の低い部位である。残存していた4段の石垣の根掘り底部からの積み上げ高は約1.8m(6尺)である。

三本松土居の長軸の規模はその根掘り掘り方の外側間で約15.2m(50尺)で、短軸で約9m(30尺)である。プランの特徴は楕円形を呈しているところであるが、長軸の西側と東側ではアールが異なり東側が直線的であると言える。

○土居石垣根掘り（K．W.栗石抜き取り、箱掘り、幅４～５尺）

SC－5～SD－6グリッドにまたがり延長約７ｍにわたり発見された。両端を近代遺構によって破壊され、内部は石垣石も栗石もない。遺構の規模は、上場の幅が1.5～1.7ｍで下場の幅が1.2～1.5ｍでほぼ箱型に地山を掘り込み西から東に緩やかに下る。溝の西端は大正10年の溝によって削平される。掘り込みの深さは近代の遺構によって上面を破壊されているが、残存部での最大は約0.7ｍである。土層の堆積状況については近代枡形遺構に詳しいので割愛する。石垣の天端については、ローム地山の上端が堀に向かって斜めに削り取られているため、この部位の調査では不明である。

この遺構は、近代の遺構の切り合い関係と、絵図(第35図)に書かれた土居寸法の位置関係から、外堀から搦手方向に延びる土居根掘りであると思われる。



第11図　ＳＦ・ＳＧライントレンチ平面図・セクション図

○外堀二の丸側土居（Ｋ．Ｗ．近代の削平）

ＳＦラインとＳＧラインの２か所の土居部分を調査した。ＳＦラインではSF4～6の３グリッドを調査したが、土居盛り土部分は、近代の撹乱でほとんど削平されており、第11図№２セクションの土層16)以下が明治の可能性がある。また、土層9)の上面に乗り、崖の端部にグリーンタフの20～30cm程度の角礫があり、これは近代の石段・石垣などで使用されていたものと形状が似ている。

また、第11図№１のセクションでは、土層15,16)が明治以前の可能性がある。斜面の堆積土は土層6)のように大正10年の掘り上げ土が含まれている部位もある。また、プランで斜面に溝状遺構が２本認められるが、これは明治初期の枡形遺構西側斜面に１本認められたプランが不定形で斜面に対して底面がほぼ水平に掘り込まれている遺構とよく似ている。

○井　　戸（Ｋ．Ｗ.嘉永以前、掘り方６尺、井戸枠2.5尺）

三本松土居の南西部石垣下位のＳＢ－5グリッドで嘉永年間以前の井戸跡が発見された。プランは、幕末生活面である暗褐色土上面で確認した。円筒形で、上段と下段で径が異なる。上段は直径が約1.8ｍの掘り方で、下段は直径が約0.76ｍで壁に板材が並ぶ。上段の深さは確認面より0.68ｍで、下段の深さは確認面より1.92ｍあるが完掘はしていない。

○時期不明遺構Ａ・Ｂ（Ｋ．Ｗ.嘉永以前＜明治７～８年以降）

ＳＣ－7，ＳＤ－7ポイントにそれぞれかかる状態で２基発見された。遺構Ａのプラン確認面は近代の階段に伴う石垣の盛り土下の地山面であり、遺構Ｂは同じく石垣盛り土下位で地山の凹みに多量のグリーンタフ礫片が集中しているのを確認した。

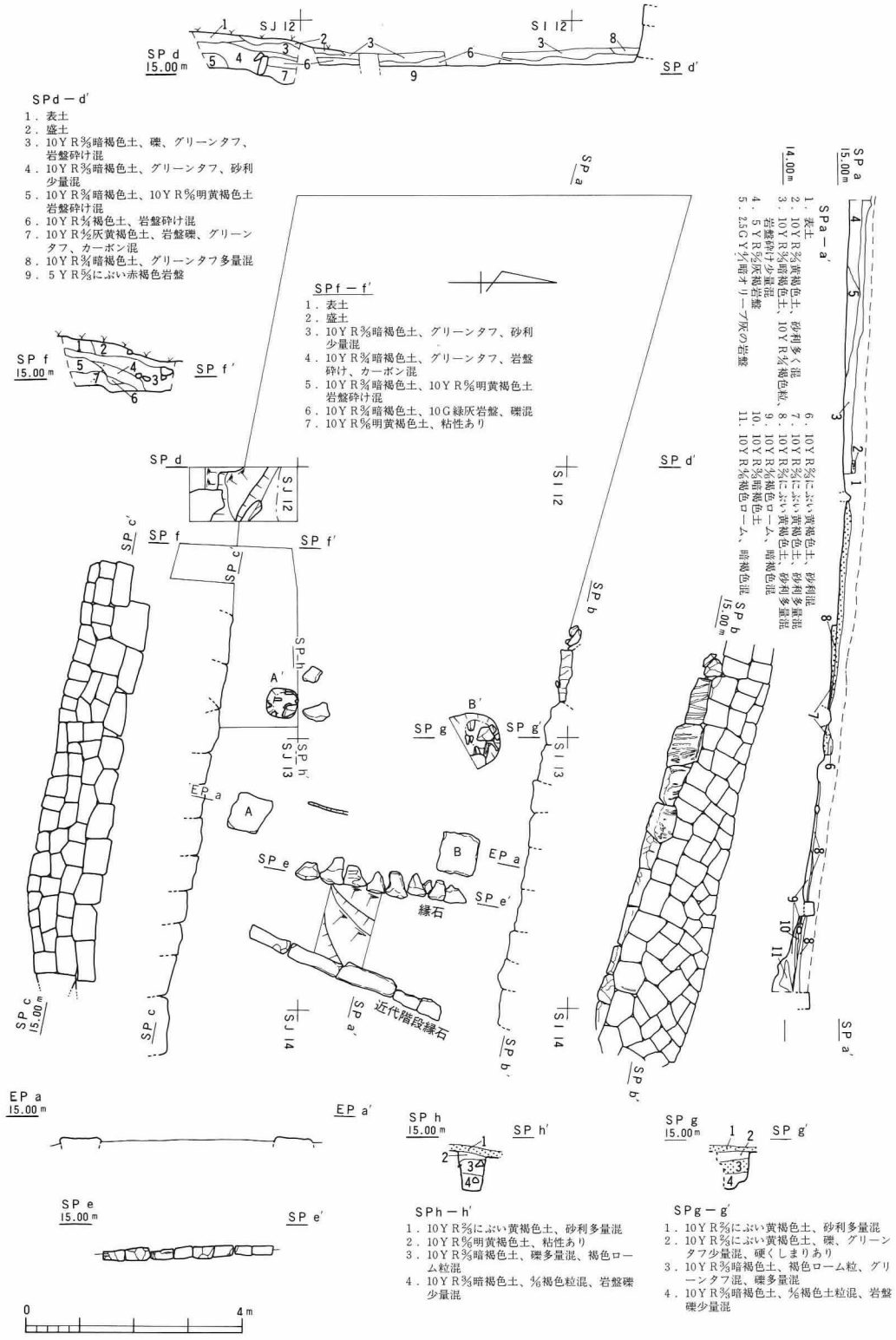
遺構Ａの堆積土は、土層3)が他と色調が異なり薄く堆積していることから、土層3～5）と土層1～2)はやや時間差があると思われる。土層1,2)には岩盤礫が混入しているが、これは大正10年の排出土ではなく、城取り壊し時か、築城時が考えられるが、トイＡの溝との新旧関係が判然としない。遺構の規模は、Ａが径経1.2ｍ(4尺)で円筒形に掘られ、Ｂは掘り込み面で径約1.2ｍ(4尺)で底部で約0.96ｍ(3尺余)である。

３）　天神坂門　（Ｋ．Ｗ.：高麗門形式　門柱礎石　控柱柱穴　縁石）

この門は、三の丸に登る天神坂の頂部にあり、両側に石垣を配し、高麗門形式の城門である。調査の結果、門柱礎石と控柱柱穴および縁石が出土した。

天神坂門は、ＳＩ･ＳＪ－13)グリッドに位置し、町道登城坂線の簡易舗装を剝ぎ、その下位の砂利混じりの暗褐色土を剝いでいく段階で、縁石および門柱礎石を検出した。さらに、土層8)(第12図ＳＰａ－ａ')を剝いだ段階で控柱柱穴のプランを確認した。なお、第27図金属製品25)は、正面左側の柱穴より出土し、同じく27)は正面右側の柱穴より出土した。

門柱礎石は、石垣石と同様にグリーンタフを用い、右側のＡは、ややいびつな0.68×0.69ｍを



第12図　天神坂門平面図・セクション図・エレベーション図

計り、Bは0.76×0.68m角でやや長方形を呈する。厚さは、縁部で14～16cm程ある。礎石底面には、栗石等は入っておらず、地山のロームを掘り込み直に据えられている。なお、Aは若干南側にずれている可能性がある。礎石上面中心部の標高は、Aが14.59mでBが14.60mである。また、礎石間の距離は礎石内側間が3.23mで、外側間が4.68mであり、礎石中心間は3.955mと算出される。

控柱柱穴のプランはA'が隅丸方形に近く、B'が円形に近い。柱穴底面が地山の岩盤層に達しており、その標高はA'が14.02mでB'が13.99mである。柱穴間の距離は、内側間で3.15mで、外側間で4.68mであり、中心間は3.915mと算出される。柱穴は、土層堆積図を作成した以降プランがさらに広がりプランとセクションとはその径が一致しない。

縁石は、土層9)(第12図SPa－a')の上に薄く堆積した土層8)(第12図SPa－a')の上に置かれている。縁石の頂部の標高は14.52～14.61mで若干開きがある。

門を挟む石垣間の距離は地表面で門柱礎石通が6.04mで、控柱通が6.02mである。

さて、それぞれの遺構の時期であるが、門柱礎石と控柱柱穴は、絵図に描かれていたとおり高麗門として一体のものであり、据え換えた様子もなく、築城時に構築されたものと思われる。また、縁石はその下面に土層8)がもぐり込む事から、もぐり込まない門柱礎石とは時間差があり、縁石の方が新しい。また、築城時の道路面は土層8)と9)(第12図SPa－a')の間で、指頭大の黒色玉砂利が薄く敷き詰められていた。

4)　遺構小括

○外　　堀

外堀については、今年度の調査をもって南東の主体部を延長107mにわたり調査し終えた。調査の結果、部位によって積み方、石垣石の大きさ、すり合わせの技術が異なることが明確となった。また、二の丸側石垣と三の丸側石垣とでは、二の丸側の方が大きい石垣石を用いており、特に城正面に当たる外堀南側の石垣の石垣石は、他と比べはるかに大きく布積みで接継がすき間無く積んでいる。

また、外堀南西隅コーナーの三の丸側は石垣裏側の地山掘り方に、本来の自然堆積土掘り方と石垣栗石との間にそれ以外の土層が認められた(第5図SPb－b'土層24～29)。ここに堆積する土層は、本来この付近にはないものがあり、明治7～8年に堀際および堀内に埋め戻された砂利層の下位にあたる。外堀セクションで、三の丸側からの流れ込みは土層30,34)(第4図)ぐらいが考えられるが、これらも二の丸側の土居を崩して堀に埋め込み整地したものと考えられる。何故なら、三の丸側掘り方のセクション図には、自然地山である黄褐色土上面に明治7～8年以降に盛った砂利層があるからである。ここに砂利層があるのは、堀を埋立た後、上部を道路として利用したからであるが、黄褐色土上面になんらかの築城時の土層が見付かってもよいと思われる。堀埋め戻し土にない土層24)(第5図SPb－b')は、築城時～明治以前と思われる土層44)(第4図)と同質で

あることから、同時期のものと思われる。以上のようにこの土層(第5図ＳＰｂ－ｂ' 土層24～29)は、取り壊し時の砂利層の下位にあり、さらに築城時の土層(第5図ＳＰｂ－ｂ' 土層24)の下位(第5図ＳＰｂ－ｂ' 土層25～29)でもあることから築城以前の遺構である可能性が高い。

また、外堀石垣の天端レベルについてであるが、三の丸側はこれまでの調査で標高15.90ｍを推定したが、今回の調査では標高15ｍを大きく出ない程度とも思われる。これはあくまでも三の丸側掘り方セクション(第5図ＳＰｂ－ｂ')から求められることであり、今回調査した地域は堀を埋めた後道路として造成された地域であるので、路盤工事によって堀際が削平された可能性もある。二の丸側の天端レベルについても、明治7～8年の城取り壊しの際に二の丸土居法面の土砂を削り、堀の埋立に用いたことを第４図のセクションで示しているが、問題なのはそれをどれほど削ったかで埋立時の土量を計算すれば推定することも可能だが、今回の調査でも課題として残された。このことについては、来年度調査を予定している。二の丸土居が若干残っている地点を調査したうえで結論を出したい。

○三本松地区

・三本松（羽休の松）土居

プランについては、石垣石の一段目および掘り方が残存していたことで全体が確認できた。また立面については一部石垣が残存していたことと、石垣裏込め掘り方が多くの部位で残存していた。ただし頂部については、若干削られた可能性がある。大正12年に枯れたとされる松の根株が三本とも残っていたが、根の張り出す土層が特定できなかった。また、慶応３年に福山城の東側の台地(馬形)から撮影された写真では、搦手枡形土居頂部より下位で、外堀に沿った土居頂部よりも上位に三本松土居の頂部が位置するようである。

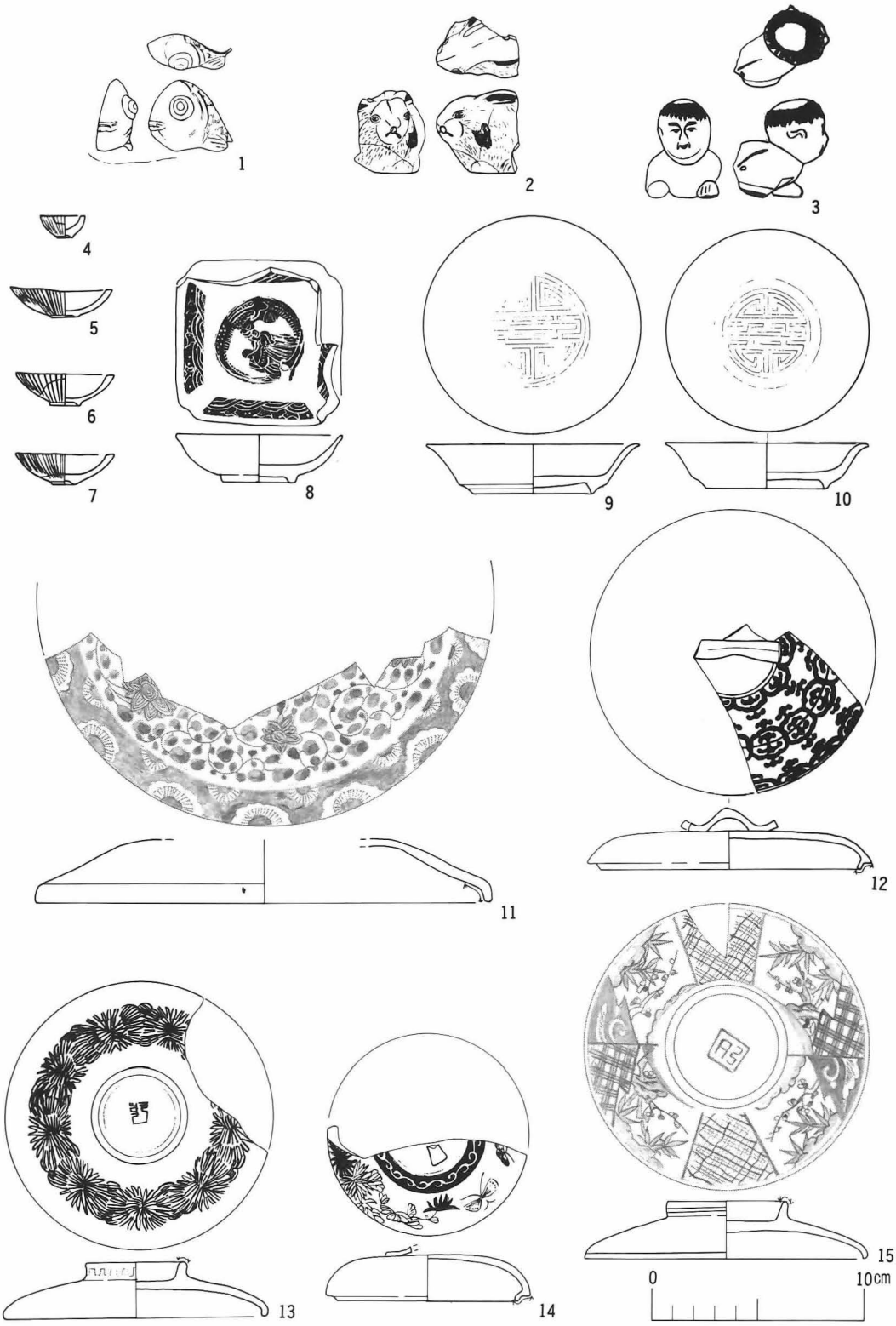
・外堀より搦手方向に延びる土居石垣

根掘り部は発見されたが上部土居は削られており当時の土層はわずかしか残っていない。特に外堀石垣とのすり合わせの際付近は、近代の枡遺構によって、また、周囲についても近代の道路等によって削平されたので現在では不明であるが、あくまでも外堀石垣際地山までは、この土居石垣根掘りを掘り込んでいたものと考えている。

○天　神　坂　門

非常に浅い遺構で、近代の道路の敷設によって地山を削られ道路基盤の砂利が堆積していたにもかかわらず、門柱礎石と控柱柱穴が残っていた。礎石Ａについては、若干南側に動かされている可能性がある。控柱柱穴通以西は、石垣を実測した部位より西側について、近代になり削平され砂利を入れられ道路を整備したものと思われる。また、実測した北面石垣最下部は、築城当時の

ものと思われ、近代になり上部石垣を積み直す際、既存の道路とラインを合わせるため、最下部石垣石の上部（地表に露出する部位）をはつり、道路のラインと面を揃え、上部石垣を積み直している。また、門柱礎石の東側にある縁石は、近代の可能性がある。



第13図　手塩皿・蓋・その他（1～15）

2．出　土　遺　物

遺構・包含層より出土した遺物の総合点数は、9,946点で内訳は別表(表１)に示した。また、表採および石垣栗石(海砂利)に混入していた陶磁器が10,154点あり、合わせて20,100点である。傾向としては陶磁器類が最も多く、遺構・包含層より出土した遺物の72.9%を占め、瓦類が19.2%でガラス製品が1.3%木製品が0.4%金属製品が4.9%で石製品・土器・石器が1.2%である。以下、順に図示した出土遺物の概要を述べる。

○陶　磁　器

磁器は4,204点で、碗類が最も多く50.3%、皿類が14.7%、鉢類が2.2%、徳利類が2.2%、その他1.8%であった。陶器は3,050点で、甕類が最も多く31.8%、擂鉢類が15.3%、壺類が6.4%、皿類が5.8%、碗類が3.4%、鉢類が2.1%、徳利類が0.3%、その他が34.8%である。

今回出土した陶磁器は、幕末が主体であるが、明治期以降の方が多数であった。また、輸入磁器は点数が非常に少ない。以下、おもだったものを図版の順に述べる。

第13図

１)は、白磁の魚であるが腹がオープンになっており用途不明。この部位については、彩色はない。２)は、腹が無釉。口耳が赤で、目首は黒で耳の縁は金彩を施す。水滴としたが注口の位置が低すぎるので別の用途があるのかも知れない。４)は焼成不良陶質である。5～7)は外径で一寸五分。８)の手塩皿は文様がレリーフの染付で釉調は白濁する。９)は青緑色が強いが、10)は白磁に近い。11)は釉調が青緑色で呉須発色がややくすんでいる。また、12)とともに釉剝ぎ部はアルミナ塗布。14)は中央圏界赤絵上絵付け内白抜きの渦巻き文に金彩を施す。

第14図

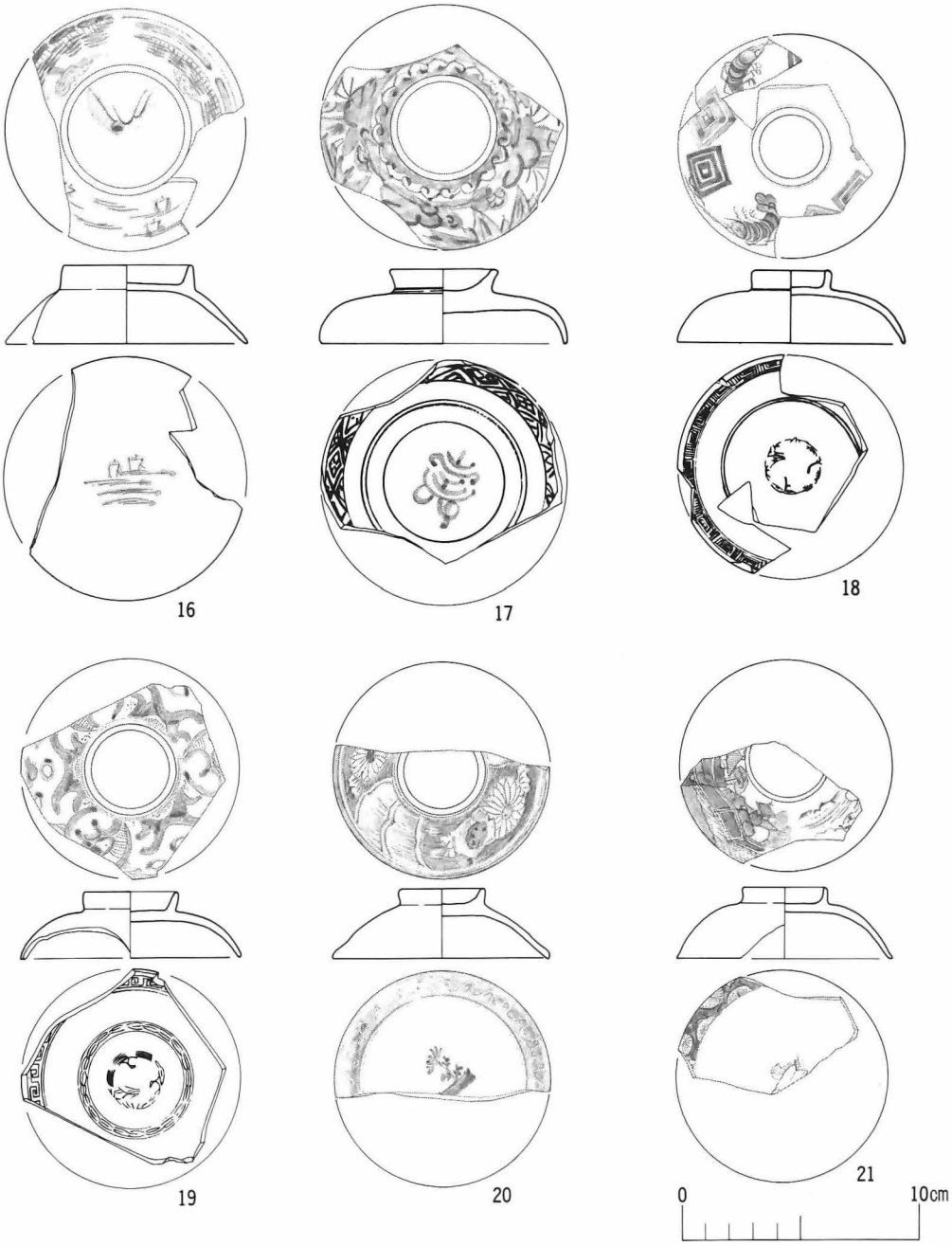
16)は呉須の発色がやや黒ずんでいる。表裏に貫入が目立つ。17)は呉須の発色が暗く釉調は青緑色を呈す。高台に砂目痕。18)は19)とともに呉須の発色が良好。20)21)はやや端反りのある碗蓋。21)は貫入が著しい。

第15図

22)はダミの濃淡が濁る。23,24)は端反りがある。26)はコバルト色が強い。27)は明末染付けで、高台外側にカンナ削り痕が認められる。また、高台縁がシャープな山形にカットされている。28)は清朝の蓋付き碗で、薄手である。29)は焼成不良で、全体に灰色を呈す。30)は呉須の発色が良好。幅が広く器高が低い。31)は蓋物で、釉薬が白濁する。32)は、白濁した釉薬が、横方向に縞模様となっている。33)は器内外面とも釉薬がやや白濁する。高台縁に釉薬の熔着痕がある。34)は器内外面に貫入が著しい。呉須の発色は良い。35)は32)とともに端反りがある。

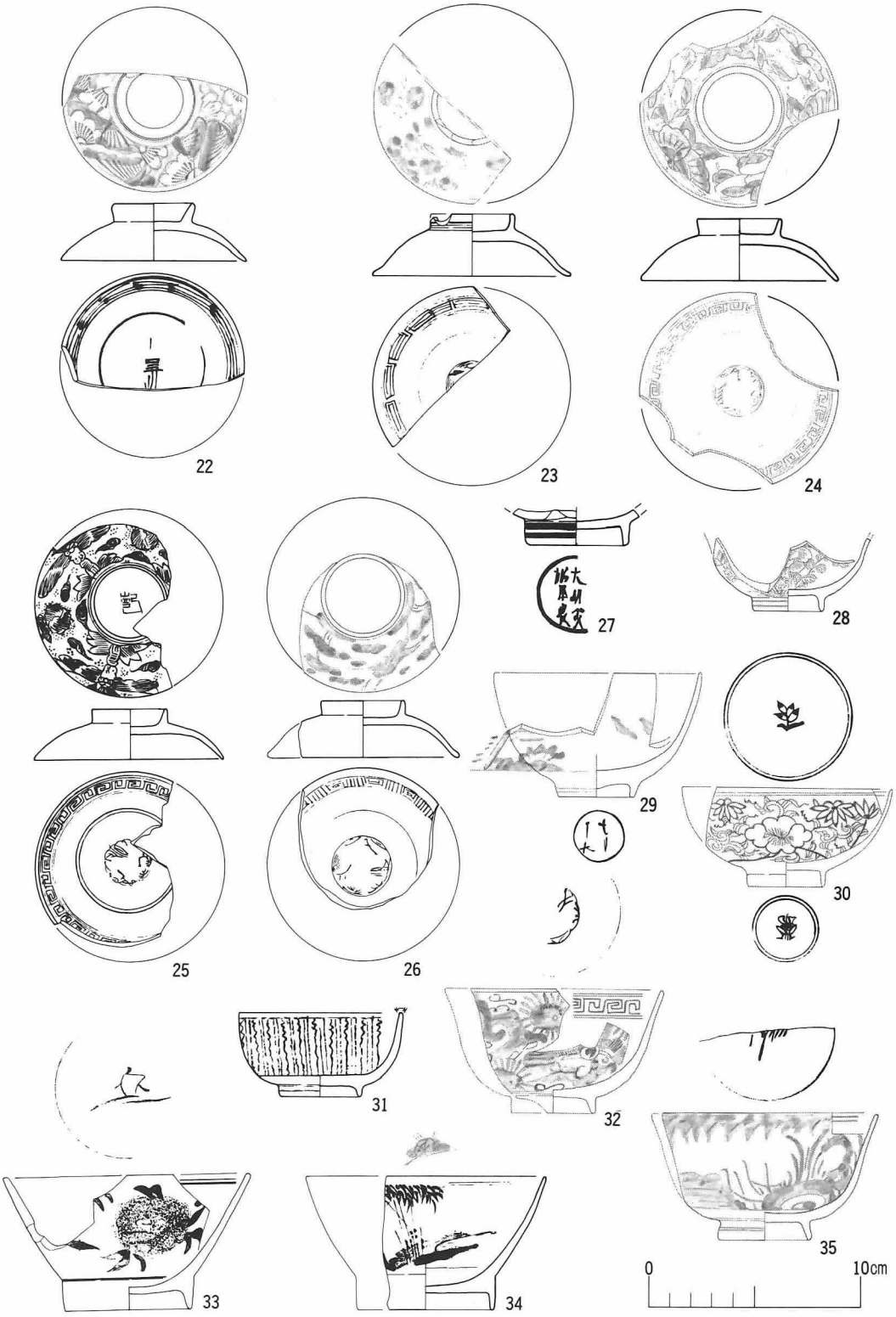
第16図

35)は全体に肉が厚く重量感がある。37)は非常に肉が厚い。38)はゴム版である。39)は色絵碗で、金彩を施す。40)は色絵碗で焼継ぎが認められる。41)は笹文の猪口。釉調はやや青味がある。高台に砂熔着。42)は釉調に青味が強く内外面とも釉薬が発泡している。高台に砂熔着。43)は非



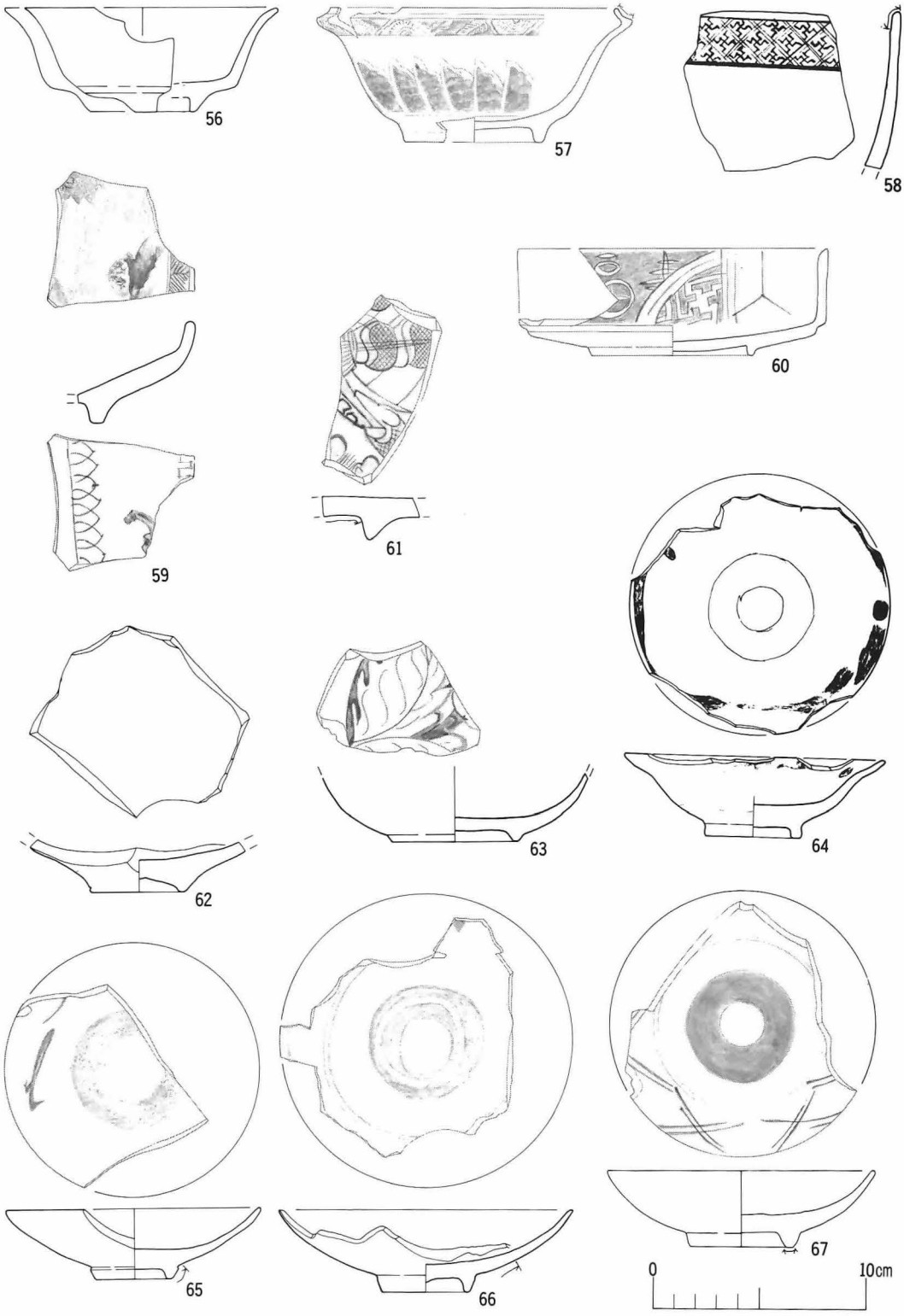
第14図　碗　　蓋　(16～21)

常に小型。端反りがある。44)は七面面とりしやや端反りがある。釉調はやや白濁する。45)は釉調にやや青味がある。46)はコバルト色が強い。47)は九面面取りされ、高台全体が施釉されない。48～52)高台縁より内側を施釉しない。49)は生地の荒れにダミの呉須が染み込む。50～51)は緑釉で、50)は染め付けに口銹。53)は見込の染付けを除いて内側は赤に金彩を施す。54)は端反りの金彩。55)は陶器で口銹、張り模様は金彩、高台外側も金彩を施す。

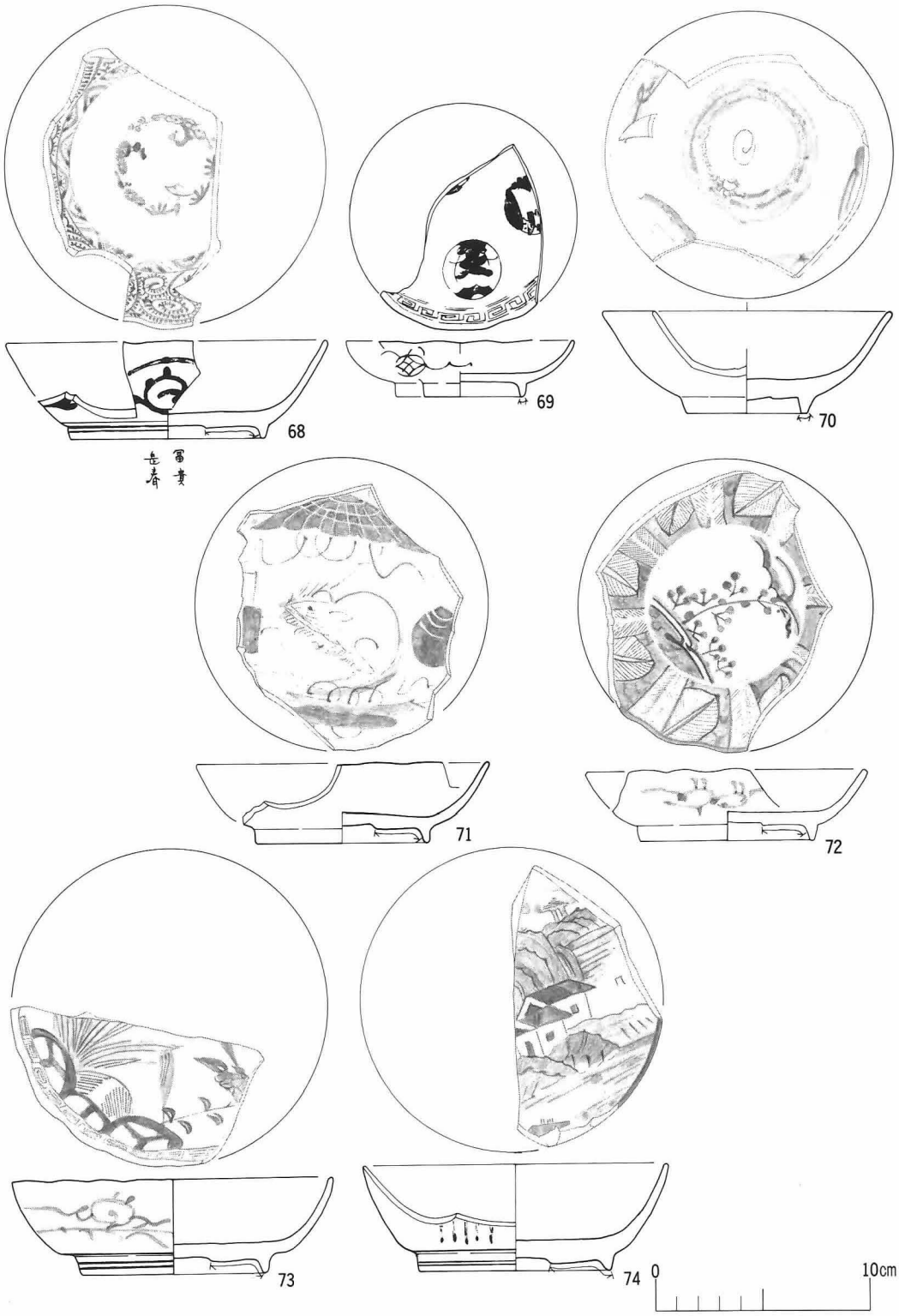


第15図　碗　蓋・碗　(22～35)

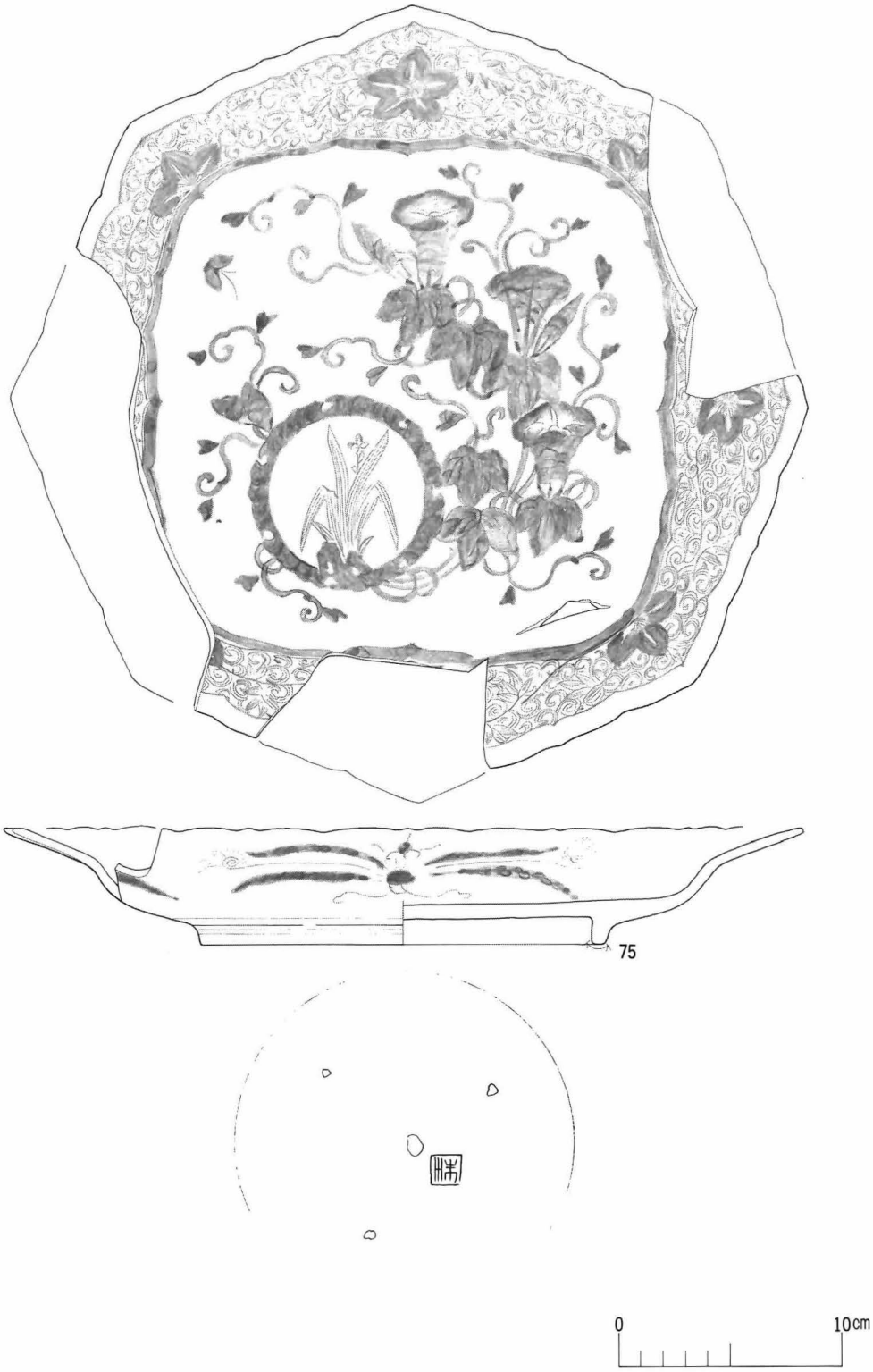
第16図　碗　・　盃　(36～55)



第17図　皿・その他　(56～67)



第18図　皿　(68～74)



第19図　大　　皿　(75)

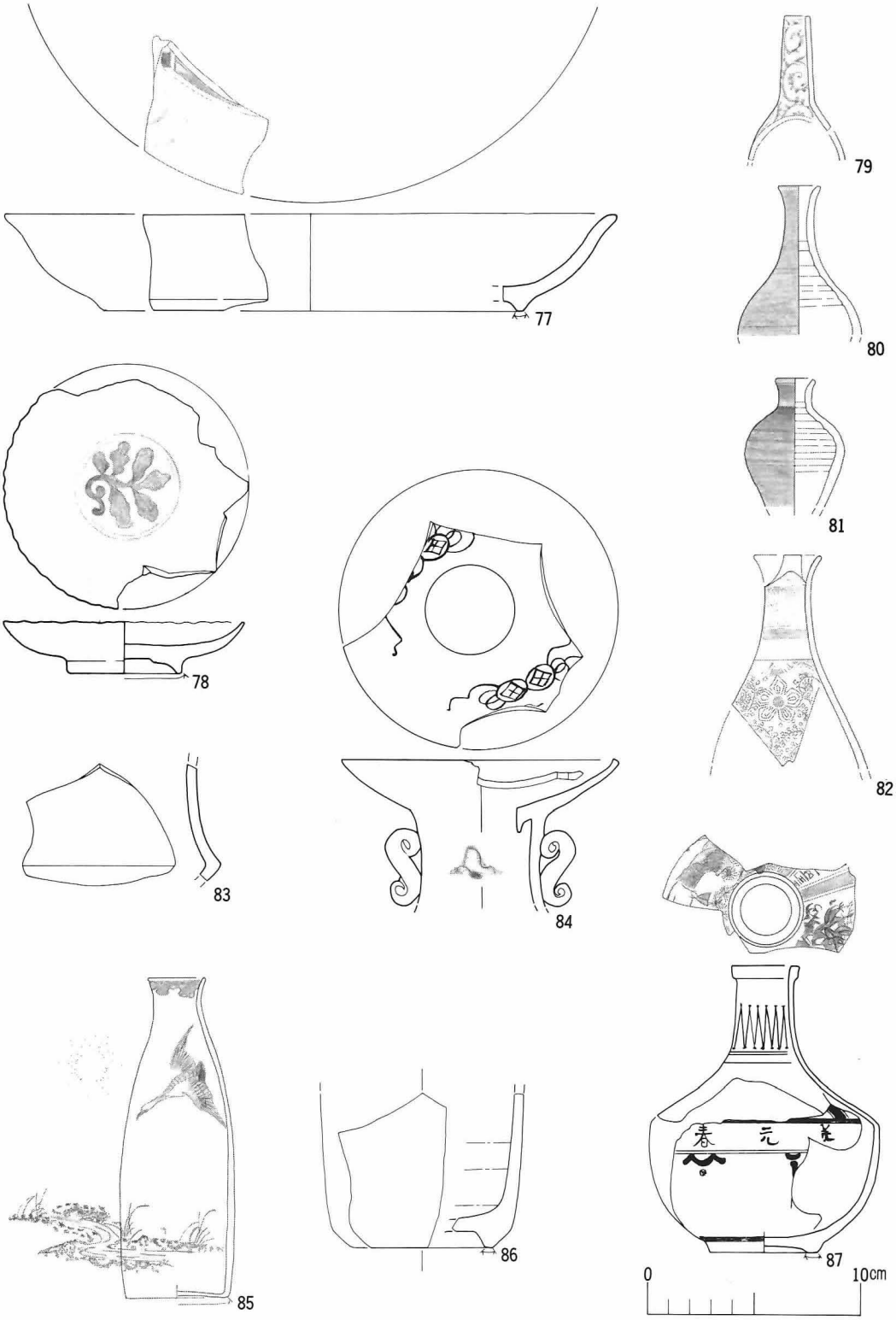
第20図　大　　皿　（76）

第17図

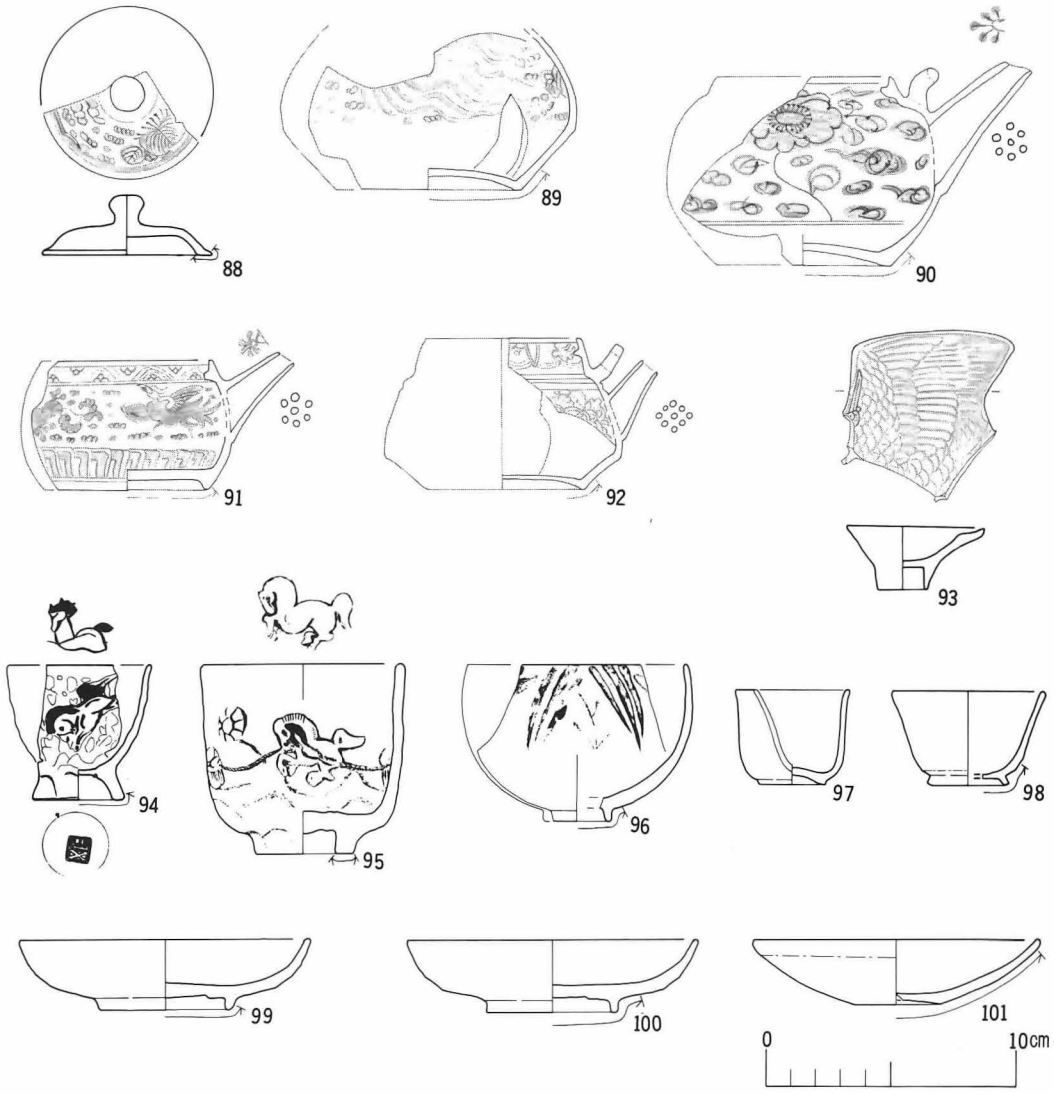
56)は青磁鉢でやや灰色がかる。57)は染付け蓋物で、口縁が大きく開く。58.59)は青磁染付けで、58)は蓋付き、59)は角鉢。60)は絵付け段重で金彩。見込アルミナ塗布。61 は明末の大皿で、高台縁内側に砂熔着。62)は砂目積の皿。63)は染付け皿で、釉調は白濁している。64)は、 見込蛇の目釉剝ぎで、銅緑であるが灰色。65～67)は染付けで、見込蛇の目釉剝ぎ。67)は高台縁のみ無釉。

第18図

第25図は、69)を除き蛇の目凹型高台である。70 は見込蛇の目釉剝ぎで、高台縁のみ無釉。74)は口銹。70.74)を除いて形打ち。



第21図　瓶・その他　(77～87)



第22図　急　須・陶器類　（88～101）

第19図

75)は八角染付け大皿で、ハリ支え4か所。釉調はやや青緑色を呈す。

第20図

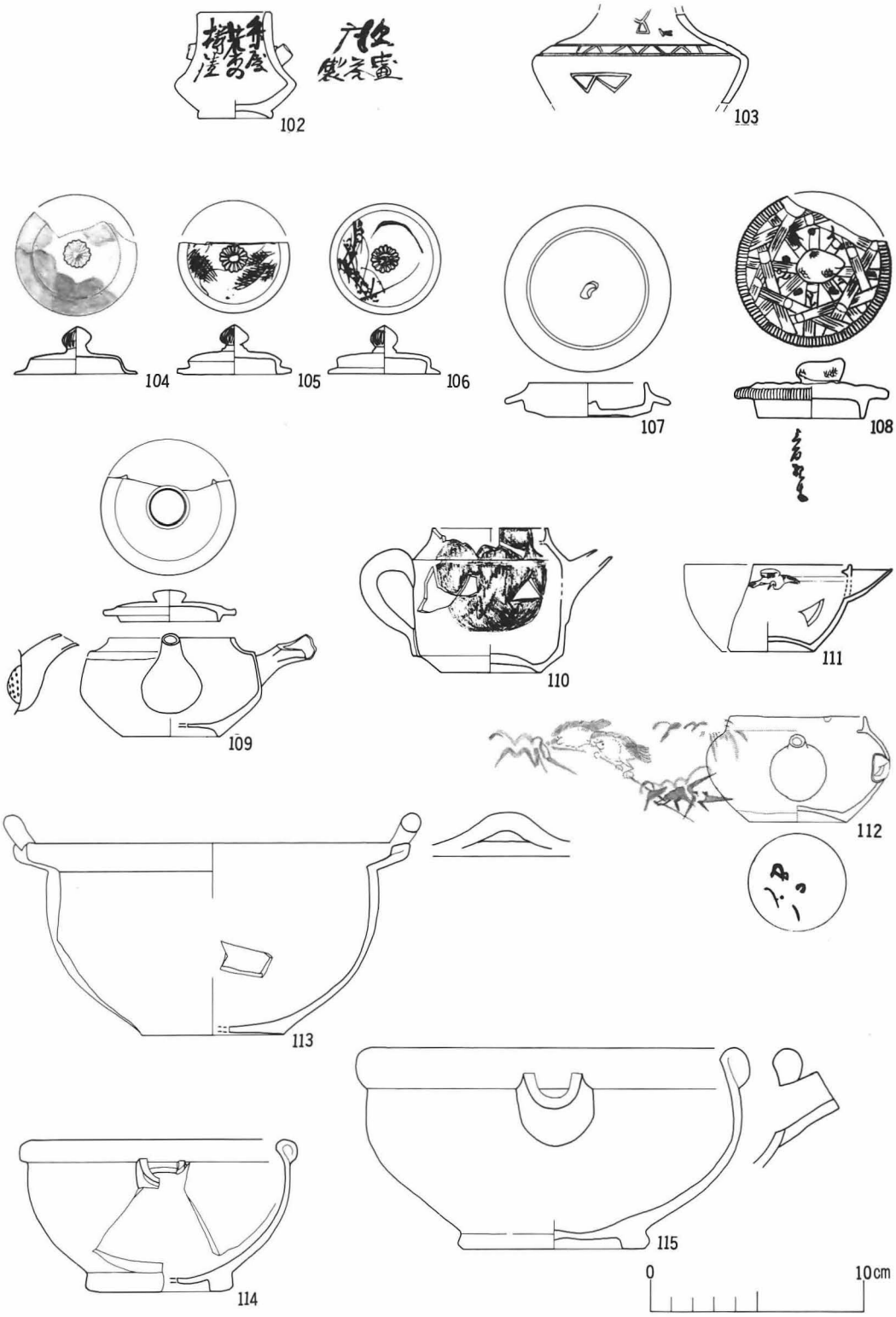
76)は染付け大皿で、ハリ支えが3か所認められるが中央の窪みが著しい。釉調はやや青緑色を呈す。

第21図

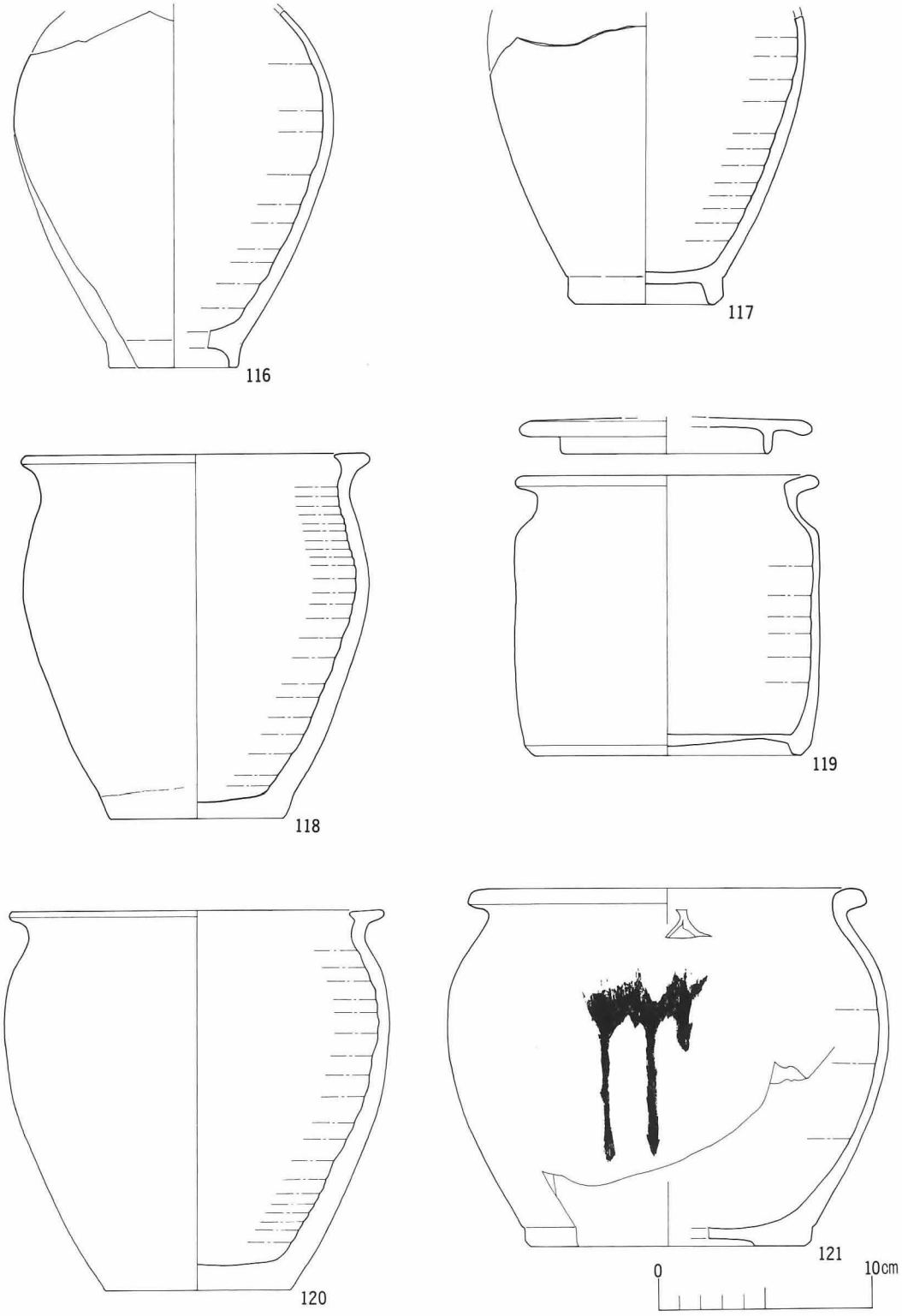
77)は青磁染付け形打ちの大皿。釉調は、灰緑。79～84)は仏具。80,81)瑠璃釉。83)は青磁。釉調は青緑色を呈す。85 は吹き墨の徳利。86 はコンプラ瓶。87)は非常に薄手。

第22図

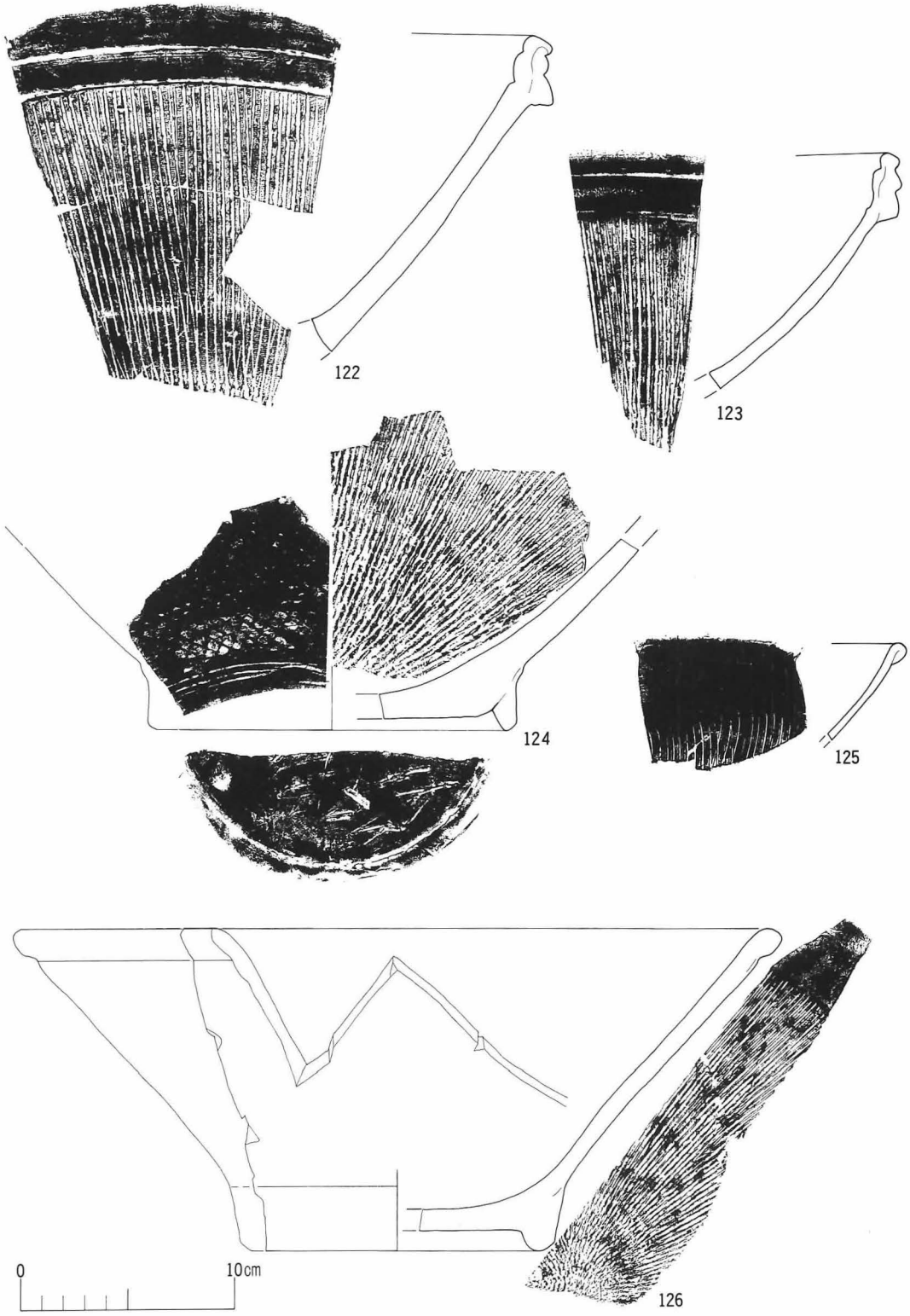
88～92)は明治以降の磁製の急須類で、92)注口下位に呉須書きで「箕□」が読める。93) は陶



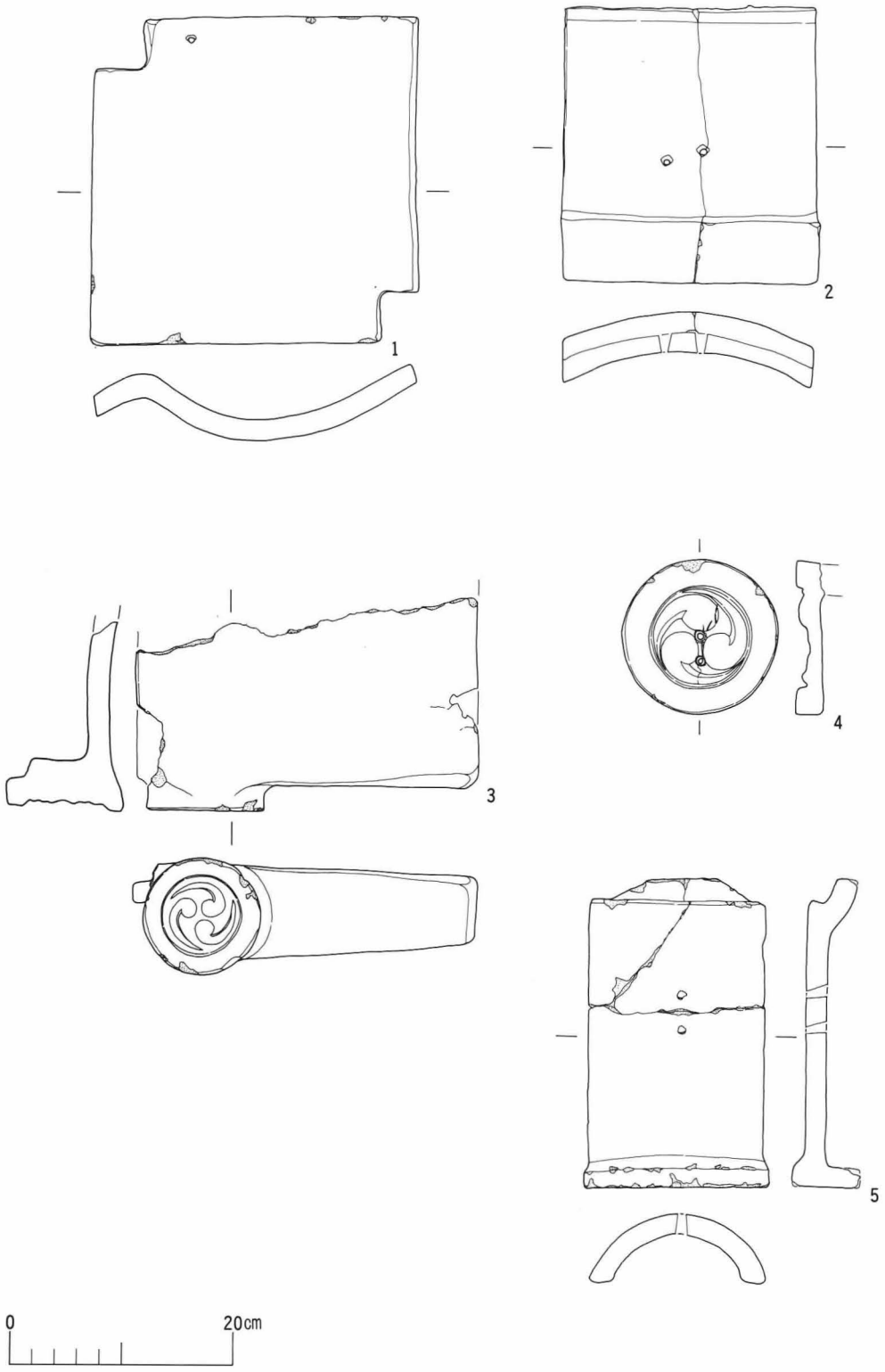
第23図　陶　器　類　（102～115）



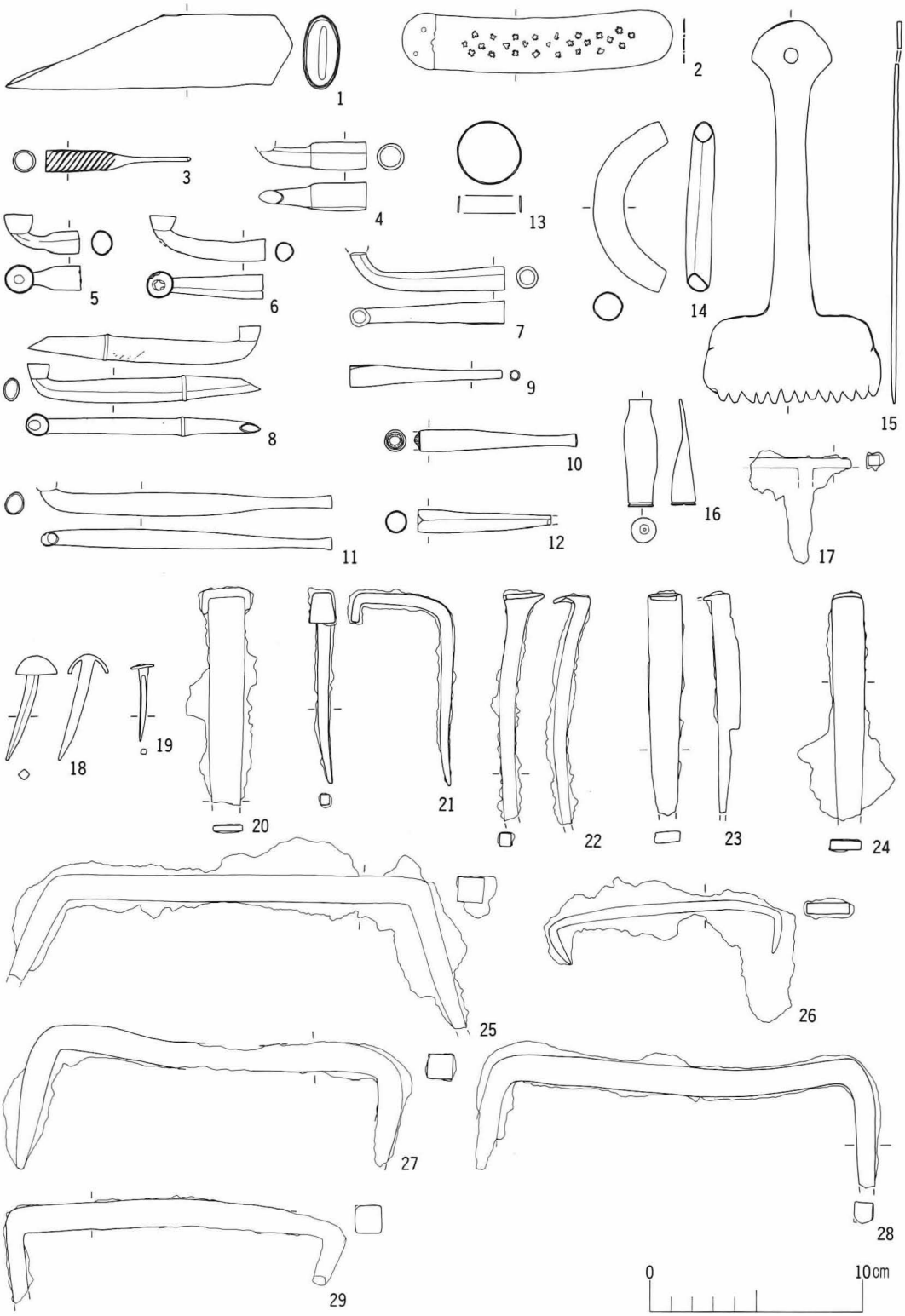
第24図　甕・徳　利　（116～121）



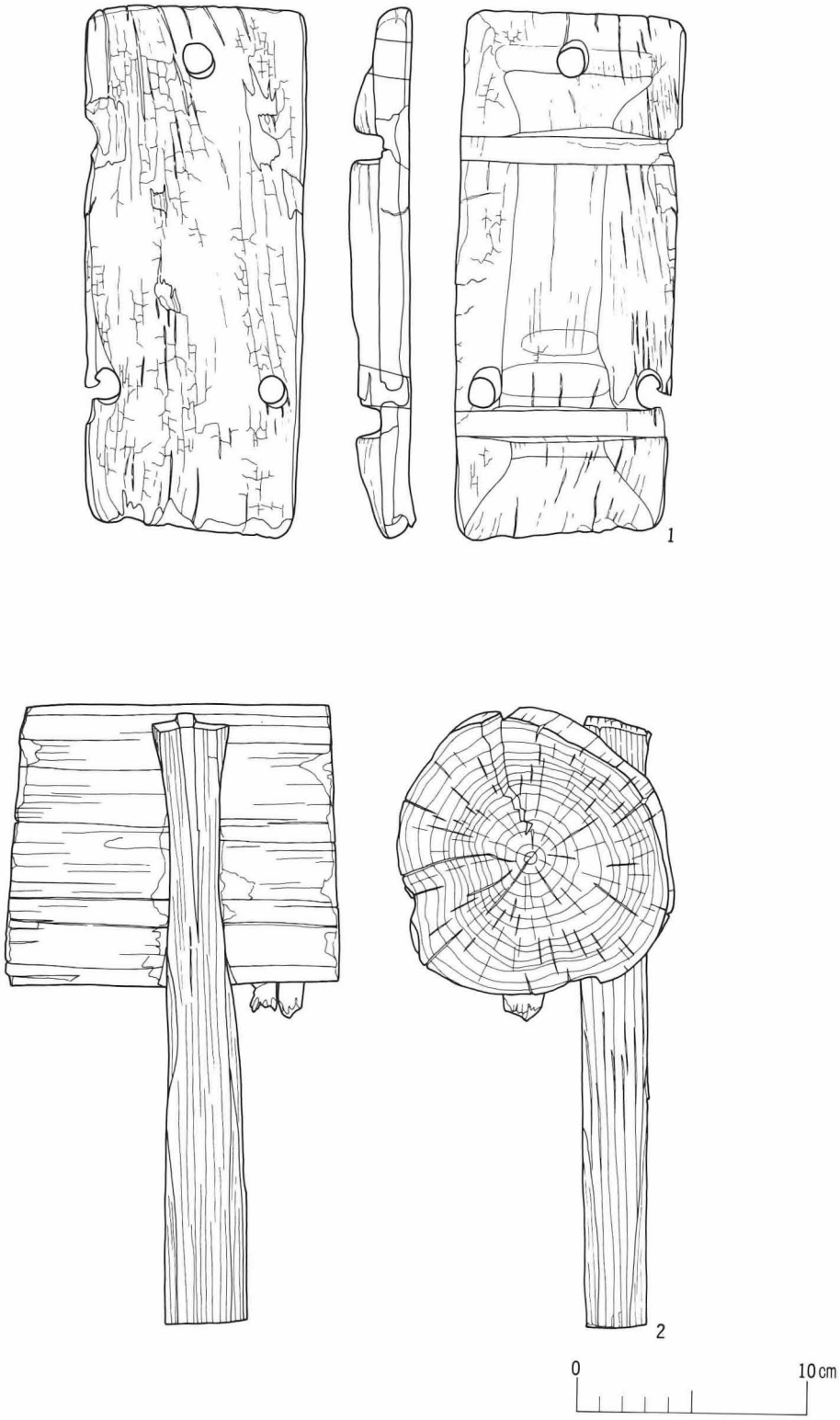
第25図　擂　　鉢　（122～126）



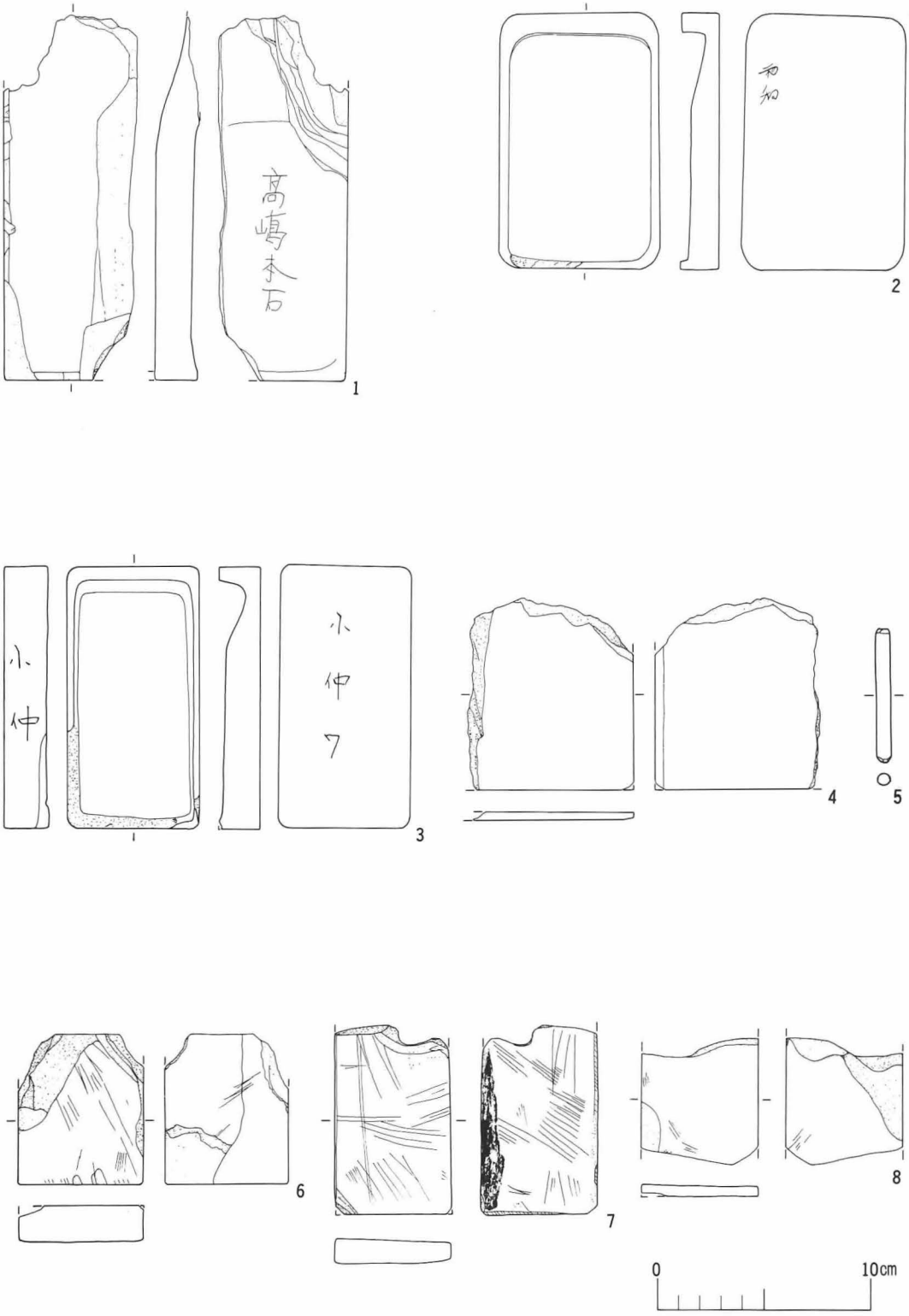
第26図　瓦　（1～5）



第27図　金　属　製　品　（1～29）



第28図　木　製　品　（1～2）



第29図　石　製　品　（1～8）

質で、高台内と器外面に薄く釉掛され、器内面は無釉で絵付けさせる。94(は、高台内に「山田」の銘款が認められる。96)は、透明釉に上絵付け。97)は無釉。98)は釉薬が完に溶けていない。99 は、高台内器台脇やや上位に「仁清」の銘款が認められる。101)は口縁内外面にカーボン の付着が認められる。

第23図

103)は無釉。赤色顔料が鋸歯文に付着。104)は非常に薄手の三彩蓋。105,106)は金彩で、つまみ部が可動。107,108)は、器上面に施釉し、貫入部に吸炭が認められる。109)は胎土が吸炭する。非常に薄手。110)は、透明釉、緑釉。111)は、注口、蓋受け縁に金彩。112)は透明釉下絵にクロム緑釉。

第24図

116)は高台が釉薬の垂下による熔着が認められ、117)は高台削りがシャープである。118)は口唇部に砂粒の熔着がある。119)は透明釉。120)は118)と同様に口唇部に砂粒の熔着がある。121)は高台削りがシャープである。

第25図

122.123)とも櫛目の本数は9本である。122)は小砂利の混入が著しい。124)は付け高台の内側接合部にクラックが巡る。

○瓦

第26図

瓦類は、今年も桟瓦が大量に出土した。

○金属製品

第27図

金属製品は、生活具と釘類が多い。25)の鎹は、天神坂門正面左側控柱柱穴から出土したものである。27)の鎹は同じく右側の控柱柱穴から出土したものである。どちらも6寸の幅がある。

○木製品

第28図

1)の差歯下駄は長さ23cmある。2)の小槌は使用痕が認められない。どちらも外堀へドロ層から出土した。

○石製品

第29図

石製品のうち硯には近江高嶋産のものが認められた。

表－2　出土遺物観察表

陶磁器(1)

図版No.	写真図版	出土区	種別	器種	計測値(口径×底径×高さ)cm			産地、年代、文様等
第13図1	図版19	SFライン	磁器	不明	――	――	――	魚
〃 2	〃	SG－4	〃	水滴	――	――	――	兎
〃 2	〃	不明	〃	人形	――	――	――	
〃 4	〃	SB－5裏込	〃	紅皿	2.1	0.8	1	瀬戸、美濃系、器内面と口縁外側に施釉
〃 5	〃	SD－5	〃	〃	4.8	1.4	1.3	〃　〃
〃 6	〃	外堀	〃	〃	4.6	1.4	1.5	〃　〃
〃 7	〃	SB－6裏込	〃	〃	4.6	1.2	1.4	〃　〃
〃 8	〃	外堀	〃	角皿	(7.8)	3.4	2.3	染付、波に千鳥文、見入瀧文
〃 9	〃	不詳	〃	手塩皿	10.2	5.6	2.3	幕末～明治、瀬戸・美濃、見入寿文
〃 10	〃	〃	〃	〃	9.6	5.7	2.1	
〃 11	〃	SG－4	〃	蓋	(21.4)	――	――	肥前　染付
〃 12	〃	SD－5	〃	〃	(12.2)	――	2.9	〃　〃　瓔珞文
〃 13	〃	SE－6	〃	〃	(12.0)	4.7	2.6	〃　〃　菊花文
〃 14	〃	不詳	〃	〃	(8.4)	――	5.2	〃　色絵　花蝶文
〃 15	〃	SB－5	〃	〃	13.4	5.6	2.7	色絵、窓絵松竹梅
第14図16	〃	外堀	〃	〃	(10.2)	5.4	3.3	19C前～幕末、染付　山水帆舟文
〃 17	〃	SK－0撹乱	〃	〃	(12.2)	4.4	3.1	肥前18C後、染付、蓋付(見込)寿字、砂熔着
〃 18	〃	SC－5	〃	〃	(9.4)	3.2	3.0	肥前19C前～幕末　染付　海老蔵
〃 19	〃	SC－6	〃	〃	(9.2)	3.8	2.8	肥前　〃　〃　〃　見込　松竹梅
〃 20	〃	SG－4	〃	〃	(9.2)	(3.6)	2.9	〃
〃 21	〃	SC－5	〃	〃	(8.9)	(3.5)	3.0	〃　楼閣山水文
第15図22	図版20	SB－6	〃	〃	(8.6)	3.8	2.7	19C前～幕末　〃　花文、見込寿字
〃 23	〃	Aトレンチ	〃	〃	(9.2)	(5.8)	2.9	19C前～幕末　〃　見込松竹梅
〃 24	〃	SG－5	〃	〃	(9.2)	3.9	2.9	19C前～幕末　〃　花唐草文
〃 25	〃	SL－0	〃	〃	(8.8)	(3.5)	2.4	肥前19C前～幕末　〃　鳳凰文様
〃 26	〃	天神坂門	〃	〃	(9.2)	4.0	2.8	幕末明治　〃　三蓋文に鶴文
〃 27	〃	SA－4	〃	碗	――	4.4	――	明末染付1590－1630染付影德鎮系　高台銘有大明成化年製
〃 28	〃	不明	〃	〃	――	――	3.4	18C中国清朝　染付　花卉文　蓋付碗
〃 29	〃	SL－0	〃	〃	(9.8)	3.6	7.8	肥前18C前　橋くずれ高台銘「大明年製」
〃 30	〃	不明	〃	〃	(10.0)	3.6	4.7	18C後~19C初、花唐草文、高台銘 昆虫」
〃 31	〃	SG－4	〃	〃	7.8	3.8	3.9	肥前系1820～1860　2直線と1波線
〃 32	〃	SB－6.7幕末	〃	〃	(10.4)	(4)	5.9	肥前1820～1860　染付、見込、松竹梅、花文
〃 33	〃	SL－0	〃	〃	(6.8)	6	6.4	紫陽花文、見込帆舟文、広東型
〃 34	〃	SL－0	〃	〃	(11.2)	(6.4)	6.3	染付、竹林山水文、見込文有　〃
〃 35	〃	SL－0	〃	〃	(10.8)	4.4	6	肥前系　1820～1860　染付　端反
第16図36	〃	SE－5	〃	〃	10.0	5.8	5.2	〃　高台銘有　見込文有　鳳凰文
〃 37	〃	SG－5	〃	〃	11.8	4.2	5.1	〃　山水文　高台銘有
〃 38	〃	SM－0	〃	〃	11.8	4.2	4.8	〃　松竹梅文、高台銘有
〃 39	〃	SG－3	〃	〃	――	3.4	――	肥前（有田）　色絵　18C前～中
〃 40	〃	三本松表採	〃	〃	(6.6)	4.6	6.4	〃
〃 41	図版21	SL－0	〃	猪口	(6.6)	2.4	3.1	18C代　〃　チョク笹？
〃 42	〃	外堀	〃	〃	7.4	2.7	4.1	18C代　染付、梅花に縦線、高台内に砂熔着
〃 43	〃	SC－6	〃	〃	(5)	2	2.8	〃　蝦文
〃 44	〃	SC－5	〃	〃	6.4	2.6	4.6	染付　漢詩文　高台銘有
〃 45	〃	外堀	〃	〃	3.4	3.2	4.2	〃　〃　高台銘有
〃 46	〃	〃	〃	〃	6.6	2.4	4.2	〃　草花文
〃 47	〃	SA－7	〃	〃	(6.8)	2.8	4.4	〃　花文
〃 48	〃	SD－6	〃	〃	6.6	2.8	4.2	瀬戸、美濃　〃　横線文
〃 49	〃	SM－0	〃	碗	(7.8)	(3.0)	3.6	〃　〃　牡丹文
〃 50	〃	SD－6	〃	〃	(8)	3.4	4.5	〃　明治、大正　青磁
〃 51	〃	SE－6	〃	〃	6.6	3.2	3.7	〃　〃　〃　高台一つ巴
〃 52	〃	SG－4	〃	〃	7.8	3.0	4.1	〃　〃　〃
〃 53	〃	不明	〃	猪口	5.0	2.4	2.7	幕末～明治　染付(楼閣山水文)高台銘　九谷
〃 54	〃	表採	〃	〃	5.6	2	2.9	色絵　蝦文
〃 55	〃	SE－6	陶器	碗	7.8	3.4	4.2	関西系　色絵（亀甲鶴文様）貫入有
第17図56	〃	不明	磁器	鉢	(12.8)	4.8	4.9	肥前青磁18C前
〃 57	〃	外堀	〃	蓋物	(14.8)	(6.6)	6.3	染付　剣先蓮弁（蓋物）
〃 58	〃	A－4	〃	〃	――	――	――	肥前蓋付19C初　青磁染付
〃 59	〃	SC－5	〃	角鉢	――	――	――	肥前19C初～幕末　青磁染付
〃 60	〃	SE－6	〃	段重	(14.6)	7.6	4.9	色絵　（蓋物）
〃 61	〃	SL－0	〃	皿	――	――	――	明末1590～1630　高台砂熔着
〃 62	〃	SA－4	陶器	〃	――	4.4	――	肥前　砂目積1600～1630
〃 63	〃	SA－5トレンチ	〃	皿	――	(6)	――	初期伊万里1630～1640　肥前染付

陶磁器(2)

図版No.	写真図版	出土区	種別	器種	計測値(口径×底径×高さ)cm			産地、年代、文様等
第17図64	図版21	SL－0	陶器	皿	(12.2)	4.5	3.7	18C前　肥前　内野山系カ　銅線
〃 65	〃	〃	磁器	〃	(11.8)	3.6	3.3	18C肥前　波佐見
〃 66	〃	SM－0	陶器	〃	(13.8)	4.1	3.8	18C前　肥前（銅緑）内野山系　貫入有
〃 67	〃	外堀	磁器	〃	(12.6)	5.0	3.6	18C後　肥前　格子文
第18図68	図版22	SB－5	〃	〃	(15.2)	(9.2)	4.6	染付　蛸唐草文　見込「松竹梅」高台銘「富貴長春」
〃 69	〃	不詳	〃	〃	(10.7)	(5.9)	2.6	肥前後1820~1860 染付 丸文 楼閣山水文 外面(七宝珠繋文)
〃 70	〃	SG－5	磁器	〃	(10.7)	(5.9)	2.6	肥前後1820~1860染付 丸文 楼閣山水文 外面(七宝珠繋文)
〃 71	〃	SL－0	〃	〃	(13.8)	8	3.7	染付　鼠文
〃 72	〃	不詳	〃	〃	13.2	8.2	3.3	〃　矢羽根文様　見込南天文
〃 73	〃	SE－5	〃	〃	(15)	(8.6)	4.5	〃　草花文　外面唐草文
〃 74	〃	SL－0	〃	〃	(14.2)	(9.0)	5.0	〃　風景文
第19図75	〃	表採	〃	〃	(35.8)	18.2	5.3	〃　花卉文　高台銘有
第20図76	〃	SD－5	〃	〃	(32.4)	18.8	5.1	〃　花鳥文
第21図77	図版23	SD－5	〃	〃	(28.8)	(39.8)	4.5	19C初肥前　青磁染付
〃 78	〃	不明	〃	〃	(11.3)	5.2	2.4	瀬戸、美濃　明治、大正　青磁
〃 79	〃	SB－5	〃	瓶	1.2	——	——	18C後～幕末肥前　染付　蛸唐草文
〃 80	〃	SG－4	〃	〃	1.9	——	——	18C後～幕末肥前　瑠璃釉
〃 81	〃	不明	〃	〃	1.8	——	——	〃　〃　瑠璃釉
〃 82	〃	SC－5	〃	徳利	3.2	——	——	明治以降　瀬戸・美濃　色絵
〃 83	〃	SB－5	〃	〃	——	——	——	青磁
〃 84	〃	SL－0	〃	仏花器	13	——	——	18C前～中　肥前　染付　山水文薄端花生七宝繋文
〃 85	〃	不明	〃	徳利	2.6	4.6	15	明治中以降　瀬戸・美濃　染付　秋草文鶴文　(吹墨)
〃 86	〃	SG－4	〃	瓶	——	6.6	——	波佐見　コンプラ瓶
〃 87	〃	A－4	〃	〃	3.2	5.2	13.4	関西系19C　染付　「竹林人物文」
第22図88	〃	SG－4	〃	蓋	(6.8)	——	2.4	明治以降　〃
〃 89	〃	SFライントレンチ	〃	急須	——	(7.6)	——	〃　〃
〃 90	〃	〃	〃	〃	(6.8)	7.0	7.6	〃　〃　花文
〃 91	〃	三本松トレンチ	〃	〃	(6.6)	(6.6)	5.2	〃　〃　桐唐草飛鳳凰文
〃 92	〃	SL－0	〃	〃	——	(7.6)	——	〃　〃
〃 93	〃	SG－3	陶器	皿	5.5	2	2.6	17C後　内面に型打による鶴羽文様　変型皿
〃 94	図版24	SL－0	〃	碗	(5.8)	3.4	5.4	相馬　山田窯
〃 95	〃	SA－5トレンチ	〃	〃	(8)	4	7.6	相馬
〃 96	〃	SA－7	〃	〃	(8.8)	(2.6)	6.3	関西系18C　内外面透明釉、高台無釉　外面　笹文上絵付
〃 97	〃	SC－6	〃	猪口	(4.5)	(2.7)	3.8	
〃 98	〃	SG－4	〃	〃	(6)	(2.8)	3.8	貫入有
〃 99	〃	〃	〃	皿	(11.6)	(5.2)	2.8	渦巻高台、瀬戸、美濃、幕末　内外面透明釉　高台無釉
〃 100	〃	〃	〃	〃	(11.7)	(5.2)	2.9	〃
〃 101	〃	不明	〃	燈明皿	(11.4)	(3.4)	2.6	内面　口縁部　灰釉（外面　赤褐色塗彩）煤付着　貫入有
第23図102	〃	SE－0	〃	瓶	3.3	5.0	3.4	関西系　19C以降　〃
〃 103	〃	SE－5	〃	〃	——	——	——	〃
〃 104	〃	SFライントレンチ	陶器	蓋(急須)	(5.7)	——	2.2	三彩系
〃 105	〃	SE－6	陶器	〃	(4.8)	——	2.6	
〃 106	〃	不詳	〃	〃	5.2	——	2.6	
〃 107	〃	SB－6	〃	蓋(土瓶)	5.6	4	1.6	
〃 108	〃	SD－6	〃	〃	5	——	2.9	
〃 109	〃	SB－5	〃	急須	(5.8)	(4.6)	5.8	
〃 110	〃	SFライントレンチ	〃	水注	(5.4)	4.7	6.8	灰釉
〃 111	〃	SE－5	〃	〃	(7.8)	4.4	4.1	浮彫鶴文
〃 112	〃	SFライントレンチ	〃	急須	6.4	4.6	5	関西系　明治10年以降　クロム　貫入有
〃 113	図版25	SL－0	〃	鍋	(18.8)	(6.6)	9	外耳鍋　鉄釉施釉　底部に足貼付け
〃 114	〃	SB-6、SC-6、三本松	〃	片口	12	(5.4)	7.1	内外面透明釉　高台無釉　砂目積み
〃 115	〃	SF－5	〃	〃	(16.8)	8.5	9.4	高台脇まで薄い黄味の釉、内面見込みに重ね焼きの痕
第24図116	〃	SL－0	〃	甕	——	(5.8)	——	
〃 117	〃	SD－6	〃	〃	——	6.6	——	
〃 118	〃	SC－7昭和石垣	〃	〃	(16.0)	8.2	17.0	鉄釉
〃 119	〃	SF－5	〃	〃(蓋付)	13.6	12.4	14	透明釉
〃 120	〃	SG－5	〃	〃	17.4	8.6	17.7	鉄釉
〃 121	〃	SG-4.5、SE-6	〃	〃	16.8	(12.8)	16.7	
第25図122	図版26	SM－0	〃	摺鉢	——	——	——	胎土赤褐色
〃 123	〃	SL－0	〃	〃	——	——	——	〃
〃 124	〃	SB－6	〃	〃	——	——	——	叩き目痕
〃 125	〃	三本松	〃	〃(鉢か)	——	(16.8)	——	
〃 126	〃	SM－0	〃	〃	(35.2)	(13.6)	15.1	

瓦

図版No.	写真図版	出土区	種別	計測値	備考
第26図1	図版26	SB－6	瓦	29.4　29　2.2	桟瓦
〃　2	〃	SB－16	〃	24.6　23.2　3.8	熨斗瓦
〃　3	〃	三本松Aトレンチ	〃	30.9　17.2　10.5	三つ巴文
〃　4	〃	表採	〃	14.1　13.8　2.5	〃
〃　5	〃	三本松Aトレンチ	〃	27.7　16.7　2.2	丸瓦

金属製品

図版No.	写真図版	器種、種別	出土区	長幅厚（cm）	重量(g)	備考
第27図1	図版27		SM－0	13.4　1.7　3.4	60.6	銅製　刀装具　柄
〃　2	〃	飾金具	SG－4	12.6　4.5　0.5	12.8	銅製
〃　3	〃	煙管、吸口	SE－6	6.8　1.1　1		沈線　模様有
〃　4	〃	煙管、雁首	SA－4	5.1　1.3　1.2		真ちゅう製
〃　5	〃	〃	SA－7	3.4　1.1　1		銅製
〃　6	〃	〃	外堀	5.5　1.1　1	5.7	真ちゅう製　腐蝕欠損
〃　7	〃	〃	SG－3	7.2　1　1	15.2	〃　火皿欠損
〃　8	〃	煙管.延煙管	奉行所柱穴B	11　0.8　1.1	22.2	〃　笹竹模様有
〃　9	〃	煙管、吸口	SG－3	7.1　0.9　0.9	4.9	〃　ろう接開
〃　10	〃	〃	SC－5	7.4　1.1　1.1	8.7	〃　羅宇残
〃　11	〃	煙管延煙管	SA－5	13.7　0.8　1.1	21.5	〃　火皿欠損、雁首羅宇吸口が一体
〃　12	〃	煙管、吸口	SL－0	6.3　1　1	8.0	〃　欠損
〃　13	〃		SFライントレンチ	2.9　0.8　0.1	3.6	〃　用途不明
〃　14	〃	名称不明	SB-5三本松	7.9　1.4　1.2	20.6	〃
〃　15	〃	灰均	外堀	17.9　8.4　0.3	74.5	〃　錆付着
〃　16	〃	薬莢	三本松	5.1　1.2　1.1	9.7	〃
〃　17	〃		SA-5三本松	(5.0)　(4.7)　(0.5)	－	鉄製　腐蝕著
〃　18	〃	銅釘	SB－5	5.4　1.8　1.8	13.5	銅製、太鼓鋲、歪曲
〃　19	〃	〃	SK－0	3.7　1　1	3.0	〃
〃　20	〃	鉄釘	SG－4	(10.2)　(3.1)　(0.4)	－	鉄類　腐蝕著　先端欠損
〃　21	〃	〃	SL－0	(9.1)　(1.3)　(0.6)	－	鉄製　歪曲　腐蝕
〃　22	〃	〃	SL－0	(10.9)　(1.9)　(0.7)	－	〃　腐蝕　錆顕著
〃　23	〃	〃	SG－4	(10.6)　(1.6)　(0.6)	－	〃　腐蝕著　先端欠損
〃　24	〃	〃	SG－4	(10.8)　(3.9)　(0.6)	－	〃　腐蝕著、先端欠損
〃　25	〃	鎹	SJ－12左側控柱	17.8　(7.3)　1.2	－	〃　錆顕著
〃　26	〃	〃	SFライントレンチ	(12)　(2.2)　(0.9)	－	〃　〃
〃　27	〃	〃	SI－13右側控柱	(17.8)　(7.9)　(1.4)	－	〃　〃
〃　28	〃	〃	〃	(18.5)　(5.7)　(0.9)	－	〃　〃
〃　29	〃	〃	SA－5	(15.9)　(4.4)　1.2	－	〃　〃

木製品

図版No.	写真図版	出土区	種別	計測値	備考
第28図1	図版28	不明	下駄	22.8　9.6　2.6	木製品
〃　2	〃	外堀	木槌	26.9　14.5　11.2	〃

石製品

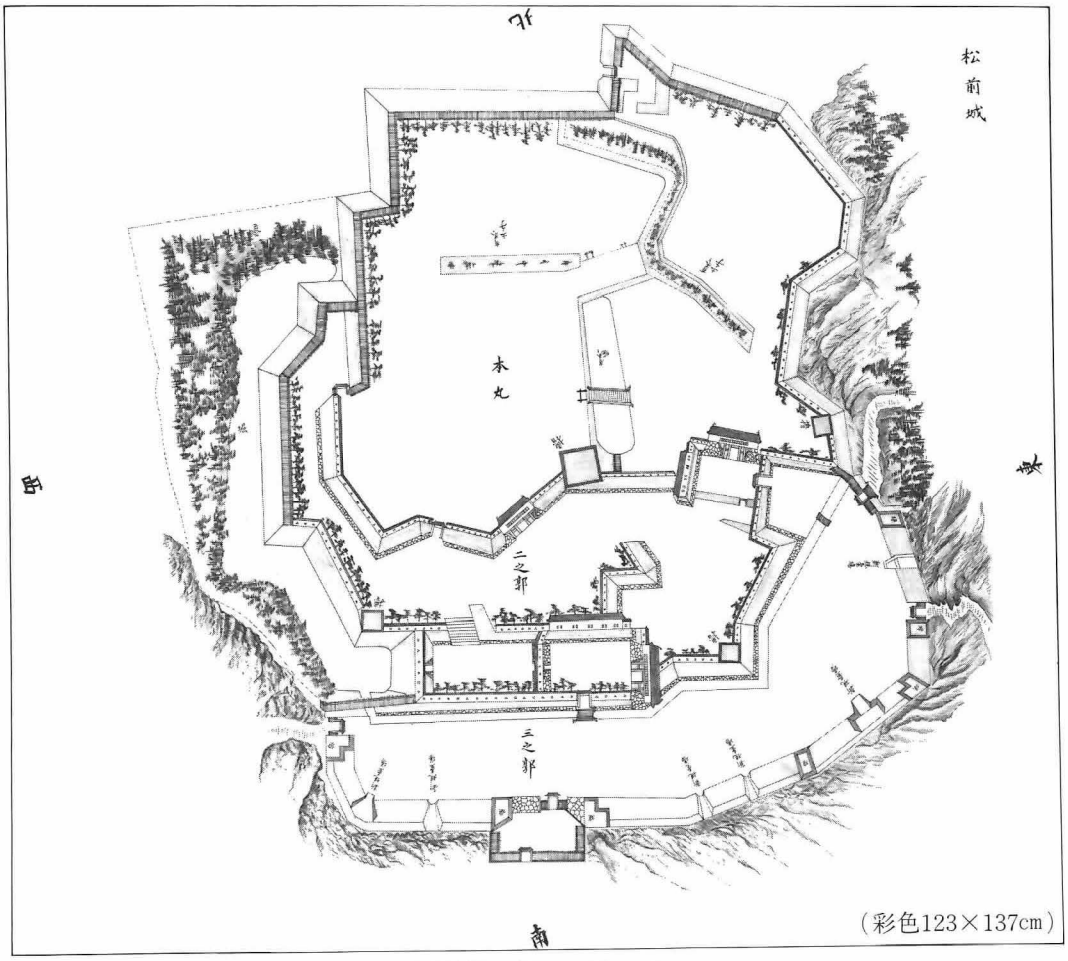
図版No.	写真図版	出土区	種別	計測値	備考
第29図1	図版28	外堀	硯	(17.0)　(6.1)　(2.0)	片岩
〃　2	〃	表採	〃	11.9　7.5　1.8	粘板岩
〃　3	〃	三本松	〃	12.2　6.2　2.0	
〃　4	〃	SG－4	石板	(8.9)　(7.8)　(0.4)	粘板岩
〃　5	〃	A－5	石筆	6.2　0.7　0.5	
〃　6	〃	SM－0	砥石	(7.0)　5.8　1.7	泥岩
〃　7	〃	SL－0	〃	(8.8)　5.5　1.2	〃
〃　8	〃	SL－0	〃	(5.7)　5.5　0.5	〃

Ⅲ　ま　と　め

今年度の調査により、外堀南東隅の位置、外堀より搦手枡形に延びる土居の位置、三本松土居の規模、天神坂門の位置と規模が明確になった。これまでの調査では、城内各部位の建物および、門、堀などの部分的な形状と規模は判ったが、それらが面的な位置関係として絵図と対比できる資料に乏しかった。今回、福山城外堀の内、東側の全容が明らかになったことと、外堀から搦手枡形に延びる土居の位置などが判ったことによって、それぞれの絵図寸法と対比させることが出来た。まず、それぞれの絵図の出典とその特徴を概説する。

第30図　「松前城」(北海道大学附属図書館北方資料室　収蔵No.1807)

土居にかかる建造物、櫓、多門櫓、渡り櫓門、高麗門、塀、橋、階段、台場などが描かれており、渡り櫓門、高麗門などは、立体的に詳細に描かれている。また、平場の建物は一切描かれていない。また、「新規台場」と書かれており、旧来のものは「垜（あずち）」と書かれる。また、内堀は「松前奉行所経営地割図」（化政期頃）の描かれ方と似てい

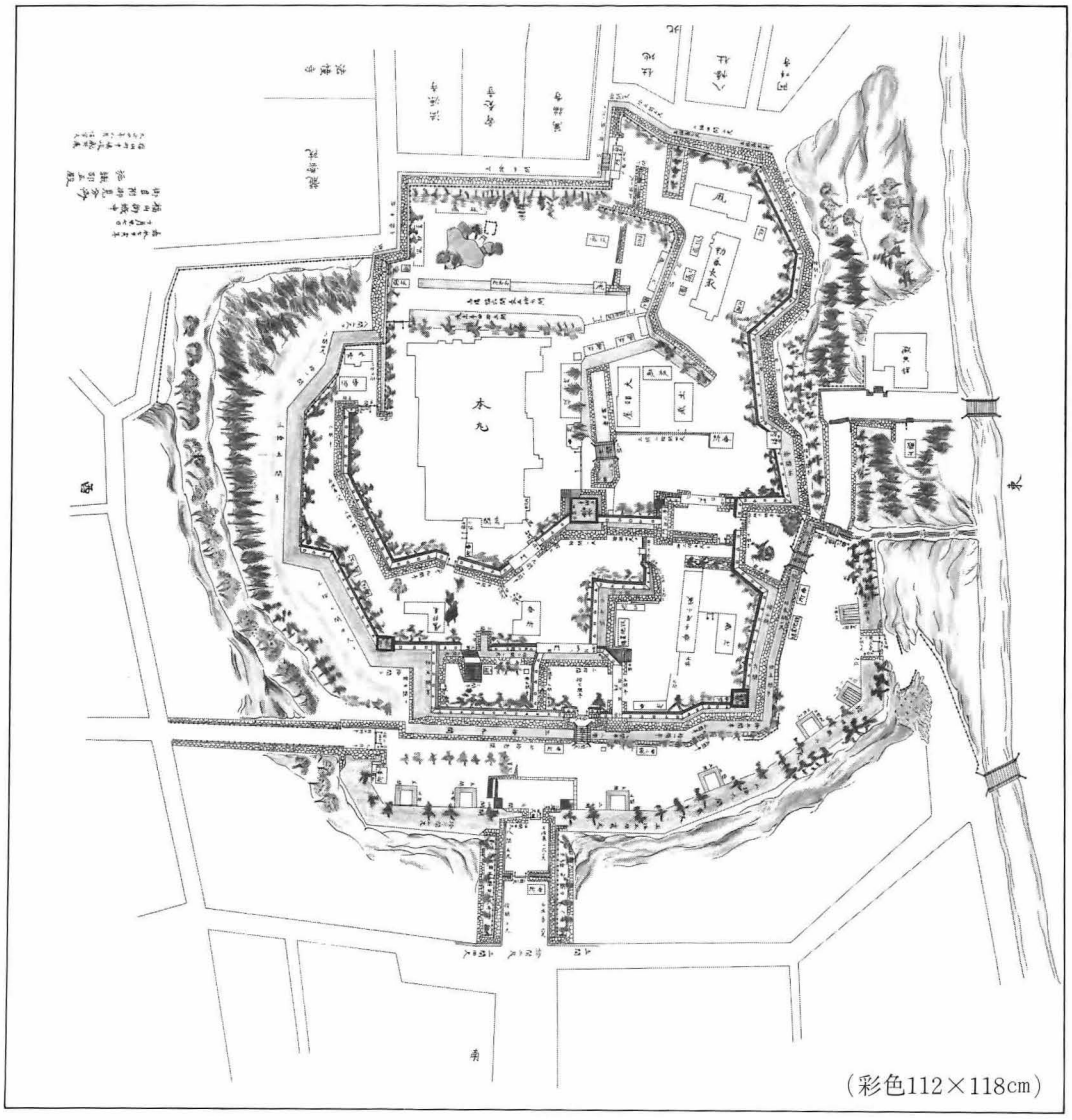


第30図　絵　　図（1）

る。三本松土居が描かれていない。また、「郭」と呼称している。

第31図　「福山城見分図」（北海道大学附属図書館北方資料室　収蔵No.1806）

「嘉永七甲寅年十月二十七日　福山御城中　御目付御見分済　堀織部正殿」の記載あり。福山町中嶋峻蔵氏所蔵を北海道史編纂掛が大正４年８月に模写したもので、完成した遺構、櫓、多門櫓、渡り櫓門、高麗門、堀、土居、塀、柵、橋、階段、台場などの実測値が記載されている。石垣高、あるいは柱間なども詳細に記載されている。第30図と比較すると土居や桝形の位置関係は似ているところが多く、土塀と柵の描き変えは一部をのぞいて同一である。



第31図　絵　　図（2）

第32図　「陸奥国松前福山城焼失所覚」元治元年三月　　（国立公文書館）

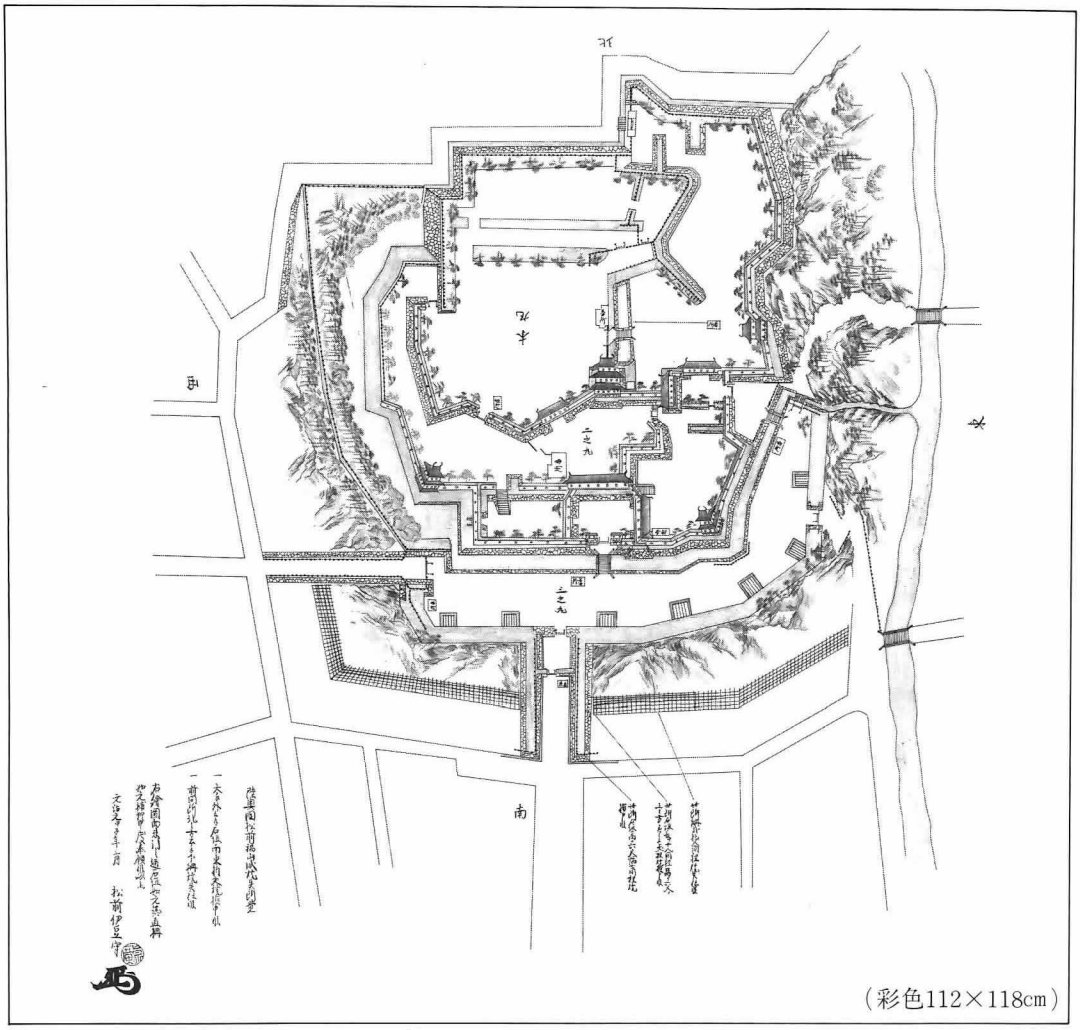
遺構の配置関係が第31図と非常に良く似ている。櫓、多門櫓、渡り櫓門については、立体的に描かれている。細部については、三本松土居が描かれていなかったり、搦手枡形に通じる馬坂の石垣や、徽典館などの遺構が描かれていない。また、内堀の形状も異なる。

第33図　「舊福山城之図」　（北海道大学附属図書館北方資料室　収蔵№1808）

明治24年に松前郡役所が模写したもので、模写元は第31図の原本（中嶋峻蔵氏所蔵）と思われるが、台場の描き方が全く異なる。大手枡形の多門櫓土居の描き方に特徴がある。

第34図　松前神社蔵（図版は部分複写）

原図は、１間を１寸とする、１／60で描かれている。南北約4.9ｍ、東西約3.9ｍの巨大な絵図である。土塀柱間は１間（６尺）である。掲載した図の縮尺は１／500である。



第32図　絵　　図（3）

第35図　「北海道史」　付録　地図　第三類第四　大正７年

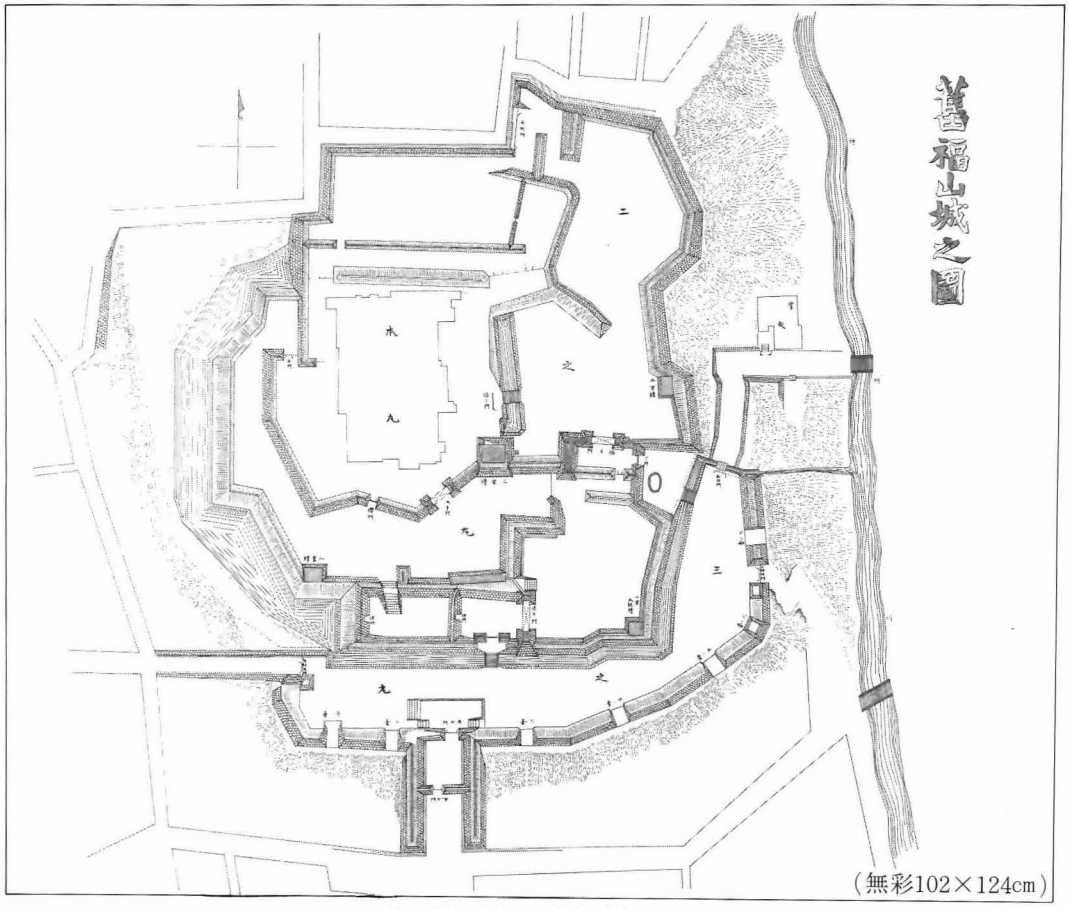
これは、大正４年８月に模写した第31図を複写浄書し「北海道史」に掲載された資料であり、文字等が読みやすいので、部分拡大し掲載した。

さて、このうち発掘調査の結果と対比できる資料は、第31㉟・34図である。第31図と第34図との違いは、前者は幕吏が現地を実測した資料で、完成図と言える。また、後者は設計図といえる。これら絵図と発掘調査の結果を対比させることによって、それぞれの遺構の規模などが実施段階でかなり変更されたことがわかるとともに、発掘調査で解明できなかった遺構などを推定復元することも出来る。以下34図と35図を用いて両者の違いと調査の結果を合わせて述べる。

○三本松土居廻り

この土居周り枡形の四面の石垣の寸法表記の違いを見てみたい。まず、三本松土居南側にある34図Ａ～Ｂ間の外堀から搦手枡形に向かう土居石垣の寸法は「15間」、35図では「15間ヨ」と記載されている。

同じく西側にある、搦手枡形二の門を含む石垣の延長34図Ｂ～Ｃ間は「12間４尺」とあり、35図では、北側土居石垣が「２間２尺」で、二の門が「２間４尺」、南側土居石垣が「７間半ヨ」

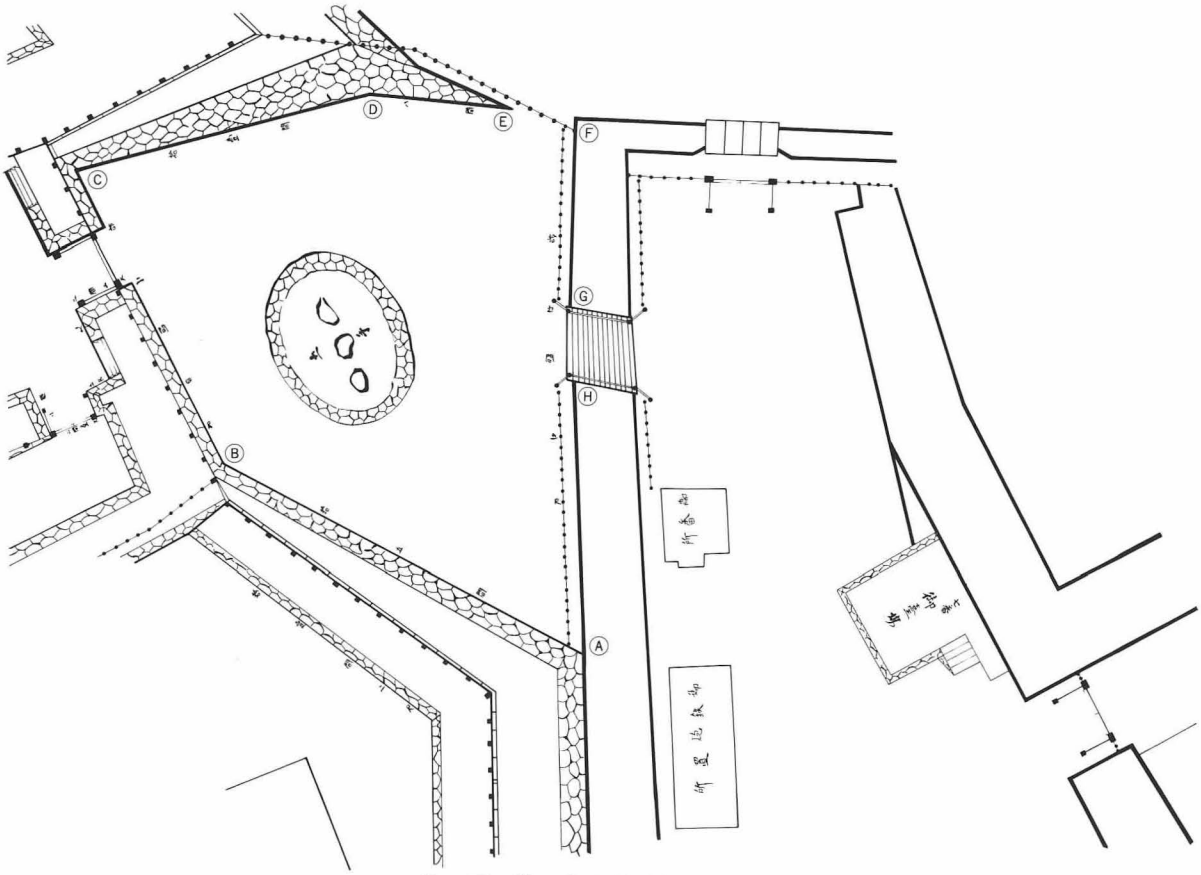


第33図　絵　　図（4）

とあり、都合12門半ヨとなり、34図の12間４尺と近値であることがわかる。

また、三本松土居北側にある、外堀終端角から搦手枡形に至る土居石垣は 4図が「11間」と「8間」に分けて書かれ、35図では「16間半ヨ」と書かれており、２間２尺余の差がある。34図の「11間」の長さを絵図に落とすとＣ～Ｄ間に合致する。また、「8間」の長さを絵図に落とすとＤ～Ｆ間に合致する。Ｄ～Ｅ間の距離は５間２尺余あり、これにＣ～Ｄ間を加えると、Ｃ～Ｅ間は16間２尺余となり、35図の「16間半ヨ」は34図の16間２尺余より約１尺長いことになる。

次に外堀の34図Ａ～Ｆ間では「19間５尺」とあり、35図では「９間ヨ」と「８間ヨ」とあって、橋に「２間４尺」と書かれていることから同一寸法のように思われた。しかし、発掘調査の結果Ａ～Ｆ間を19間５尺で取ると、搦手に延びる土居掘り方に石垣が収まらない。また、35図中に描かれた内堀に掛かる橋や、大手枡形赤門に掛かる橋を見ると、幅と長さはそれぞれの縦横方向に書き分けていることがわかる。したがって、橋に書かれた「２間４尺」は、橋の長さであろうと推測できる。また、外堀幅は、34図に14尺で描かれているので、35図の16尺の橋を架けることが可能である。当初の設計では、34図Ａ～Ｈ間が60尺で、橋の幅が16尺余、そしてＧ～Ｆ間が42尺余で119尺（19間5尺）とする予定であったようだ。ところが完成図の35図では、Ａ～Ｈ間が48尺余で、Ｇ～Ｆ間が54尺余となり橋の位置が変わっている。次に、橋の幅を推定すると、発掘調査



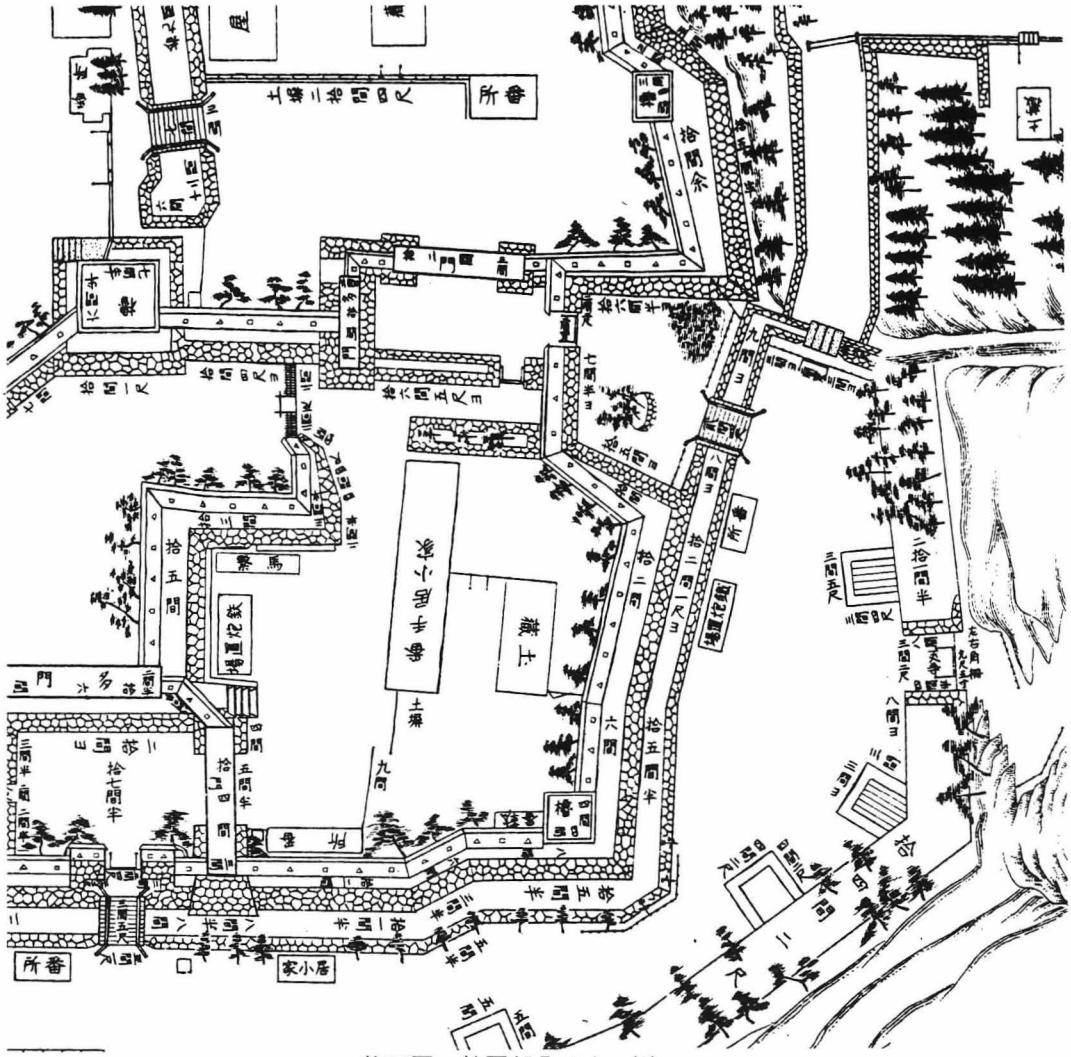
第34図　絵図部分拡大(1)

の結果Ａ～Ｆ間の石垣天端長が外堀中仕切南側石垣二の丸側下場を起点として34.8ｍ程（114.85尺）となるので、Ａ～Ｈ間が48尺余とＧ～Ｆ間が54尺余を引くと、12尺程に収まる。したがって２間幅の橋が推定できよう。

また、三本松土居の規模は、34図では南北の長軸が40尺、東西の短軸が30尺であるが、発掘調査の結果と比較すると、南北だけが10尺長く50尺で作られていた。

○天神坂門廻り

まず、天神坂門の両側にある石垣間は、両絵図とも20尺であり調査の結果とも合致する。次に石垣の延長は、南側では34図が16.6尺で、35図が「４間半」(27尺）とあり、調査の結果は26尺余であった。北側は、34図では途切れており不明。35図では「８間」(48尺）とあり、調査では20尺



第35図　絵図部分拡大　(2)

まで根掘を確認したが、これを延長させた坂の角までの石垣の延長が48尺余あるので、これを計測したものと推定できる。慶応３年の写真にもこの石垣が撮影されている。

つぎに控柱を見ると35図に「１丈５寸」(3.1815m）とあり、調査の柱穴内側間3.15mに収まり35図の「１丈５寸」は内法寸法であることがわかる。しかし、34図の控柱間の内法は12尺近くになり、 5図そして調査結果と大きく異なる。ただし、門柱礎石と控柱柱穴との柱間は７尺でほぼ調査結果と一致している。また、35図に「左右角柵９尺５寸」(2.8179m）と二段に分けて書いてあるのは不明である。

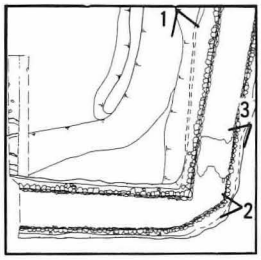
以上のように絵図と調査遺構を対比すると、工事実施段階で設計変更を行っていることが、34・35図と調査遺構を比較することで判る。また、幕吏の実測した35図には、細部について余り書き込まれていないので、詳細な寸法は34図が有効となろう。外堀延長については、外堀の南東隅がわかったことによって、35図の寸法は、おそらく二の丸側石垣天端を測定しているものと思われる。図上ではある程度追うことができるが、その起点と終点の位置が、石垣石積みの勾配によって大きく異なると思われるので、石垣高と勾配が明らかになった段階で報告したい。

今年度の調査で、絵図との対比が極めて有効であることが再確認された。また、三本松土居の築城当時の勾配を推定できる資料が得られた。そして、余り触れなかったが三本松土居頂部と天神坂門の標高が明らかになったことで、慶応３年に撮影された写真から、各遺構の標高差を推定することが可能になったことは、大きな成果であると思う。

来年度の調査地は、いよいよ二の丸の隅櫓（太鼓櫓）と土蔵、そして搦手門が予定されている。撹乱が著しい地域であることは、今年度外堀から二の丸に入れたトレンチ調査でわかっている。さらに困難な調査が予測され、十分な資料準備が必要とされるところである。

今回ここまで成果が得られたのも、ひとえに文化庁をはじめ、史跡整備検討委員の先生がた、関係各位の御助言のおかげと感謝いたします。これまでの調査の成果を継承し、より具体的な復元のためのデータが得られればと願う次第です。

写　真　図　版

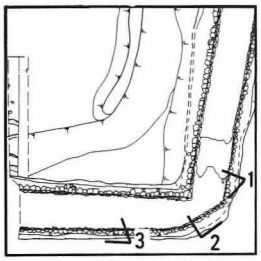


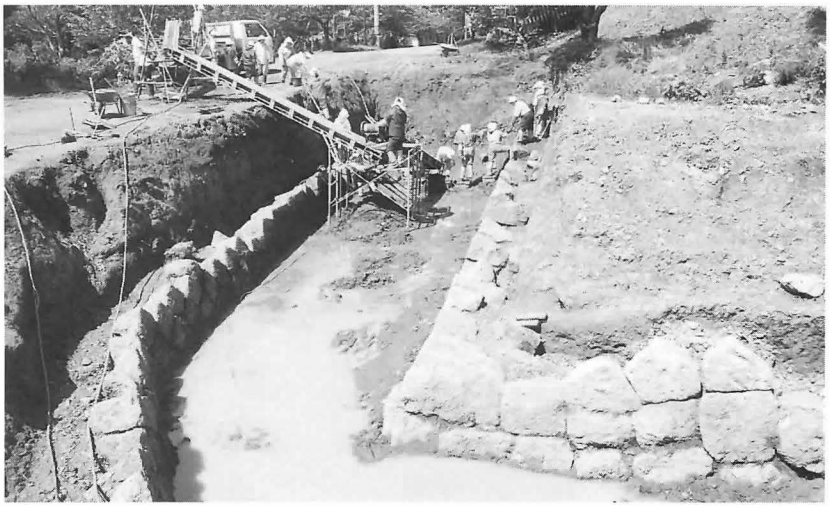
1
外堀調査前

2
外堀をバックホーにより堀底部ヘドロ層上面まで開削

3
バックホーによる開削後ヘドロ層及び掘方を調査

図版 2　外堀調査状況(2)

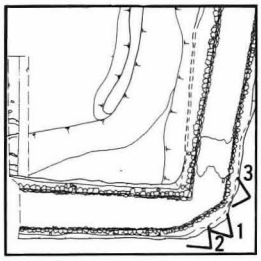




1
外堀の掘方及び石垣が明らかになる

2
石垣清掃及び石垣裏込精査状況

3
外堀より北側に続くトレンチ開削状況

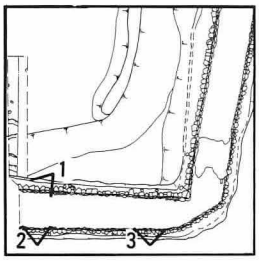


1
中央の土手上が二の丸となりここに二重櫓（太鼓櫓）が建てられていた

2
砂質ローム層をほぼ垂直に切った掘方で、石垣石は直に敷く

3
画面左下隅の堀底面は岩盤（地山）を掘り込む

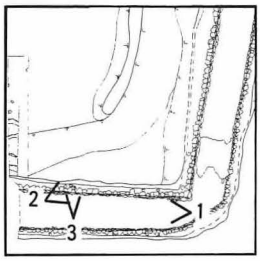
図版4　外堀セクション



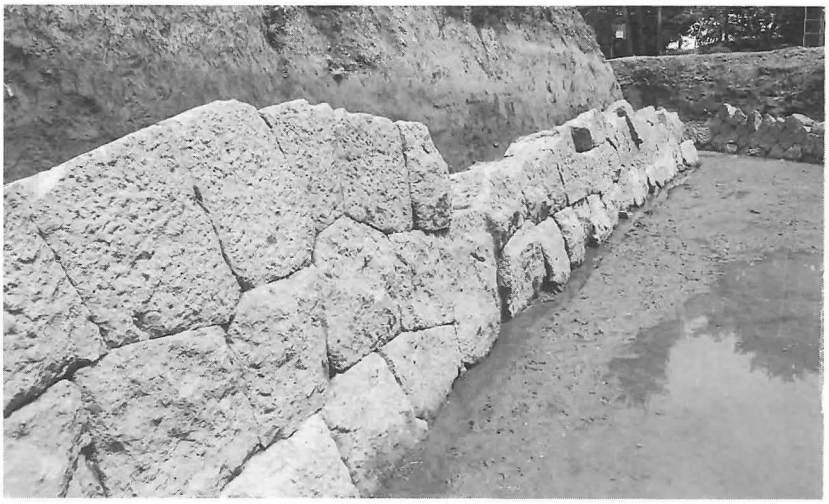
1
外堀埋土上位の水平方向の堆積は明治8年以降で、斜め方向の堆積は明治7～8年である

2
ローム層より上位は明治9年以降の堆積及び撹乱

3
ローム層より上位はロームと暗褐色土の互層となる



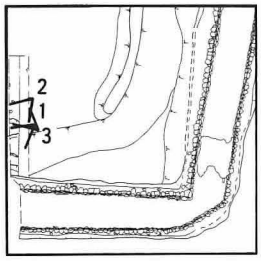
1
区画により石垣石の大きさと石積みの技法が異なる



2
二の丸側の石垣は大型の石垣石を用い継ぎ目に隙間が無い

3
印（今）が認められた。

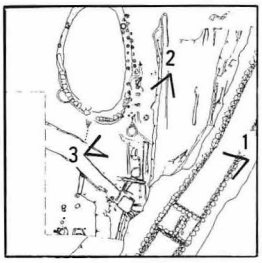
図版 6　外堀北側トレンチ



1
ローム（地山）を段状に削り土手を形成する（福山館）

2
トレンチ底面の礎石は福山城の前身福山館時代

3
画面右側トレンチ内の段の上面が福山城時代の生活面

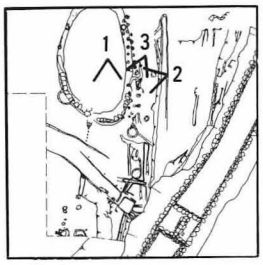


1
三本松土居南側調査前中央桜下位石垣は明治８年以降

2
三本松土居南側調査状況コンクリート製道路があり電気ピックで除去

3
三本松土居東側調査状況

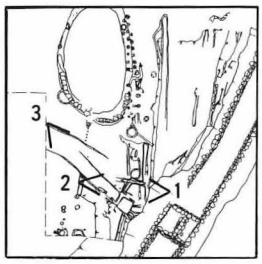
図版 8　三本松土居セクション



1
土居頂部ロームと
褐色土の互層上面
が幕末期の表土

2
手前野面石積は大
正10年以降で柱穴
は明治以降大正以
前で２回建て換え

3
セクション壁際柱
穴は明治初年上位
縁石は幕末築城時

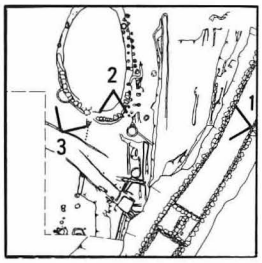


1
石段は明治～大正期で被る堆積土（砕石）は大正10年

2
右下地山盛り上がりは築城時地山面

3
大正10年溝セクション右側底面よりの段は築城時の石垣掘込面と共通

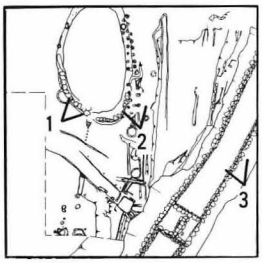
図版10　三本松土居周辺近代遺構(2)



1
近代遺構全景左側
石段の両側石垣は
明治以降昭和まで
存続石段奥の溝は
大正10年掘削

2
石段周辺は明治～
大正10年の地形手
前はトレンチ調査

3
明治期三本松土居
南側地形

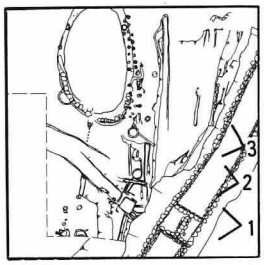


1
三本松土居石垣検出状況裏込め砂利を被る褐色土上面が明治期の表土面

2
三本松土居東側の柱穴列は石垣に接して並び明治初年

3
復元した外堀石垣直上に並ぶ石列は明治以降で下位の段が外堀を渡す橋の基部であった可能性が高い

図版12　三本松土居周辺完掘状況

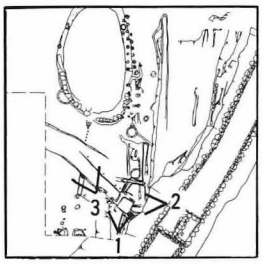


1
外堀から立ち上がる石垣上端は地山を削り出した土手斜面下端で止まる

2
中央下位一対の円形ピットの時期は明治以前不明遺構

3
調査により三本松土居周辺の景観が時代色を強めた

図版13　外堀より搦手へ延びる石垣

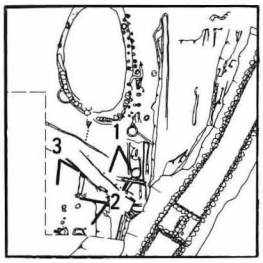


1
明治～大正期石段下位に石垣根掘検出さらにこれを切る遺構を検出

2
石垣根掘を切る枡型遺構は明治期で枡の２辺に石組を配す

3
石垣根掘の溝は上位大正中期の幅の広い溝に切られる

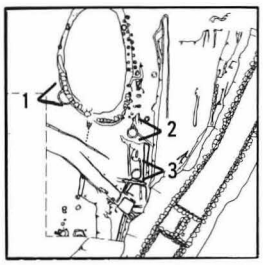
図版14　土手及び土塀



1
明治期枡型遺構構築に関わり土手斜面全体を削り取って地山の段を形式した可能性が高い

2
奥の柱穴は土塀に関わる遺構の可能性がある

3
左側のやや深い溝は土塀に関わる遺構の可能性が高く右側の溝は近代のコンクリート基礎

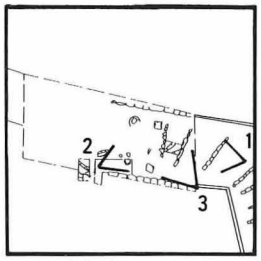


1
三本松石垣石下位に検出された福山館時代井戸跡

2
明治期遺物層を剥ぎ不定形プランを確認しさらに掘り円形プランを確認

3
明治期遺物層を剥ぎ地山面を出し円形プランを確認

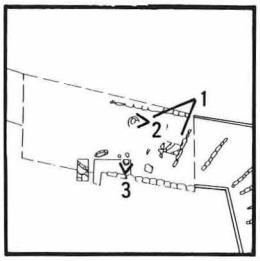
図版16　天神坂門調査状況



1
簡易舗装を剥がした段階での調査前状況

2
縁石・門柱礎石・控柱柱穴検出状況穴

3
縁石・礎石とも表土下位にあったが縁石は幕末以降で門とは時期が異る

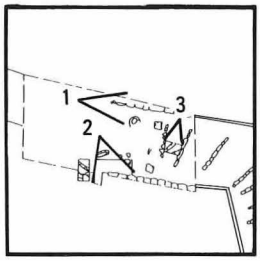


1
縁石は福山城時代敷かれていたと思われる黒色玉砂利層の上に乗る

2
正面右側控柱柱穴内部に鎹を検出、第27図27に図示

3
正面左側控柱柱穴内部にも鎹を検出第27図25に図示

図版18　天神坂門石垣細部



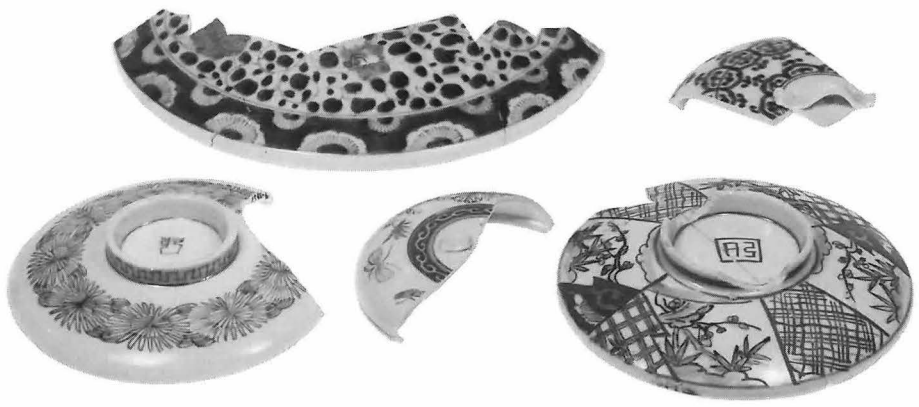
1
最下位の石垣石列が福山城時代で2段目以降の石垣復元の際面を合すため角が削られた

2
最下位の石垣石列が福山城時代で中央横長石以上は復元石垣で裏込石は詰められていない

3
ロームから遺物は出土せず自然地形を削平し造成両側の縁石は幕末以降

図版19　手塩皿・蓋・その他（1～21）

（1～10）

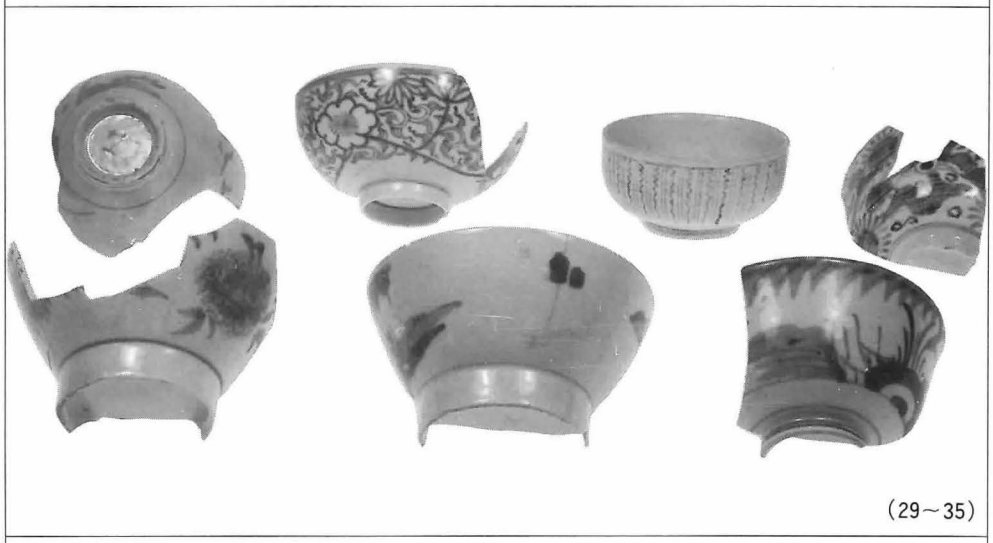


（11～15）

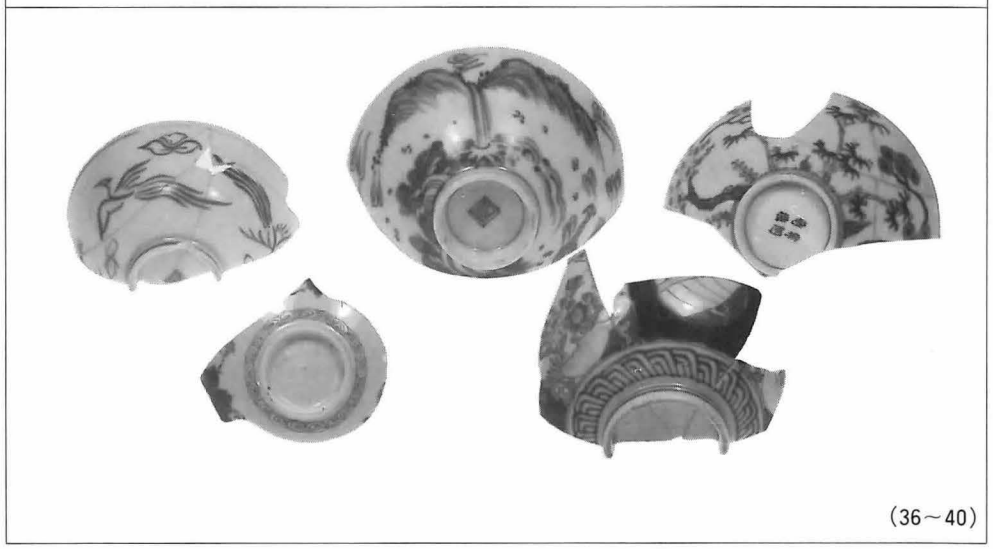
（16～21）

図版20　蓋・碗類（22～40）

（22～28）



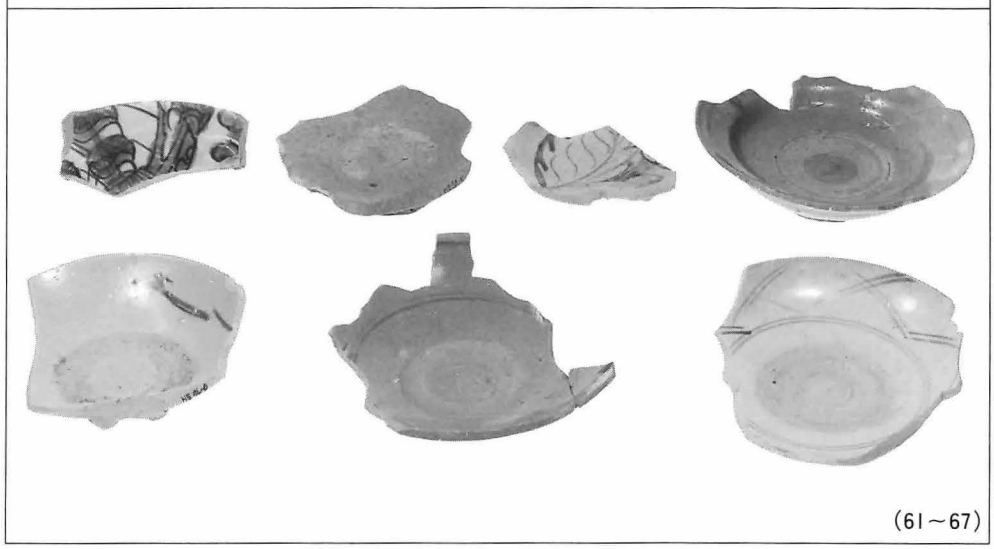
（29～35）



（36～40）

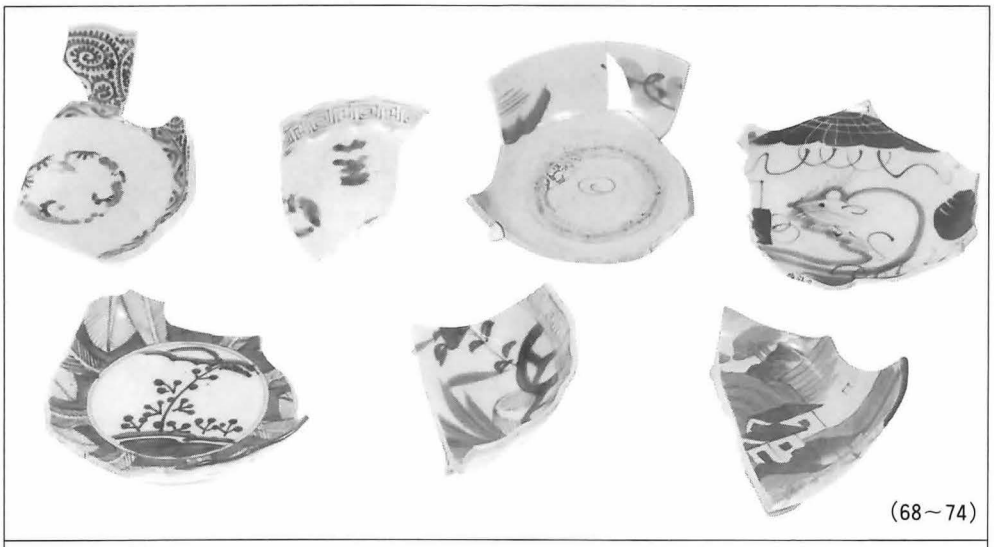
（41～55）

（56～60）



（61～67）

図版22　皿・大皿（68～76）

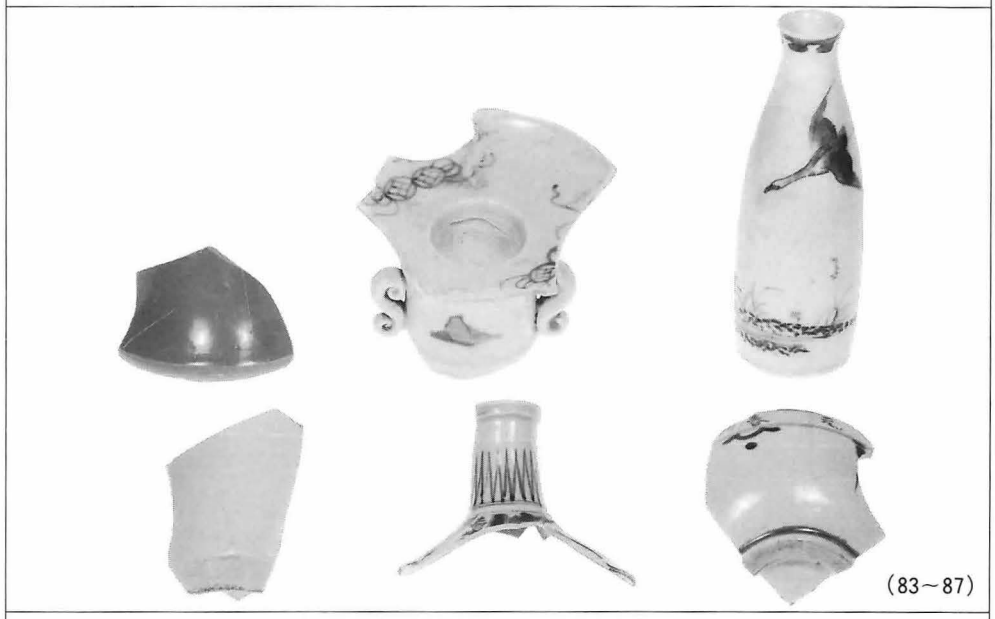


（68～74）

（75）

（76）

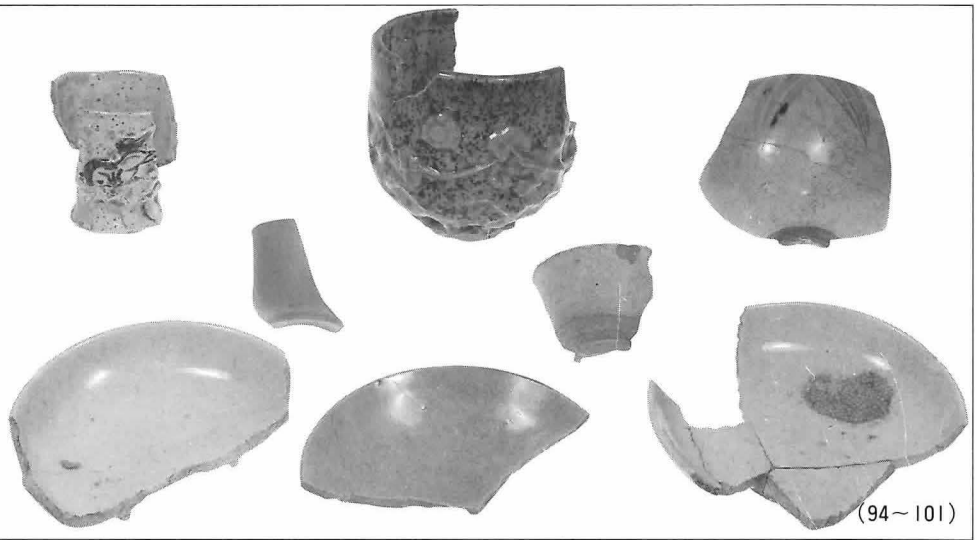
（77～82）



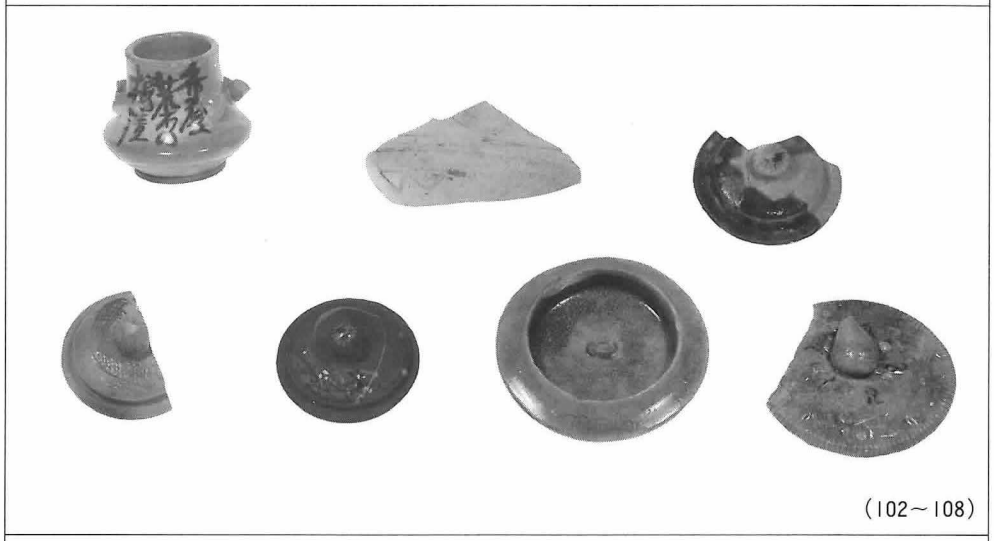
（83～87）

（88～93）

図版24　陶器類（94～112）



（94～101）



（102～108）

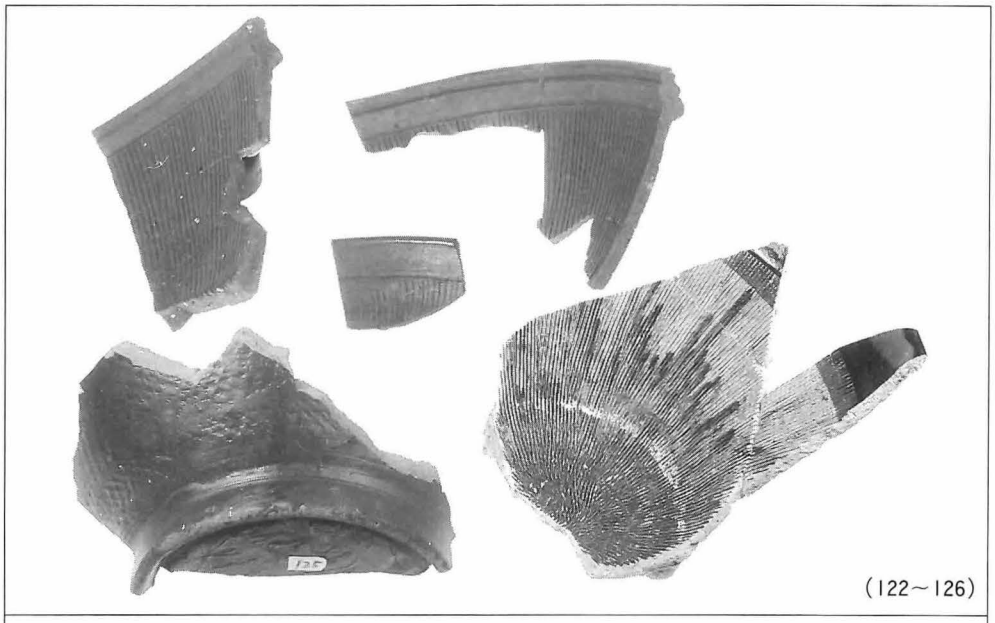
（109～112）

（113～115）

（116～118）

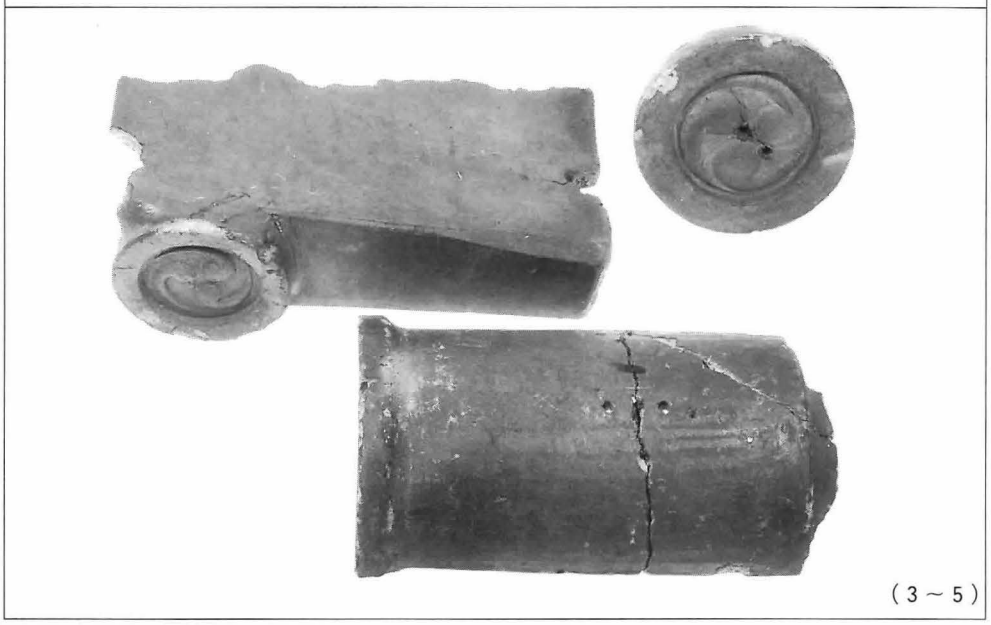
（119～121）

図版26　擂鉢(122～126)・瓦類(1～5)



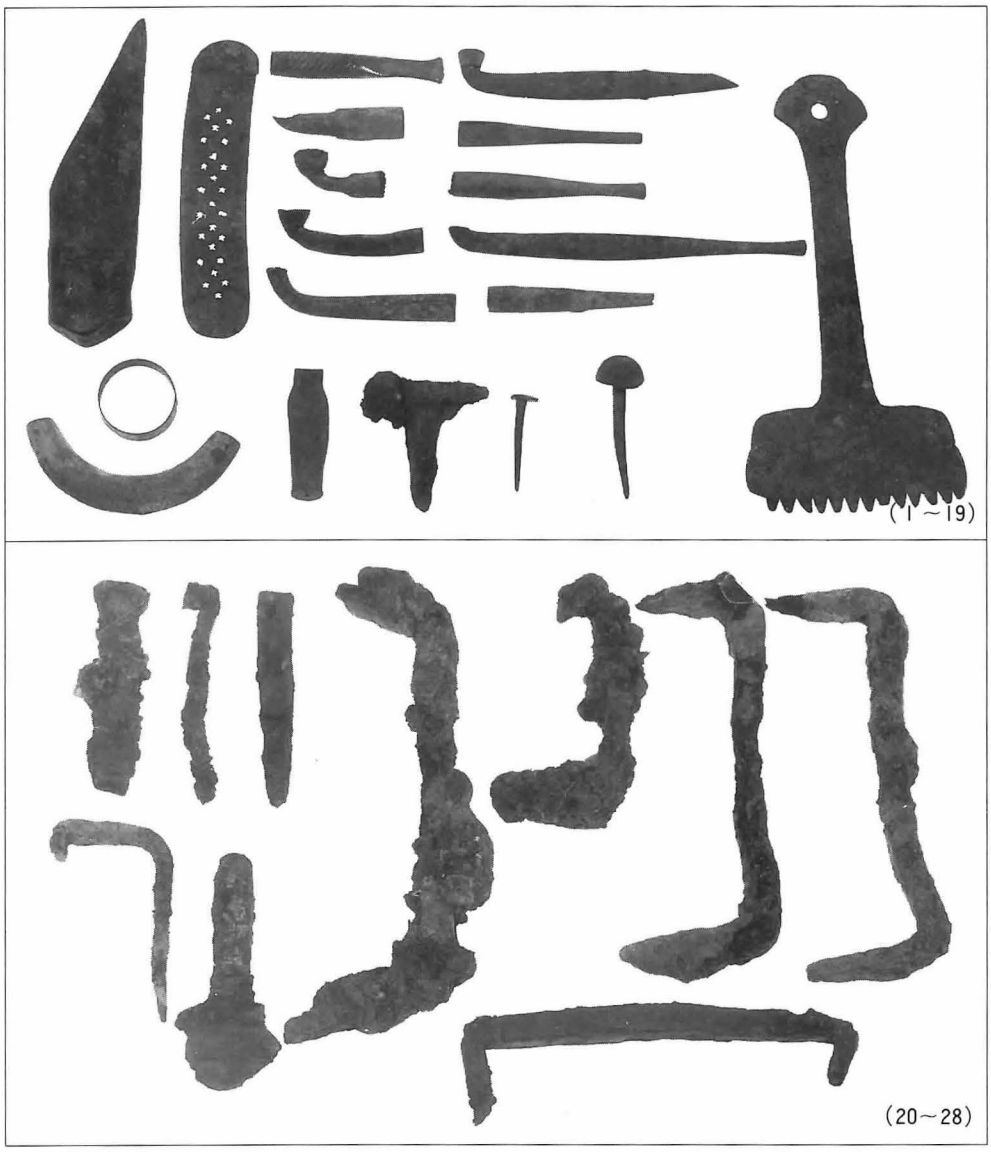
(122～126)

(1～2)

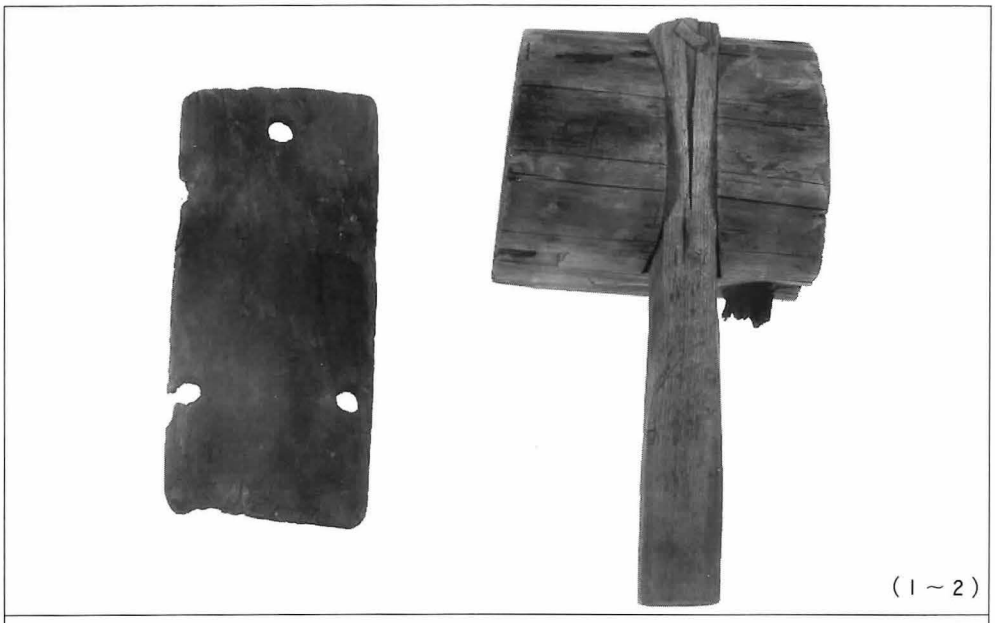


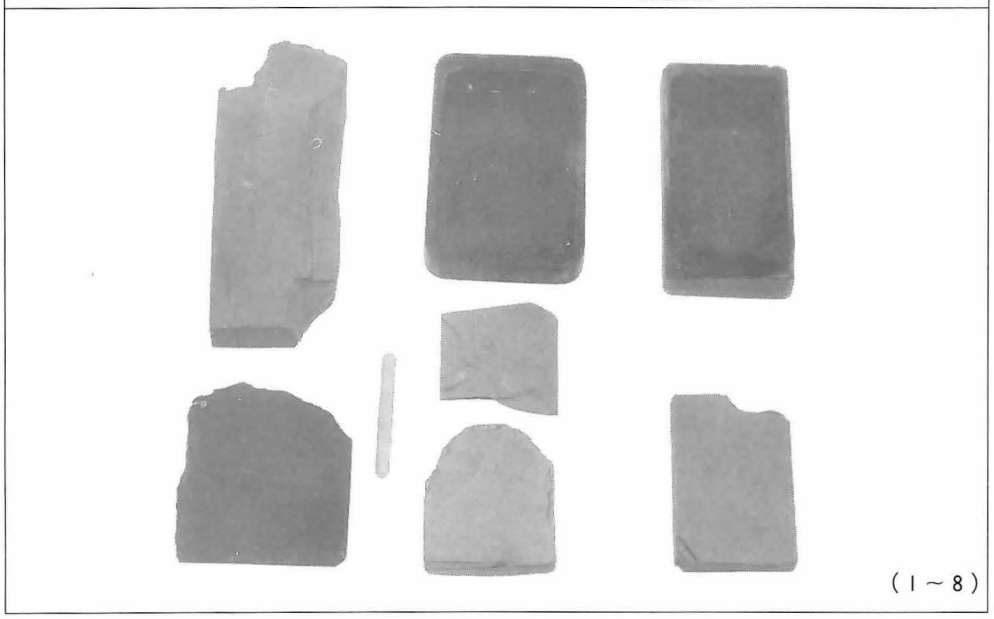
(3～5)

図版27　金属製品（1～28）



図版28　木製品（1～2）石製品（1～8）





史跡 福 山 城 XI

平成５年度
発掘調査概要報告

発　行　平成６年３月25日
発行者　北海道松前町教育委員会
〒049-15　北海道松前郡松前町字神明30
01394-2-3060
印　刷　カジヤ印刷

史跡福山城XI

平成 5 年度 発掘調査概要報告

電子版

2025 年 2 月 20 日　第 1 刷

発行者　北海道松前町教育委員会

〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明 30

TEL:0139-42-3060／FAX:0139-42-2211

WEB:https://www.town.matsumae.hokkaido.jp/bunkazai/

MAIL:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp

底本：史跡福山城XI　平成 5 年度 発掘調査概要報告

（1994 年 北海道松前町教育委員会発行）

この電子書籍は閲覧を目的としているため、不鮮明な図版や誤字が含まれる場合があります。必要に応じて、お近くの図書館等で底本をご利用ください。